茨木市埋蔵文化財発掘調査

概　　要

平成２年度

1991

茨木市教育委員会

序　　文

茨木市は、北摂山地と淀川北岸にひろがる三島平野の中央部に位置し、古くから文化遺産に恵まれた土地で、日本でも有数の弥生時代の大遺跡である東奈良遺跡をはじめとする全国的に著名な遺跡が多くあります。

大阪と京都の中間に位置する本市は、1970年以降北摂地域の中核的都市として発展し、多くの遺跡が発見され、そして消えていきました。

今回報告する東奈良遺跡の所在する南茨木周辺は、近年まで静かな田園地帯でしたが、最近、近郊のベットタウンとして大きく変貌しつつある地域です。東奈良遺跡も1970年頃に発見された遺跡で、南茨木周辺の開発にともなって発掘調査を実施してきました。

現在までに発掘した東奈良遺跡の調査面積は、ほんの僅かですけれども、多くの先人たちが残してくれた生活の痕跡から、多くのことを学びとっていくことは、現代の社会・文化を理解するうえで、なくてはならない作業だと思います。

また、多く先人たちが残してくれた貴重な文化遺産を現代の生活にいかし、後世に残し伝えていくことを認識しなければならないと思います。

本書の刊行が、地域の歴史を理解するうえで、お役に立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に深いご理解と惜しみないご協力をいただきました関係各位の皆様に厚く感謝いたします。

平成3年3月31日

茨木市教育委員会
教育長　村山　和一

例　　言

1．本書は、大阪府茨木市沢良宜西１丁目42－２、同市東奈良２丁目757－１に所在する東奈良遺跡の発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は茨木市教育委員会が、それぞれ平成２年１月12日～２月９日と平成２年４月７日～６月13日の期間に実施した。

3．発掘調査は、HN　I－4－D・I－5－4（89－4）地区を井上直樹（元茨木市教育委員会非常勤嘱託員）が担当し、中東正之が主任調査員となってこれを補佐した。HNG－7－C・G・K（90－1）地区を濱野俊一（茨木市教育委員会非常勤嘱託員）と中東正之（茨木市教育委員会非常勤嘱託員）が担当した。また、調査補助員として、藤田昌宏、大戸井浩一郎、林和博、桑原紀子、大戸井和江、森木芳子、早川博子、峯松晧代、田中良子、西坂泰子、耕田さゆり、吉田和美、藤田明弘、原口武、高瀬隆治の参加協力があった。

4．調査に際して、兔山篤（茨木市文化財研究調査委員会委員）から御指導、御教示を賜った。内業整理作業にあたっては、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、森田克行（高槻市埋蔵文化財センター）、古川久雄（芦ノ芽グループ）、福田薫・今井直美（箕面市教育委員会）、新田洋・田村陽一・増田安生・河北秀実・江尻健（三重県埋蔵文化財センター）、中嶋郁夫（磐田市教育委員会）、贄元洋（豊橋市美術館）、前田清彦（豊川市教育委員会）、久野正博（浜北市教育委員会）、岡田登（皇学館大学）などの諸氏から有益な御教示を賜った。また、原因者の堀木篤、川本久、田尻昭治、そして、㈱柴田土地建物、㈱小林工務店、㈱掛谷工務店、㈱島田組にも種々協力を得た。関係者に対し、記して感謝の意を表します。

5．本書を作成するにあたっては、出土遺物実測及びトレースは濱野・西坂、遺物写真は濱野・中東、編集は濱野、執筆はそれぞれ濱野・中東が行い、文末に明記した。

6．東奈良遺跡の地区割りは、昭和47年設定したものを使用している。
また、標高は、T・P（東京湾標準高）を使用している。

目　　次

Ⅰ　地理的・歴史的環境

Ⅱ　東奈良遺跡の既往の調査

Ⅲ　東奈良遺跡（89－4）、HN　Ⅰ－4－D・Ⅰ－5－A
1．調査経過
2．調査の概要
3．基本層序
4．遺構・遺物

Ⅳ　東奈良遺跡（90－1）、HN　G－7－C・G・K
1．調査経過
2．調査の概要
3．基本層序
4．検出遺構
Aトレンチ
Bトレンチ
5．出土遺物

Ⅴ　まとめ

挿図

第１図　東奈良遺跡周辺遺跡分布図
第２図　東奈良遺跡地区割り及び調査地域図
第３図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，遺構平面図及び断面図
第４図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，遺構セクション図
第５図　出土状況図東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，井戸－１出土状況図
第６図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，土壙－１・２土器出土状況図・掘立柱建物平面図・断面図
第７図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，出土遺物(1)
第８図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，出土遺物(2)
第９図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，出土遺物(3)
第10図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，遺物観察表(1)
第11図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，遺物観察表(2)
第12図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，遺物観察表(3)
第13図　東奈良遺跡（89－４）ＨＮ　Ｉ－４－Ｄ・Ｉ－５－Ａ，遺物観察表(4)
第14図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＤ－01断面図
第15図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ遺構平面図及び断面図
第16図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ｂトレンチ遺構平面図及び断面図
第17図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＤ－01遺物出土状況図
第18図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＤ－01埋土最上層出土土器図
第19図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＸ－01，ＳＸ－02出土土器図
第20図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＰ－01断面図・出土銅鏃図
第21図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７・Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ｂトレンチ，ＳＢ－01他出土土器図
第22図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７・Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ｂトレンチ，ＳＴ－01検出状況図
第23図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ｂトレンチ，ＳＴ－01出土土器図
第24図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７・Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＤ－01出土土器図(1)
第25図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＤ－01出土土器図(2)
第26図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ａトレンチ，ＳＤ－01出土土器図(3)
第27図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，Ｂトレンチ，ＳＤ－01出土土器図
第28図　東奈良遺跡（90－１），ＨＮ　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ，包含層出土遺物図

図版

図版1　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A，検出遺構(1)
図版2　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A検出遺構(2)
図版3　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A検出遺構(3)
図版4　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A出土遺物(1)
図版5　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A出土遺物(2)
図版6　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A出土遺物(3)
図版7　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A出土遺物(4)
図版8　東奈良遺跡（89－4）HN　G－7－C・G・K検出遺構(1)
図版9　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K検出遺構(2)
図版10　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K検出遺構(3)
図版11　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K検出遺構(4)
図版12　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K検出遺構(5)
図版13　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K出土遺物(1)
図版14　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K出土遺物(2)
図版15　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K出土遺物(3)
図版16　東奈良遺跡（90－1）HN　G－7－C・G・K出土遺物(4)

1．東奈良遺跡
2．中条小学校遺跡
3．目垣遺跡
4．溝咋遺跡
5．牟礼遺跡
6．鮎川遺跡
7．駅前遺跡
8．上中条遺跡
9．倚賀遺跡
10．郡遺跡
11．王口市遺跡
12．耳原遺跡
13．安威遺跡
14．太田遺跡
15．太田廃寺
16．総持寺遺跡
17．春日遺跡
18．中河原遺跡
19．郡山遺跡
20．宿久庄遺跡
21．宿久庄西遺跡
22．西福井遺跡
23．新屋古墳群
24．将軍山古墳群
25．真龍寺古墳群
26．安威古墳群
27．地蔵池南遺跡
28．弁天山遺跡
29．石山古墳
30．太田条円山古墳
31．紫金山古墳
32．青松塚古墳
33．南塚古墳
34．海北塚古墳
35．耳原古墳
36．初田一号墳
37．初田二号墳
38．将軍山古墳
39．見付山古墳
40．上寺山古墳
41．郡山古墳群
42．長ヶ瀬古墳群
43．桑原古墳群
44．大門寺古墳群
45．石堂ヶ丘遺跡
46．泉原遺跡
47．三宅遺跡
48．常楽寺跡
49．西方浄土寺跡
50．勝稲廃寺
51．阿武山古墳
52．古曽部南遺跡
53．天神山遺跡
54．奥天神町遺跡
55．慈願寺山遺跡
56．芥川遺跡
57．上田部遺跡
58．郡家川西遺跡
59．川西古墳群
60．津之江南遺跡
61．郡家今城遺跡
62．宮田遺跡
63．氷室遺跡
64．ソゲノ遺跡
65．弁天山古墳群
66．郡家本町遺跡
67．大塚西遺跡
68．柱本南遺跡
69．柱本遺跡
70．淀川床遺跡
71．昼神車塚古墳
72．郡家今城塚古墳
73．氷室塚古墳
74．前塚古墳
75．郡家車塚古墳
76．御防山古墳
77．弁天山A1号墳
78．弁天山B1号墳
79．弁天山C1号墳
80．番山古墳
81．土保山古墳
82．二子山古墳
83．千里古窯跡群
84．垂水遺跡
85．垂水南遺跡
86．蔵人遺跡
87．高志部遺跡
88．古志部瓦窯跡
89．古志部古墳
90．片山古墳
91．新芦屋古墳
92．郡居須遺跡
93．垂水西原古墳
94．北条遺跡
95．小曽根遺跡
96．若竹遺跡
97．寺内遺跡
98．和道遺跡
99．如意谷遺跡
100．池ノ内遺跡

第１章　地理的・歴史的環境

茨木市は、大阪府の北東部に位置し、市域は、南北17.3km、東西8.6kmの南北に長く、東西に短い市域を形成している。地理的特徴としては、北半部は標高300ｍ前後の古生層系の丹波山地につらなる北摂山地、及びそれから派生する丘陵部からなり、西は標高80ｍ前後の前期洪積層の隆起地形の一つである千里山丘陵、東と南は淀川・安威川などの河川によって形成された沖積層の三島平野が広がっている。また、北摂山地に源を発する安威川・佐保川・勝尾寺川の三つの主流河川が北から南へ三島平野を流れ、大阪湾にそそいでいる。東奈良遺跡をはじめとする茨木市の遺跡は、淀川中・下流域北岸に広がる北摂地域に属している。

茨木市及び周辺での最古の人類の足跡は、旧石器時代後期の国府型ナイフ型石器や有舌尖頭器が、山間部の初田遺跡で、丘陵部裾の太田・耳原・郡・福井遺跡等で発見されている。周辺では、北部の高槻市に、旧石器時代の礫群や石器群が検出された高槻市郡家今城遺跡がある。ほかに塚原遺跡・津之江南遺跡・郡家川西遺跡などから旧石器が発見されており、安威川東岸に旧石器時代の遺跡が多数集中している。また、南部の吹田市吉志部遺跡においても、旧石器時代の国府型ナイフ型石器や有舌尖頭器が検出されており、ほかに同市小路及び箕面市粟生間谷（奥地区）でも、それぞれナイフ型石器・有舌尖頭器が発見されている。

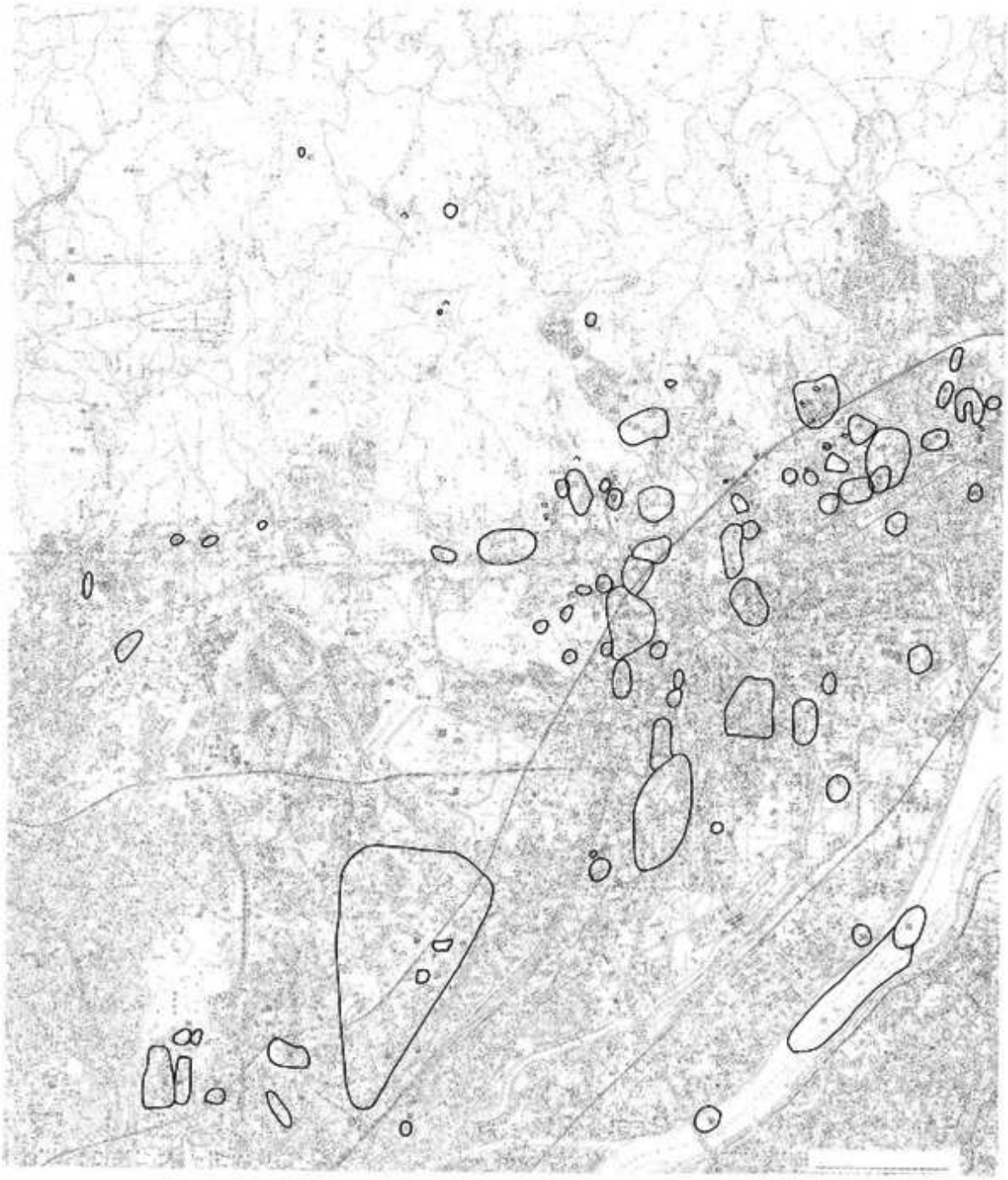
縄文時代の遺跡は茨木市及び周辺では少なく、近年の発掘調査によって、市内では茨木川と安威川にはさまれた舌状台地に立地する耳原遺跡から縄文晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅴ式・長原式）の土器棺墓群、そして安威川右岸の沖積地に立地する牟礼遺跡では、縄文晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式）の土器・自然流路・井堰・水田跡が検出されている。そのほか、断片的な遺物としては、東奈良遺跡で弥生時代の包含層から縄文前期末（大歳山式）の爪形文（Ｃ字）土器、弥生前期の溝から東北地方の縄文晩期後半（大洞ＡないしＡ′式）に併行する浮線文土器、縄文中期の石棒も出土している。また、安威川左岸の丘陵上に立地する初田遺跡そして太田・西福井遺跡でも縄文土器が発見されている。

本市近隣地域では、北部の高槻市の宮田遺跡で縄文後期の一括資料が検出されており、安満・郡家川西・塚原・塚穴・天神山遺跡そして淀川河床に所在する柱本・大塚遺跡において縄文土器が出土している。南部の吹田市吉志部遺跡においては、縄文晩期の突帯文土器が落込みから出土している。北西部の箕面市では、学史的にも著名な瀬川遺跡があり、縄文時代前期（北白川下層式）と後期（元住吉山・宮滝式）の土器が出土している。また、新稲・如意谷・白鳥遺跡でも縄文土器や石器が発見されている。

弥生時代になると、市内においても遺跡数が増加する。北部九州から東進してきた初期水稲農耕を初めとする弥生文化は、大阪湾から淀川を北上し、茨木市にも急速に広がっていく。

市内の弥生前期の遺跡は最初、東奈良・目垣遺跡に集落を形成し、その後、安威川を遡

第1図



上した弥生集落は、同河川の左右両岸に位置する耳原[1]・郡[2]にも集落を形成する。弥生中期以降は、市内の二つの主流河川の両岸あるいは、丘陵部や山地部まで広がり、中河原・太田・中条小学校・溝咋・春日・倍賀遺跡そして高地性集落である石堂ケ丘遺跡などが出現する。

本市近隣地域では、北部の高槻市に東奈良遺跡と同じく拠点的集落と考えられている安満遺跡がある。旧桧尾川左岸の扇状地に立地し、弥生前期から中世にかけての集落を形成しており、安満遺跡以外にも平野部には郡家川西・芥川遺跡が存在する。丘陵上には天神山遺跡があり、弥生中期の集落と西の中央台地から銅鐸が出土している。また、北摂山地の尾根上には、高地性集落と呼ばれる古曽部・紅茸山・萩之庄遺跡がある。南部の吹田市域においても、弥生中期から後期にかけての高地性集落である垂水遺跡があり、その南には垂水南遺跡が位置している。また、弥生後期になると、高川左岸に蔵人遺跡、糸田川流域に五反島遺跡が出現する。また、千里丘陵の東の山田別所からは、外縁付鈕式銅鐸が単独出土している。北西部の箕面市では、弥生時代の遺跡は少なくが、箕面川左岸の池ノ内遺跡から弥生中期の土器がまとまって出土しており、如意谷遺跡からは突線鈕式銅鐸が単独出土[3]している。特に池ノ内遺跡は弥生時代の集落が存在することが確実視されるため、今後の調査が期待される。その中でも本市の東奈良遺跡は、弥生前期から中世まで続く遺跡で、東西約1km、南北約1.4kmの範囲をもつ集落であり、北摂地方の拠点的集落のひとつと考えられている。

この東奈良遺跡を既成調査から地形細分すると、遺跡の西側を千里丘陵を源とする大正川、東側を元茨木川が流れ、東から南に低湿地を形成している。そして、現在の中央環状線沿いに大きな谷が存在し、遺跡を東西に二分している。また、東側は、標高7～8mの微高地が広がり、上部洪積層の位置も浅く、排水性の良い沖積層になっている。それに対して西側は、標高差は変わらないが、上部洪積層の位置も深く、含水性の高い複雑な砂層や粘土層で形成された沖積層が広がっている。

現在までの調査の結果、東奈良遺跡は弥生時代前期中頃に成立し、弥生時代中期に最も発達する。特に畿内や九州の拠点的集落と同様に集落のまわりに環濠を巡らせている。そして、畿内では最も古い弥生前期末の方形周溝墓や貯蔵穴・木器溜め、弥生・古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱住居跡などがある。また、東奈良遺跡の特徴としては、遺跡の南東部で完形及び破片の流水文銅鐸の鋳型をはじめ、大阪湾型銅戈の鋳型・ガラス勾玉の鋳型などが出土しており、集落の中に鋳造する工房施設を保有していたと思われる。また、弥生時代中期後半には、東奈良遺跡の分村として中条小学校遺跡が東奈良遺跡の北端部に成立する。

次の古墳時代に入ると、北部の山麓部に、前期古墳でも古式古墳である紫金山古墳、ついで将軍山古墳が相次いで築造される。両古墳とも前方後円墳で、後円部に竪穴式石室があり、断面U字型の粘土棺床をそなえ、割竹型木棺があったと推定され、両古墳から多数

の副葬品が出土している。続いて古墳時代前期末には、安威0号墳及び安威1号墳が築造される。安威0号墳は直径約10mの円墳で、墳頂部には、割竹型木棺を入れた粘土槨が2基（1・2号棺）検出されている。また、安威1号墳は全長約45m、後円部径約30mの前方後円墳で、後円部の墳頂部に東西に主軸をもつ粘土槨2基（1・2号棺）が存在している。

古墳時代中期になると、太田茶臼山古墳（継体天皇陵）が築造される。全長226m後円部径138mの前方後円墳で、周囲には陪冢も現在5ヵ所存在する。そして、北へ隣接する太田石山古墳は、最近の発掘調査の結果、直径約28m前後の周濠をもつ円墳（前方後円墳の可能性もある）で、5世紀前半頃の築造と推定されており、太田茶臼山古墳（継体天皇陵）より、先行して築造されている可能性が高い。

古墳時代後期になると、横穴式石室を主体とする古墳が、安威川・佐保川・勝尾寺川流域の山麓部に出現する。本市では、最も早く横穴式石室を導入したと推定される青松塚古墳が築造され、続いて南塚古墳・海北塚古墳が築造される。そして、安威古墳群・将軍山古墳群・新屋古墳群・長ヶ淵古墳群・郡古墳群（見付山古墳を含む）・真龍寺古墳群・耳原古墳などが築造される。また、古墳時代後期末から終末期にかけて初田古墳・上寺山古墳・阿武山古墳が築造される。

上記の古墳のうちで青松塚古墳は、横穴式石室の玄室プランが正方形に近く、玄室と羨道の境は階段状になっている。また、副葬品も画文帯神獣鏡や馬具などを持っており、川西市の勝福寺古墳と同様に畿内の横穴式石室導入期の古墳と推定される。南塚古墳は前方後円墳で、後円部中央に横穴式石室があり、玄室内には凝灰岩製の組合式石棺が2個ある。奥棺は、一部に縄掛突起が付き長持型石棺の形式を残しており、前棺は家型石棺の形式を持つタイプである。奥棺の北側には、凝灰岩製の石枕が残っていた。副葬品も棺内・棺外とも比較的よく残っており、馬具や水晶切子玉・挂甲・金銅製沓・鉄鏃などが出土している。海北塚古墳は横穴式石室を持つ円墳で、石室を構成する石材は、大きな花崗岩の河原石を使用し、玄室内に緑泥片岩製箱式石棺があるのが特徴で、人物画像鏡を中心に金環・銅環や馬具などが出土している。耳原古墳は直径23m前後の円墳で、中央に巨大な横穴式石室を持ち、玄室奥壁花崗岩の1枚石、側壁3段積みで、玄室内には奥棺に凝灰岩製の家型組合式石棺、前棺は家型刳抜式石棺を持っている。

市内の後期古墳の特徴は、大形単独墳が多く群集墳も古墳1つひとつの規模が大きく、副葬品も比較的豊かな点が指適できる。また、集落遺跡としては、弥生時代から引続き東奈良遺跡・太田・中条小学校・郡・倍賀などで集落が営まれる。

本市近隣地域では、北部の高槻市域で、古墳時代前期から中期にかけて前期の弁天山A1号墳をはじめとする弁天山古墳群を中心に、墓谷古墳群・上保山・石塚・二子塚・番山・闘鶏山古墳がある。また、前塚古墳から凝灰岩製の長持型石棺が出土している。古墳時代後期には、前方後円墳である郡家今城塚古墳や塚原古墳群・塚脇古墳群・慈願寺古墳群な

どの群集墳が形成される。集落遺跡も安満遺跡や大蔵司遺跡・芥川遺跡などで前時代から引続き集落が営まれ、新たに上室の新池一帯に埴輪窯と大形工房を持った集落が出現する。南部の吹田市域においては、前期に相当する垂水西原古墳がある。後期古墳としては出口・吉志部古墳があるが、大型前方後円墳や群集墳は存在しない。しかし、古墳時代後期には千里丘陵東南部に大規模な須恵器窯が多数築かれる。北西部の箕面市では、大形単独墳が点的に分布しており、中尾塚・桜塚・大谷塚・稲荷社古墳があり、池田市から箕面市そして茨木市にかけての北摂山地に大形単独墳が地域おきに点的に分布しており、群集墳が少ないのが特徴である。律令体制に入ってからの市域は島下郡に属するようになる。

島下郡は、新野・宿人（久）・安威・穂積の４郷からなり、島下郡衙は旧山陽道（西国街道）沿いの郡付近にあったと推定されており、近年の発掘調査により、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出されている。また、飛鳥時代から奈良時代頃にかけて創建された氏族寺院の穂積・太田・三宅廃寺があり、特に太田廃寺からは、礎石・舎利容器一具そして軒丸・軒平瓦が出土している。ほかに、安威大織冠山から凝灰岩製の石櫃から三彩釉蔵骨器が発見されている。平安時代前期には、忍頂寺・総持寺が建立されている。中世にはいると、郡・宿久庄・東奈良遺跡などで掘立柱建物や井戸、当時使用していた瓦器・土師器・東播系須恵器・青磁・白磁などの椀・皿・鍋・捏鉢などが検出されており、中世集落の一端が発見されている。

本市近隣地域でも、高槻市の宮田遺跡や上牧遺跡で、そして箕面市の如意谷遺跡、吹田市の都呂須遺跡などで掘立柱建物や井戸などで構成された、中世集落の一端が発見されている。　（濱野）

＜註１＞茨木市教育委員会が実施した耳原１丁目付近における調査で、縄文晩期の甕棺群とともに弥生時代前期の合せ口甕棺（16号棺）が出土している。また、弥生時代前期の土壙－１からは、壺・甕・鉢などが出土している。最近『弥生土器の様式と編年（近畿編Ⅱ）摂津地域』の中で、同土壙の出土土器が図化資料として報告され、同土壙の出土土器は摂津地域において弥生前期後半（摂津Ⅰ－４様式）に位置づけられている。

＜註２＞平成２年度の（仮称）茨木市立中央図書館の建設に伴う発掘調査において、調査区Ｆ－４区の包含層から弥生前期後半の広口壺が検出されている。

＜註３＞箕面市教育委員会の福田薫氏の御教示によると、整地層から弥生中期後半の土器が多数出土しており、遺跡内の近隣から運ばれたものということである。また、古墳時代前期（布留式）の竪穴住居跡が６棟検出されている。

参考文献

1．茨木市史
2．吹田市史・第８巻別編
3．高槻市史・第１巻本編Ⅰ、第６巻考古編
4．箕面市史・第１巻
5．摂津市史
6．東奈良遺跡調査会「東奈良発掘調査概報Ⅰ」1979年
7．東奈良遺跡調査会「東奈良発掘調査概報Ⅱ」1981年
8．茨木市教育委員会「昭和60年度～平成元年度発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ」
9．茨木市教育委員会「耳原遺跡発掘調査概報」
10．茨木市教育委員会「茨木市郡遺跡発掘調査概報－上穂積・畑田地区－」1978年
11．茨木市教育委員会「わがまち茨木－古墳編－」1990年
12．茨木市教育委員会「茨木の歴史と文化遺産」1986年
13．茨木市教育委員会「茨木の史跡」1986年
14．野上丈助「摂津の古墳」1969年
15．高槻市教育委員会「嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅴ」
16．高槻市教育委員会「安満遺跡発掘調査報告書、第10冊」1977年
17．高槻市教育委員会「郡家今城遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ、第11冊」1978年
18．高槻市教育委員会「上牧遺跡発掘調査報告書、第13冊」1980年
19．高槻市教育委員会「高槻市文化財年報、昭和61・62年度」1989年
20．高槻市教育委員会「祖先のあゆみ」
21．吹田市教育委員会「埋蔵文化財緊急発掘調査概報昭和55年度～平成元年度」
22．吹田市史編纂室「吹田２号須恵器跡発掘調査報告」1973年
23．吹田市史編纂室「垂水遺跡第１次発掘調査概報」1975年
24．吹田市教育委員会「垂水南遺跡発掘調査概報」1977年
25．吹田市教育委員会「蔵人遺跡」1979年
26．吹田市教育委員会「文化財紀要２」1989年
27．鍋島敏也・藤原学「千里古窯跡群」1974年
28．箕面市教育委員会「第11回郷土資料展－箕面の古代を考える－」パンフレット
29．如意谷遺跡調査団「如意谷遺跡」1982年
30．如意谷遺跡調査会「如意谷遺跡進入路調査報告書」1978年
31．如意谷遺跡進入路調査団「如意谷遺跡進入路調査概報」1982年
32．箕面市教育委員会「瀬川４丁目第１地点遺跡発掘調査概要」1982年
33．森岡秀人・田中晋作『特集、列島各地域の円墳－主として大型円墳をめぐって－』「摂津の円墳」・古代学研究第123号・1990年
34．寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年（近畿編Ⅱ）』森田克行「摂津地域」
35．奥井哲秀「耳原遺跡と東奈良遺跡（茨木市）」考古学論集第１集1985年

第２章　東奈良遺跡の既往の調査

東奈良遺跡は、昭和46年茨木市内を流れる小川水路改修工事の際に市内の小・中学生によって、多量の遺物が採集されたことに始まる。採集された多量の遺物に中に、前期から後期にかけての各時期の弥生土器のほか、石器や銅鏃・銅鏡まで採集されており、また小川水路改修工事現場において、現地表下約1.7ｍの黒色粘土層より弥生時代から古墳時代の遺物などが出土していることが確認され、東奈良遺跡として周知されるに至った。その後、南茨木周辺で、マンション建設が計画されたため、埋蔵文化財確認の試掘調査や開発に伴う事前調査が行われ、遺跡の範囲が奈良・東奈良・沢良宜西・天王・若草町（約1,400,000㎡）に広がる、原始・古代・中世に渡る大複合遺跡であることが確認された。

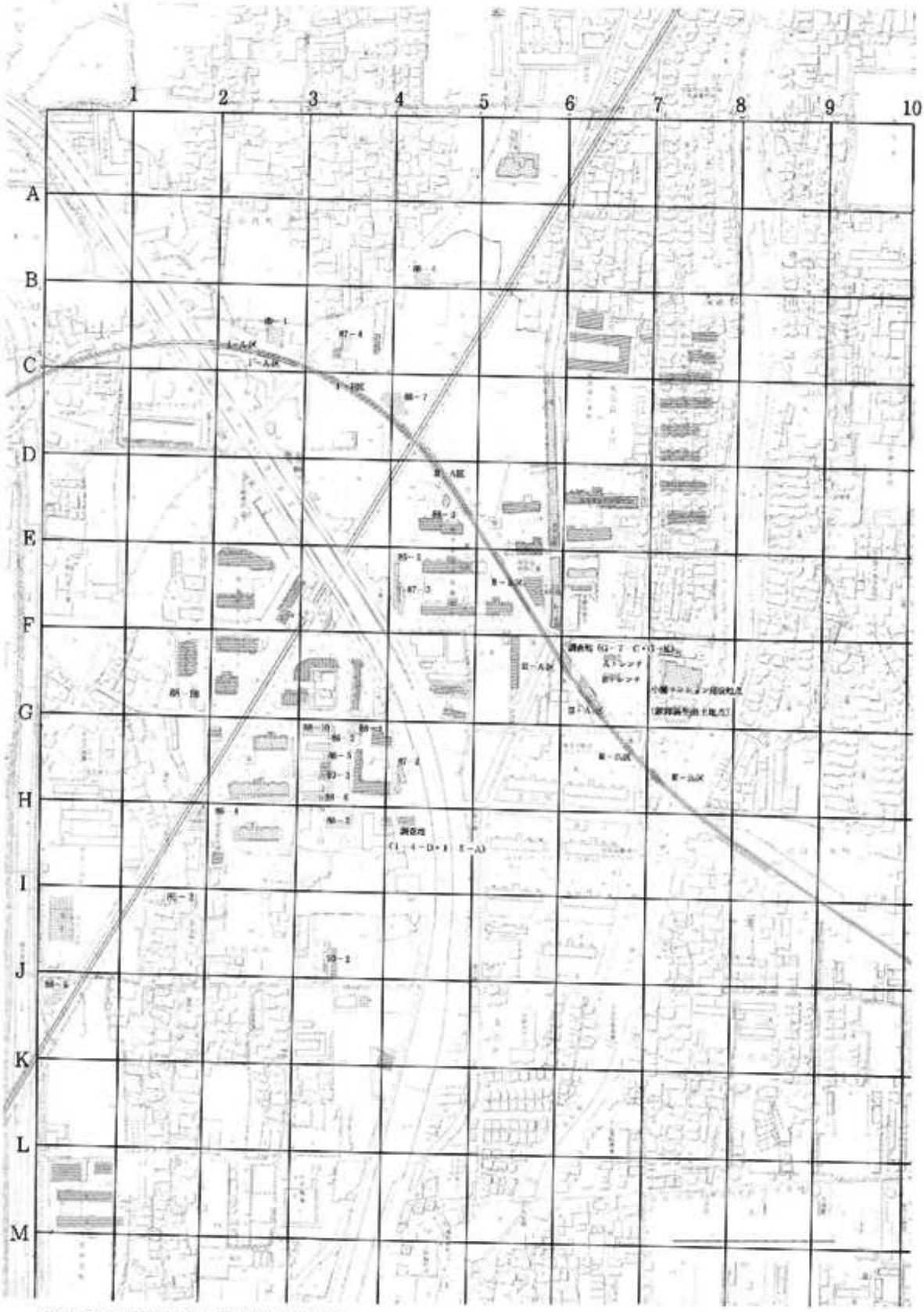
東奈良遺跡の主要な調査のうち、面積的には南茨木マンション建設をはじめとする民間住宅開発事業と、東奈良遺跡を北西から南東方向へトレンチを入れた形になった旧国鉄貨物引込線建設の規模が大きく、ほかに大阪モノレール事業・大阪府営茨木住宅建替え事業などがある。東奈良遺跡の開発に伴う事前調査の特徴として、大阪・京都方面から近距離地のうえ、交通基盤整備が進んでおり、近年まで比較的土地にゆとりがあるため、公共事業よりも民間の住宅開発に伴う発掘調査が多い。

最初に東奈良遺跡において発掘調査が行われたのは、阪急電鉄社員寮建設に伴う事前調査で、調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての溝状遺構・円形土壙・袋状土壙が検出された。以後の継続的な調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓、木棺墓、土壙墓、多量の木製品を含む大形土壙、井戸あるいは古墳時代前期の巾７～10ｍ、深さ2.5ｍ～３ｍの大溝や竪穴住居跡、井戸状遺構などが検出されている。特に、東奈良遺跡で検出される方形周溝墓のほとんどが削平を受けてマウンドは残っていないが、このなかにおいて最も整った形で検出された１基は、弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式新段階）の方形周溝墓で規模が８×７ｍあり、約0.8ｍの盛土が残存していた。マウンドにも２基の木棺墓、５基の土壙墓、周溝内にも２基の土壙墓が検出されている。また、周溝は全周せず陸橋部があり、陸橋部に１基の土壙墓をもち、さらに周囲に３基の土壙墓が検出されている。供献土器もマウンド上と南北の周溝内から多数検出されている。

昭和48年に入ると、東奈良遺跡範囲内の南東端と考えられる元茨木川右岸の茨木市東奈良２丁目に高層住宅建設が計画され、事前発掘調査が行われた。（小掘マンション建設地点）

調査の結果、完形の流水文銅鐸鋳型（鎔笵）をはじめとして、破片の流水文銅鐸鋳型が４点、袈裟襷文銅鐸鋳型が１点、不明銅鐸鋳型破片が７点、未製品銅鐸鋳型破片が１点、大阪湾型銅戈２点、ガラス勾玉鋳型が２点、鞴羽口多数を検出した。これら鋳造に関係のある遺物が揃って検出されたことにより、東奈良遺跡において銅鐸・銅戈・ガラス勾玉を製作していたことが認められたのである。特に、第２号流水文銅鐸鋳型から香川県善通寺市我拝師山出土銅鐸と、同笵の大阪府豊中市桜塚原田神社境内出土銅鐸、第３号流水文銅

第2図



東奈良遺跡地区割り及び調査地域図

鐸鋳型からは、兵庫県豊岡市気比出土3号銅鐸が鋳造されたことが確認されている。出土した銅鐸鋳型はすべて石製鋳型であり、銅戈・ガラス勾玉鋳型は粘土型であった。

現在、銅鐸鋳型出土が確認されている遺跡は、畿内では奈良県唐古・鍵遺跡、大阪府東大阪市鬼虎川遺跡、京都府向日市鶏冠井遺跡、兵庫県赤穂市上高野、兵庫県姫路市名古山遺跡、兵庫県姫路市今宿丁出遺跡があり、最近では、兵庫県三田市平方遺跡において土製の小銅鐸鋳型が出土している。また、銅鐸鋳型と推定できる石塊が兵庫県神戸市楠・荒田町遺跡から出土している。九州地方でも、福岡県春日市大谷遺跡、福岡県春日市岡本4丁目遺跡、福岡県福岡市赤穂ノ浦遺跡、佐賀県鳥栖市安永田遺跡など東奈良遺跡の銅鐸鋳型発見以後、銅鐸生産推定遺跡や銅鐸鋳型出土遺跡が増加している。

しかし、弥生時代の銅鐸を含めた青銅器や鉄器の生産体制や生産遺跡の実態が究明されておらず、東奈良遺跡においても鋳造工房跡（炉跡等）と考えられる遺構、ルツボや鋳造された製品を整形したおりに生じた残材（青銅片）や青銅の原材料片も検出されておらず、今後の課題となっている。また、遺構としては弥生時代中・後期の方形周溝墓や溝・土壙が検出されたが、銅鐸鋳型を含めて多くの鋳型が弥生時代中期から古墳時代及び中世に至るまでの遺物包含層からの出土であり、製作使用時期や鋳造工房跡が不明のため、昭和50年に国庫補助事業として、範囲確認調査が行われた。

調査の結果、弥生時代中・後期の掘立柱住居跡、円形周溝墓や溝・貯蔵穴を検出しており、遺物としては以前検出した外縁式鈕式に属する銅鐸鋳型より一段階新しい偏平鈕式に属する銅鐸鋳型が出土している。しかし、この調査においても銅鐸鋳型の製作使用時期の確定や鋳造工房跡などは検出されなかった。

昭和51年からは、旧国鉄貨物引込線建設に伴う発掘調査が実施された。貨物引込線建設計画では、東奈良遺跡を北西から南東方向へ斜めに通ることになり、路線全域が調査対象区域となった。西から調査順にⅠ－A、Ⅰ－B、Ⅱ－A、Ⅱ－B、Ⅲ－A、Ⅲ－B区の6区画に地区割りを行い、発掘調査を行った。

調査の結果、弥生時代前期の遺構・遺物は、Ⅰ－B、Ⅱ－A区に集中しており、特に方向と規模が違う溝が2条検出されており、方向がやや東へ振りながら楕円形を描いて巡る環濠と推定されており、また、同一時期に環濠を持つ2つの集落が存在した可能性があるとしている。ほかに遺構として、弥生前期から中期にかけての方形周溝墓群が検出されている。この調査によって、検出された弥生前期末段階の方形周溝墓は、畿内でも同時期の方形周溝墓が高槻市安満遺跡、和泉市池上遺跡、堺市四ッ池遺跡などから検出されているが、近畿地方最古に属する方形周溝墓の実例は少ない。弥生時代中期になると、集落の拡大が認められ、遺物の散布は遺跡範囲内ほぼ全域にみられ、東奈良遺跡の最盛期をむかえる。前期の各溝は、中期後半にほとんど消滅したと考えられ、新たに中期の別の遺構が形成されたことが判明している。弥生時代後期になると、中期に比べ集落の規模は縮小するが、Ⅱ－B地区において貯蔵穴群が検出されている。古墳時代前期は、弥生時代前期から

続く集落の中心地域よりやや西寄りに中心を移したことが判明している。

この旧国鉄貨物引込線建設に伴う発掘調査の成果は、東奈良遺跡の中心部を南北に縦断した、縦長で狭幅の調査区域でありながらも遺構・遺物の量が多く、環濠と推定されている弥生前期の溝などを検出する成果をあげている。また別の調査では、古墳時代前期の遺構として27基からなる土壙墓群があり、この土壙墓群はちどり状に三列に南北に連なって検出されている。さらに大溝とは別の溝では、溝内に堰を築きその支流で丸木舟が検出された大形の溝がある。

昭和60年度には、東奈良遺跡の北端部の調査を行い、弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）の方形周溝墓3基を検出し、うち1基からマウンド推定部分から3基の木棺墓と思われる土壙墓を検出している。このことから遺跡の北端部にも方形周溝墓を中心とした墓域が広がっていることが判明している。

昭和61年度には民間の住宅開発に伴う発掘調査や、昭和61年度～62年度にかけて発掘調査が実施された大阪モノレール建設に伴う調査が報告されている。前者の発掘調査の結果、東奈良遺跡の南西寄りの沢良宜西1丁目（K－4－G・H地区）において、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物柱穴や埋土から土師皿・瓦器椀・羽釜・緑釉陶器が出土した土壙、井戸枠に曲物を5段積みした井戸などが検出されている。同じ沢良宜西2丁目（H－4－B地区）では、弥生時代中期から古墳時代前期の溝が5条検出されており、庄内式併行期の土器が多数出土している。また、東奈良3丁目（F－5－E・I地区）の調査では、第Ⅱ遺構面において弥生時代中期の木棺墓2基と多数の溝や土壙が検出されており、木棺墓のうち一つは、比較的残りが良好で、底板・木口・両側板と人骨の一部が残っていた。遺物としては、第Ⅰ遺構面の溝から時期不詳であるが、土馬が出土している。

昭和62年度には、沢良宜西1丁目（H－5－I・M地区）で自然水路や土壙、そして弥生時代中期（畿内第Ⅳ様式）の甕棺墓などが検出されている。特に自然水路の埋土内からは、弥生時代中期（畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式）から古墳時代前期の庄内式併行期にかけての完形もしくはそれに近い土器が出土している。また、東奈良3丁目（F－5－E・I地区）の調査では、溝や土壙・柱穴などが検出されている。

昭和63年度には、沢良宜西1丁目（H－4－C地区）で弥生時代中期の木棺墓5基、重複しあった溝4条、土壙1基を検出した。特に木棺墓の残りは良く、底板・木口・両側板、蓋板や人骨の一部が残っており、特に木棺墓－4は最も規模の大きいものであった。I－4－B・C・F・G地区の調査では、古墳時代前期から後期の溝4条、土壙3基柱穴353穴、土器溜りなどが検出されている。溝－1からは、庄内式併行期の土器に混じって吉備地方の酒津式タイプの土器が出土している。東奈良3丁目（E－5－G・K地区）での調査では、弥生前期から後期までの溝が15条以上、土壙10基以上、柱穴跡250穴が検出されている。土器も数多く出土しているが、ほかに土馬が出土している。土馬は、奈良町（B－5－M・N地区）の調査でも出土しており、これまでに3個体が出土している。ほかに同

地区の調査では、方形周溝墓2基・溝3条・土壙3基が検出されている。

平成元年度は、沢良宜西1丁目付近の調査が多く、まず、H－4－E・F地区では、大形溝4条以外に、土壙1基・小数の柱穴などが検出されているほか、銅鐸型土製品や環状石斧・柱状石斧・偏平石斧・石槍・石包丁などの石器類が出土している。H－4－M・N地区では、溝5条、土壙10基、甕棺墓1基が検出されている。H－4－A・B地区では、溝4条以上、土壙5基、掘立柱建物1棟を含む柱穴跡40穴が検出されている。またG－2－K・O地区では、弥生後期から古墳時代前期の溝5条、土壙7基が検出され、特に、古墳時代前期の土壙が市松状に三列に連なって検出された土壙墓群がある。さらにK－1－A・B・E地区においても、方形周溝状遺構や土壙・溝などが検出されている。このあと若草町（C－3－K・G地区）において、弥生時代中期（畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式）の木棺墓2基を持つ方形周溝墓1基が検出されている。この地域では、ほかに弥生時代中期の溝2条、うち1条から畿内でも2例目の男根状木製品や、弥生時代後期の土壙から銅鏃が出土している。これらの調査とは別に、昭和62年～63年にかけて、府営住宅の建替えに先立って、大阪府教育委員会が東奈良遺跡の東部で発掘調査を実施している。現地説明会資料の概要では、弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓が20基、古墳時代後期の掘立柱建物8棟以上。中世では、南北方向の大溝と同溝にかかっていたと思われる橋の遺構、水田跡と東西方向の大畦畔などが検出されている。遺物としては、旧石器時代のナイフ型石器から中世の雁股式鉄鏃や鉄製海老錠の牡金具まで種々多くのものが出土している。（濱野）

参考文献

1．東奈良遺跡調査会「東奈良」発掘調査概報Ⅰ・1979年
2．東奈良遺跡調査会「東奈良」発掘調査概報Ⅱ・1981年
3．東奈良遺跡調査会「東奈良」概要報告書（銅鐸鋳型編）1976年
4．大阪府教育委員会「東奈良遺跡発掘調査概要」・1976年
5．茨木市教育委員会「昭和60年度～平成元年度発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ」
6．茨木市教育委員会「東奈良遺跡発掘調査概要」・1988年
7．大阪府教育委員会「東奈良遺跡現地説明会資料Ⅰ・Ⅱ」・1987年・1988年
8．茨木市教育委員会「東奈良遺跡現地説明会資料（若草町439－1）」・1989年

第3章　東奈良遺跡（89－4）HN　I－4－D・I－5－A地区

1　調査経過

所在地　　茨木市沢良宜西一丁目42－2

調査面積　　235㎡

調査原因　　店舗・事務所付共同住宅建設

調査期間　　平成2年1月12日～同年2月9日

HN　I－4－D・I－5－A地区は遺跡の南西部に位置し、今のところ弥生時代から古墳時代にかけての遺構の存在する南限の地域である。

東奈良遺跡のこれまでの調査による同時代の地形は、現在の中央環状線に沿って遺跡を二分するように谷が存在している。この谷の東側は、標高6～7mの微高地が広がり、排水性の良い沖積地上に集落が形成される。それに対して、当調査区の位置する西側は標高差はあまり見られないが、沖積層の含水性が高く不安定な砂層・シルト層や粘土層上に生活跡がみられる。このように地形及び地質が異なることから、谷の東側の微高地には、弥生時代前期中葉頃から環濠をもつ集落が形成されはじめる。一方西側では、同時代の方形周溝墓が見られることから墓域と考えられている。

中期になると、住居跡が西側にも散見されるようになり、また大小の溝などが開削されるようになる。

後期から古墳時代にかけては、大小の溝の廃絶とさらに外側の南西部へ開削された大きな溝などから、谷の西側にも集落が拡大する[1]。

昭和51年3月、当調査区に隣接する高層住宅建設の基礎工事中に、弥生土器や石器などの遺物を含む包含層が確認され緊急の調査が実施された経緯から、当調査区は建設に先立っての事前協議の段階から本格的発掘調査を行うこととし、原因者との協議を重ねた結果、平成2年1月12日から2月9日まで発掘調査を実施した。

2　調査の概要

敷地面積425㎡のうち、建築面積約235㎡を対象に発掘調査を実施した。

掘削は、現地表面から約1.6m（盛土・旧耕土・床土・無遺物層）まで機械掘削を行い、以下は人力掘削を行った。

調査区の地区割は、昭和47年に東奈良遺跡調査会が作成した地区割設定によっている。

3　基本層序

当調査区の基本層序は、東壁面及び南壁面の普遍的な、8層について概説する。

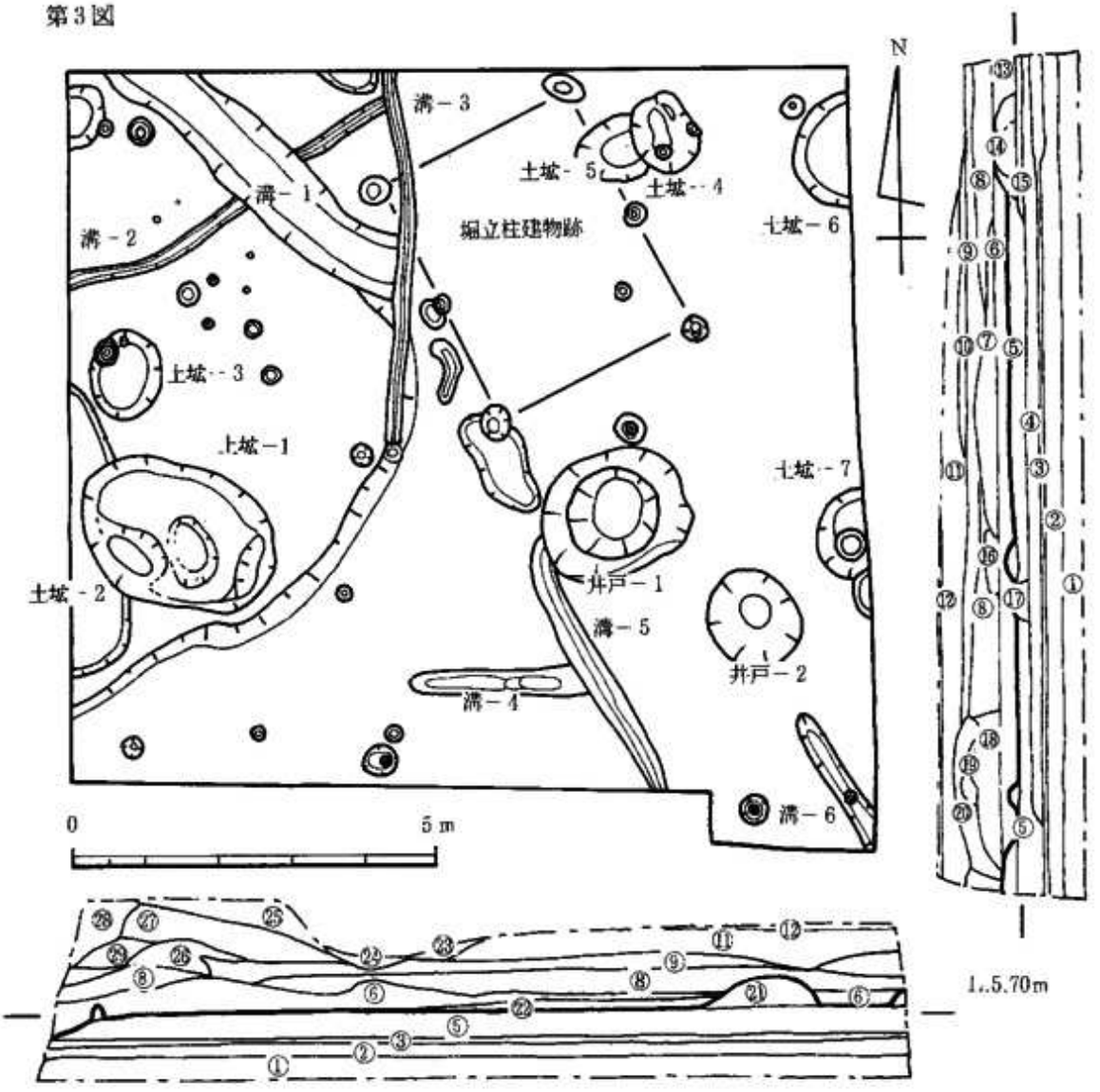
第1層　　盛土（1.35m）

第2層　　黒色土層　旧耕作土（0.2～0.25m）

第3層　　青灰色砂質土層　床土（0.2～0.25m）

第4層　　黄灰色砂質土層　無遺物層（0.05～0.2m）

第3図



① 黒色土層 （旧耕土）
② 青灰色砂質土層 （床土）
③ 黄灰色砂質土層
④ 淡茶灰色砂質土層 （包含層）
⑤ 茶灰色砂質土層・シルト層 （包含層）
⑥ 茶灰色礫混砂質土層
⑦ 淡青灰色礫混粘土層と黄褐色粗砂層の互層
⑧ 淡青灰色砂層
⑨ 淡青灰色粘質砂層
⑩ 灰色砂層
⑪ 灰色砂層と灰色粘土層の互層
⑫ 灰色粘土層
⑬ 淡灰褐色砂質土層
⑭ 暗灰色砂質土層
⑮ 暗茶灰色砂質土層
⑯ 黒色砂質土層と淡青灰色砂質土層の互層
⑰ 暗灰色砂質土層
⑱ 淡青灰色礫混砂質土層
⑲ 灰色粘質砂層
⑳ 淡灰色粘質砂層
㉑ 淡茶灰色粗砂層
㉒ 茶灰色砂礫層
㉓ 灰色粘質土層
㉔ 淡青灰色粘土層
㉕ 灰白色粗砂層
㉖ 灰色粘土層と淡灰色粗砂層の互層 （炭化物混）
㉗ 淡灰色砂層と灰白色粗砂層の互層
㉘ 暗灰色粘土層
㉙ 灰色砂混粘土層

遺構平面及び断面図

第5層　上層　淡茶灰色砂質土層　遺物包含層（　～0.2m）

層中から弥生時代中期～平安時代後期の土器片が検出された。この層は、南壁面においては確認されなかった。

下層　茶灰色砂質土層・シルト層遺物包含層（0.15～0.6m）

層中から弥生時代中期～古墳時代前期の土器片が検出された。

第6層　茶灰色礫混砂質土層　地山（　～0.48m）

この土層上面で、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面が検出された。

第7層　淡青灰色砂層・砂混粘土層（0.35～0.5m）

黄褐色の粗砂・植物遺体も認められ、河川流出土と考えられる。

第8層　灰色砂層・粘土層（　～0.6m）

この土層上面で自然河道を検出した。井戸－1・井戸－2・溝－1がこの河道上に形成されている。

4　遺構と遺物

調査の結果、東奈良遺跡南西部における、弥生時代後期～古墳時代前期の集落の規模の拡大化を示す一端をうかがうことができたが、中世の遺構は検出されなかった。当調査区から検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の溝が7条、井戸が2基、土壙が7基、掘立柱建物1棟を含む柱穴跡20穴などである。ほとんどの遺構から弥生時代後期～古墳時代前期初頭（庄内式）を中心とする遺物が検出されたが、層位差はあっても遺物の時期差はあまり認められないものが多かった。しかし土壙1～3の遺物は布留式のものを含み、これら遺構の形成面はもっと上であったと考えられる。また土壙1～3、溝1～3の位置する北西部と他の部分では削平による標高差（北西部が、～0.2m高い）が生じている。

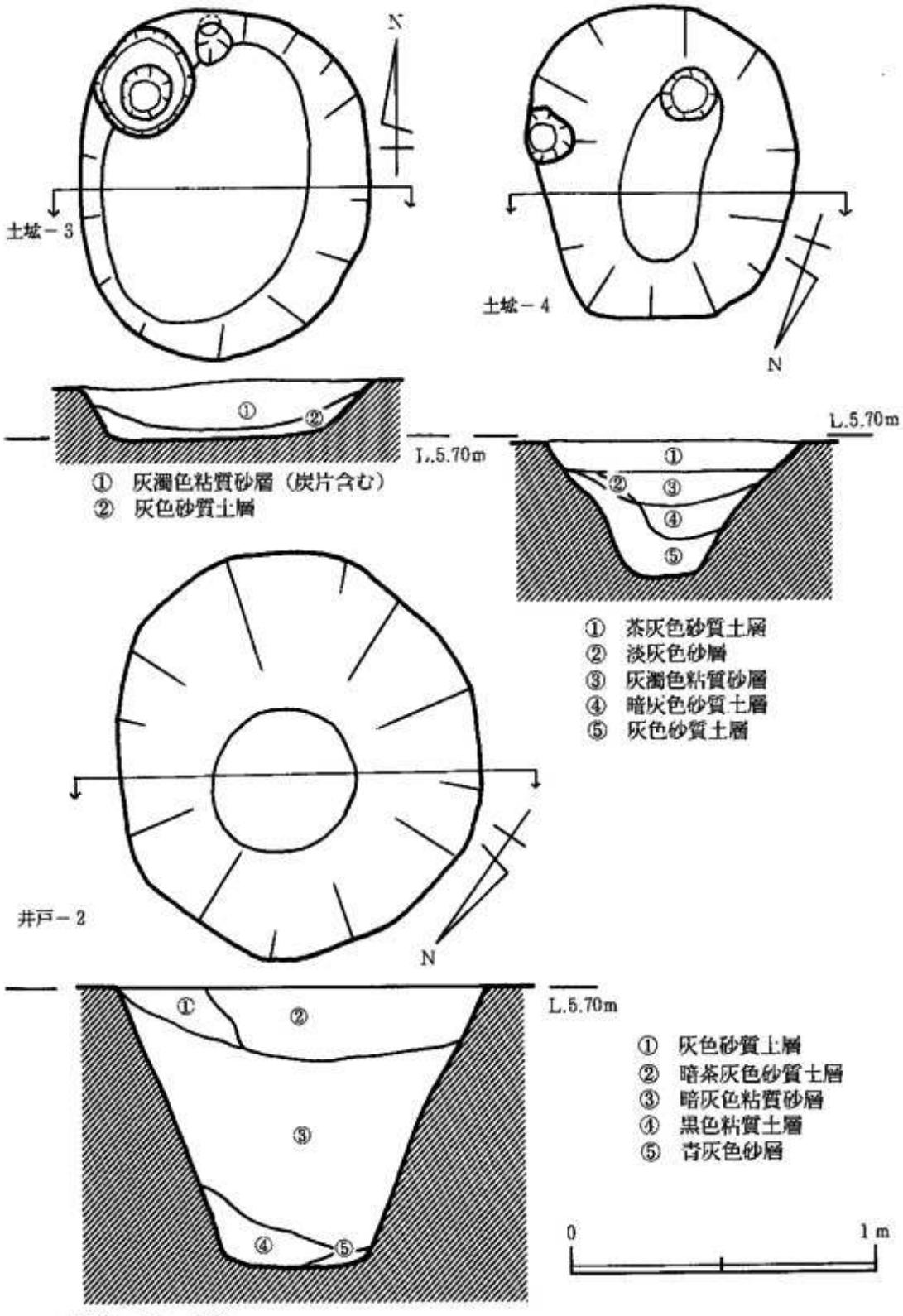
井戸－1（第5図）

掘立柱建物の南側に位置する。形は楕円形を呈し、2段の素掘りの井戸で長軸2.05m、短軸1.6m、深さ1.35m、底径0.8mを測り、底部はほぼ平坦となっている。埋土は5層に分かれ、遺物は上層と下層に分けられる。上層の灰濁色粘質土層からは小型壺（14・15）・鉢（21）・高杯（26・27・32）等、弥生時代後期～古墳時代前期（布留式）の土器片が出土しているが、下層の暗灰色粘質砂層からは底面にほぼ接する状態で広口壺（1～3）・甕（4～8）が出土した。これらは伝統的な弥生畿内第Ⅴ様式の系譜を引き継ぐもので、庄内式古相に位置付けられる。

井戸－2（第4図）

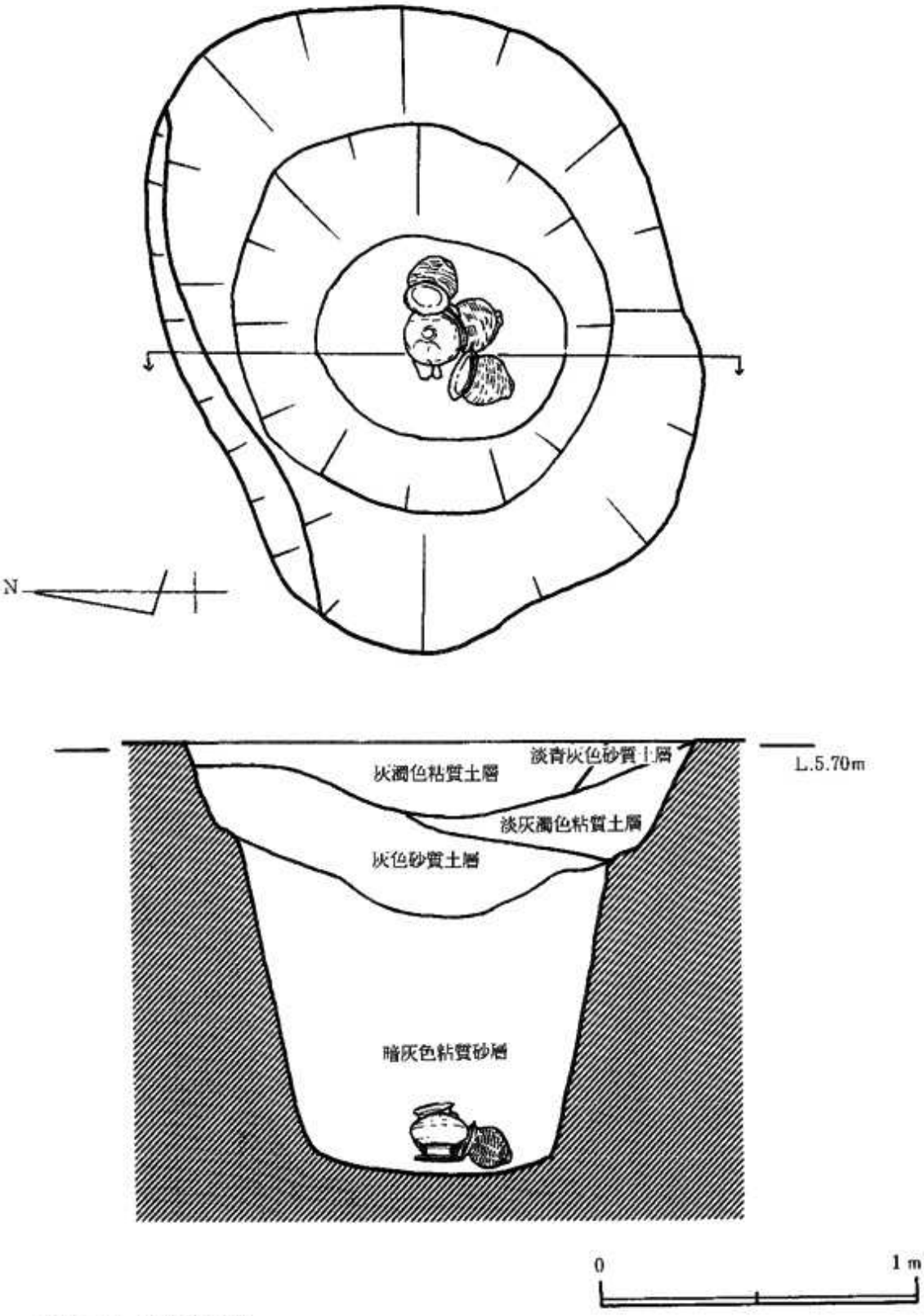
井戸－1の南東に位置する。形は楕円形を呈した素掘りの井戸で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は5層に分かれ、その出土層位は不明であるが、広口壺（9）・小型壺（13）・高杯（29）等、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

第4図



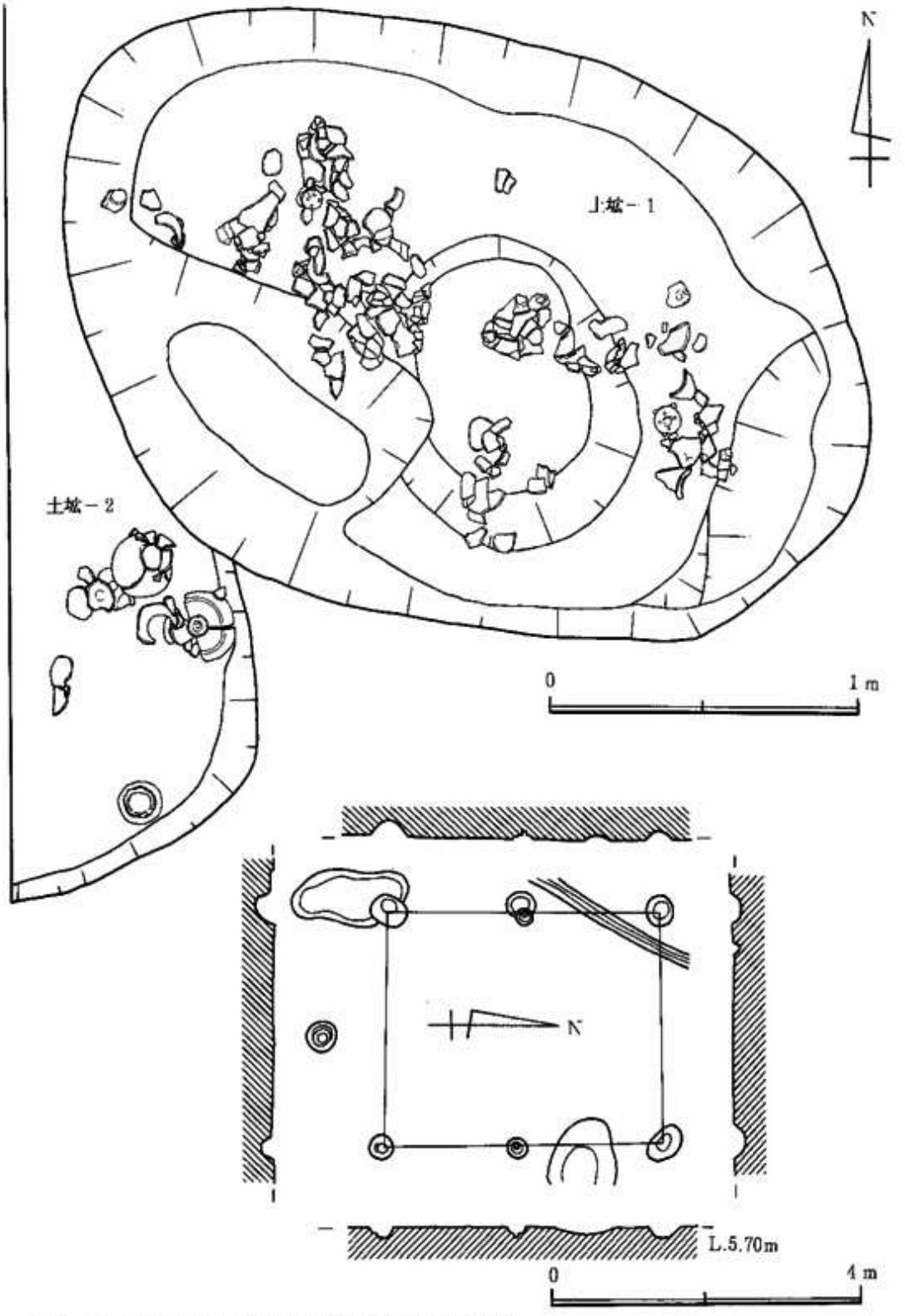
遺構セクション図

第5図



井戸－1　出土状況図

第6図



土壙－1・2出器出土状況図及び堀立柱建物平断面図

溝－1

調査区内の北西部を、北西から南東へ連なる幅約0.8 ～1.0m、深さ0.2mを測る溝である。溝－2・溝－3と交差し消滅するが、前後関係は不詳である。埋土は淡茶灰色砂質土層が堆積し、埋土内から甕（17）・甑（24）等、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

溝－2

調査区内の北西部を、南西から北東へ連なる幅約0.2m、深さ0.1mを測る小さな溝である。溝－1と交差し溝－3に合流するが、前後関係を層位的にとらえることはできなかった。埋土は淡茶灰色砂質土層が堆積し、埋土内から甕（18）等、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

溝－3

調査区内を南北に連なる幅0.2m、深さ0.1mを測る小さな溝で、調査区中央付近で消滅する。埋土は淡灰色砂質土層が堆積し、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

溝－4

調査区南部を東西に連なる幅0.3 ～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る小さな溝で、その東端は溝－5と重なり、西端は長さ約2.4mで消滅する。埋土は淡茶灰色砂質土層が堆積し、遺物の出土はなかった。層位的に観察すると、溝－5のほうが古い。

溝－5

井戸－1の西側から南東へ連なる幅0.25～0.35m、深さ0.15mを測る小さな溝である。埋土には茶灰色砂質土層が堆積し、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

溝－6

調査区南東隅から北西へ連なり、井戸－2の手前で消滅する小さな溝で、幅0.3m、深さ0.15～0.2mを測り、埋土は茶灰色砂質土層が堆積し、遺物の出土はなかった。

土壙－1（第6図）

調査区の南西部にあって、長軸2.4m、短軸1.9m、深さ0.15～0.3mの規模を測る。形は変形の楕円形をしており、すり鉢状の土壙の底に、長軸1.4m、短軸0.5m、深さ0.14mを測る土壙と長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.1mを測る2つの土壙がある。

埋土は暗茶灰色砂質土層が堆積し、広口壺（11）・小型丸底壺（15）・高坏（30・32）・小型器台（34）・管状土錘（35）等、弥生時代後期～古墳時代前期（布留式）の土器片が検出面を中心に広がっていたが、底面にはほとんど接していなかった。土器片はいづれも風化、摩耗が著しく復元図示できるものは少ない。製塩土器（25）は、検出面よりもやや浮いた形で出土し、台脚付鉢型土器と思われる。

この土壙の西端は土壙－2と重なるが、層位的には土壙－2の方が古い。

土壙－2（第6図）

調査区西部でその一部を検出したのみであるが、検出規模は南北軸4.0m、深さ0.15～0.2mを測る土壙である。その東端は土壙－1によって切られている。埋土は茶灰色砂質土層が堆積し、広口壺（10・12）・甕（16・19）・鉢（22）・高坏（28）等の他、弥生時代後期～古墳時代前期（布留式）の土器片が出土している。

土壙－3（第4図）

土壙－1の北側に位置し、長軸1.15m、短軸0.95m、深さ0.2mを測る。形は楕円形を呈するすり鉢状の土壙で、埋土は2層に分かれ、上層の灰濁色粘質砂層から炭片及び弥生時代後期～古墳時代前期（布留式）の土器片が出土しているが、隣接する土壙－1で出土した製塩土器の台脚付鉢型土器と同一個体の土器片も数個検出されている。

土壙－4（第4図）

掘立柱建物の東側に位置し、土壙－5と重複している。長軸1.05m、短軸0.85m、深さ0.46mを測る。形は楕円形を呈し2段に掘られたもので、埋土は茶灰色砂質土層が堆積し、古墳時代前期初頭（庄内式）の土器片が出土している。層位的には土壙－5の方が古い。

土壙－5

掘立柱建物の東側桁行間に位置し、土壙－4と重複している。推定長軸約1.2m、短軸0.9m、深さ0.13mを測る。形は楕円形を呈し、埋土には茶灰色砂質土層が堆積し、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

土壙－6

土壙－6は調査区東部でその一端を検出したのみでその全容は明確ではないが、検出面での南北軸1.5m、深さ0.2mを測る土壙で、埋土は茶褐色砂質土層が堆積し、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

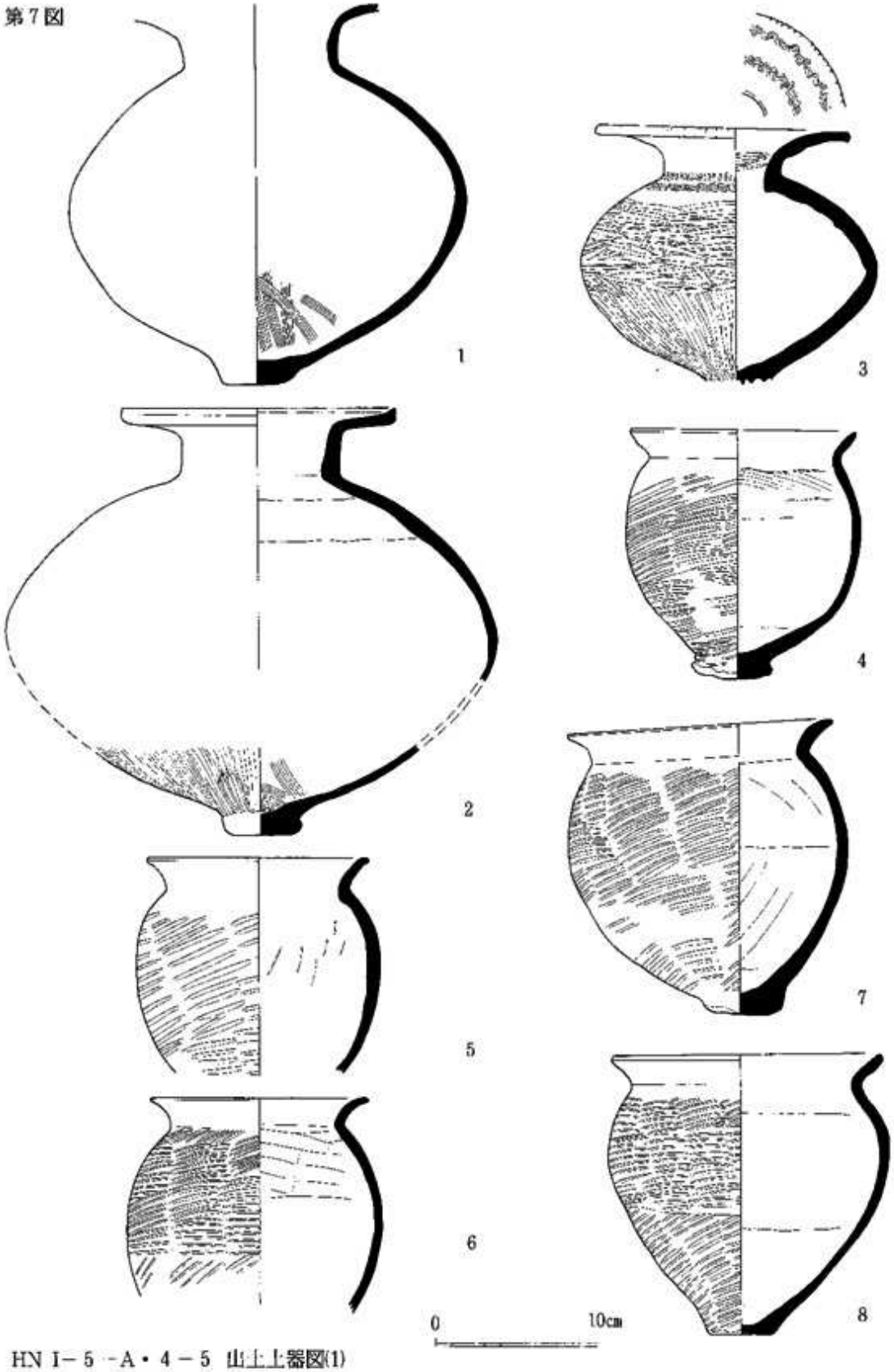
土壙－7

土壙－7は調査区南東隅に位置し、その一端を検出したのみでその全容は明確ではないが、検出面での南北軸1.2m、深さ0.17mを測る。底部には径0.4m、深さ0.06mを測る浅い落ち込みがある。埋土は暗茶褐色砂質土層が堆積し、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器片が出土している。

掘立柱建物（第6図）

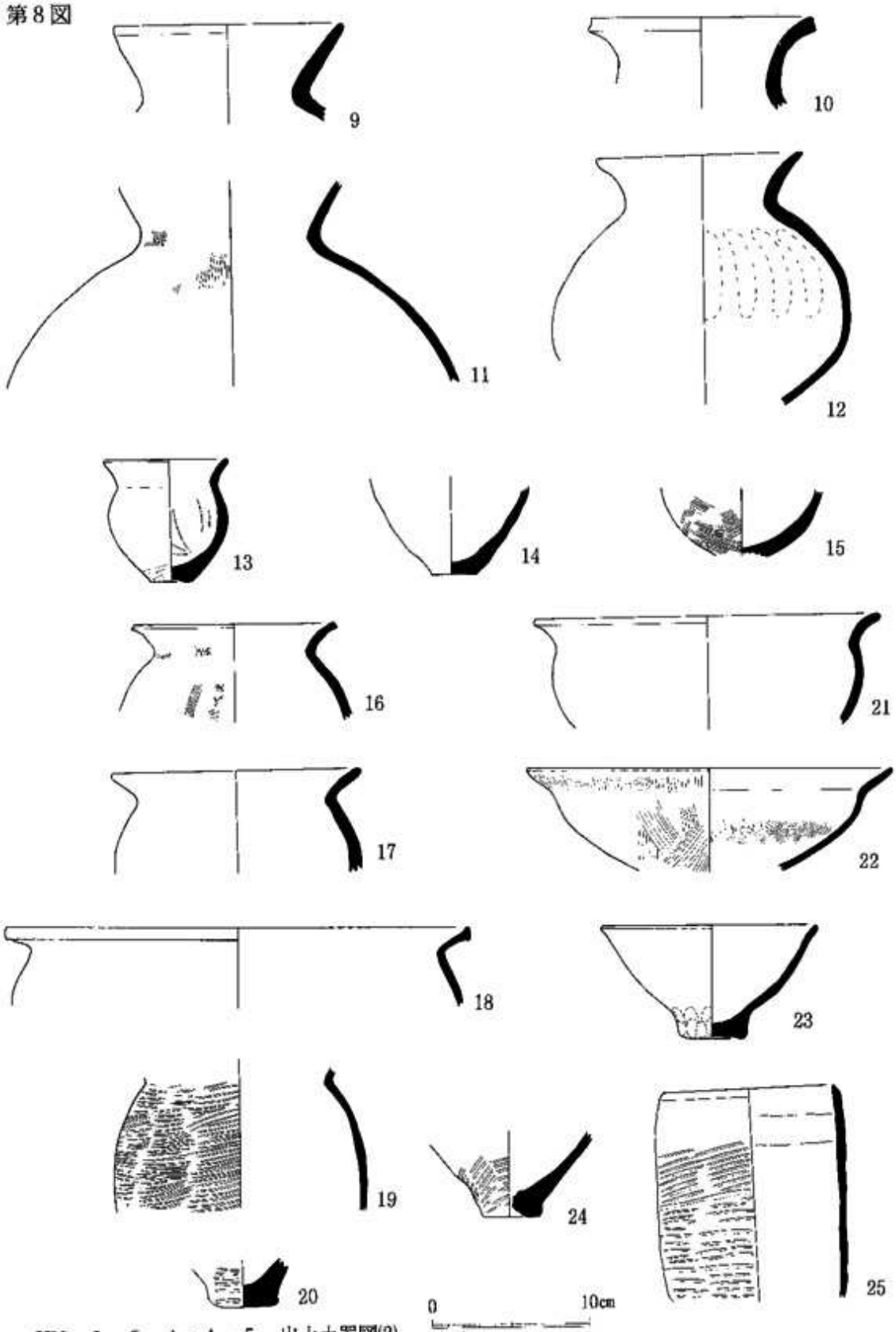
掘立柱建物跡は調査区の北側に位置する。梁間1間（梁間長3.0m）、桁行2間（桁行長3.6m）を測り、主軸はN－28°－Wである。両梁行の柱穴の掘り方は、径（長軸）0.3～0.5m、深さ0.35～0.58mの円形あるいは楕円形を呈する擂りばち状であるのに対し、桁行柱穴は径（長軸）0.2～0.25mで、柱自体の穴径は0.05mである。遺物は柱穴内から、叩きを残す底部（20）が出土したのみで、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃のものと推測される。（中東）

第7図



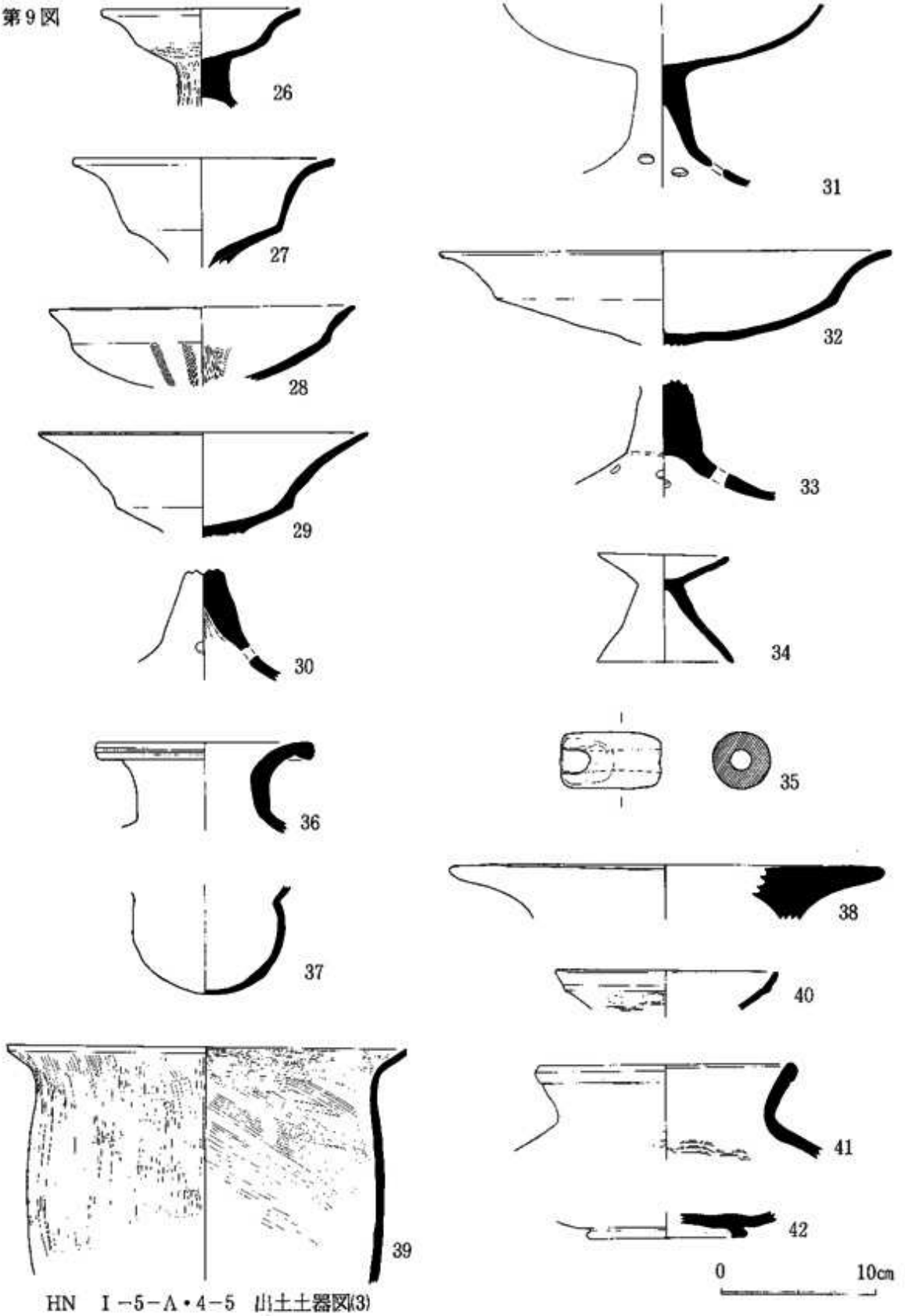
HN I－5 －A・4－5 出土土器図(1)

第8図



HN　I－5－A・4－5　出土土器図(2)

第9図



HN　I－5－A・4－5　出土土器図(3)

HN　I－4－D・I－5－A地区（89－4）土器観察表

器種	図番号 写真－実測図 土器番号	遺構	法量 (cm)	形態	技法	色調・胎土・焼成
壺	5－7 1	井戸　1 下層	口径 15.0 腹径 24.7（最大） 底径 4.3 器高 22.8	頸部は僅かに立ち上がり、外反する口縁部。体部は中位が張る偏平球形。突出する平底を有する。	外面　摩滅のため不明。 内面　底部にハケを施す。	淡乳黄褐色。 0.5～1㎜の砂粒多く含む。クサレ礫含む。 良好。
壺	5　7 2	井戸－1 下層	口径 17.1 腹径 30.5（最大） 底径 4.7 器高 26.0（推定）	頸部は垂直に立ち上がり、更に屈折してほぼ水平に外反する口縁部。端部は上方に僅かにつまみ上げ、面をもつ。体部は中位が張る偏平球形を呈する。突出した平底を有する。	外面　口縁部横ナデ。端部に擬凹線がある。体部ヘラ磨き。底部にハケを施す。 内面　口縁部横ナデ。体部ハケを施す。	淡赤褐色。 1～5㎜の大砂粒、クサレ礫多く含む。 良好。
壺	4－7 3	井戸－1 下層	口径 15.5 腹径 18.5 底径 —— 器高 15.6	頸部は短く垂直に立ち上がり、屈折して外反する口縁部。端部はわずかに面を持つ。体部は中位が張る偏平球形を呈する。底部は欠けているが突出平底を有すると思われる。	外面　口縁部にヘラによる刻み目。頸部にはヘラによる刺突紋、胴部に放射紋を施す。体部上位横ミガキ、下位縦ミガキ施す。 内面　口縁に14本／7㎜の2帯の波状紋。頸部ナデ。体部上位指オサエ。	暗褐色（外面は河内系の胎土に似ている）。 1～5㎜の白色砂粒多く含む。 良好。
壺	4－7 4	井戸－1 下層	口径 13.9 腹径 14.7（最大） 底径 4.8 器高 15.5	口縁緩やかに外反し、端部は丸くなる。体部は最大腹径が中位より上にある卵球形。底部はつぶれた突出平底。	外面　口縁部横ナデ。体部右上がりのタタキを施す。 内面　口縁部横ナデ。体部縦なで施す。	赤褐色。 0.5～3㎜の白色砂粒、5～10㎜の小石を含む。 良好。
壺	4－7 5	井戸－1 下層	口径 13.5（反転） 腹径 15.0（最大） 底径 —— 器高 13.5（残存）	口縁は外反し、端部は丸くなる。体部膨らむ。	外面　口縁部横ナデ。体部は荒い原体でタタキ施す。 内面　口縁部横ナデ。体部ナデ施す。	赤褐色。 0.5～3㎜の砂粒含む。 良好。
壺	4－7 6	井戸－1 下層	口径 13.3 腹径 15.2（最大） 底径 4.8 器高 13.3（残存）	口縁は外反し、端部は丸くなる。体部膨らむ。器厚はやや薄い。	外面　口縁部横ナデ。体部やや細いタタキ目を施す。 内面　口縁部体部横ナデ。	淡褐色。 0.5～1㎜の砂粒、雲母含む。 良好。外面全体に煤付着。
壺	4－7 7	井戸－1 下層	口径 16.3 腹径 17.2（最大） 底径 4.8 器高 18.4	口縁は外反し、端部丸く、全体的に歪んでいる。体部は卵球形を呈し、底部は突出した平底を有する。	外面　口縁部横ナデ。体部右上がりのタタキ2段施す。 内面　口縁部横ナデ。体部ナデ施す。	赤味おびた茶褐色。 1～2㎜の白色砂粒多く含む。クサレ礫含む。良好。 外面に煤付着。
壺	4－7 8	井戸－1 下層	口径 11.6 腹径 16.8（最大） 底径 4.0 器高 17.4	口縁外反し、端部にわずかな面を持つ。体部は最大腹径が上位にある卵球形。底部は突出気味でドーナツ状を呈する凹底を有する。	外面　口縁部横ナデ。体部は接合部で変化する右上がりのタタキ2段を施す。 内面　体部縦方向を主にナデ施す。	淡乳黄褐色（部分的に赤味おびる）。 0.5～3㎜の砂粒含む。クサレ礫含む。良好。
壺	5－8 9	井戸－2	口径 14.2 腹径 —— 底径 —— 残存高 6.2	頸部からやや開きぎみに外傾する。	外面 内面　口縁部横ナデ。	淡褐色。 0.5～2の㎜砂粒多い。クサレ礫含む。良好。
壺	5－8 10	土壙－2	口径 13.8 腹径 —— 底径 —— 残存高 5.8	口縁部外反し、端部は凹面を有する	外面 内面　摩滅のため不明。	赤味がかった乳白褐色（内部は暗褐色）。1～2㎜の砂粒多く含む。良好。
壺	5－8 11	土壙－1	口径 —— 腹径 —— 底径 —— 器高 13cm（残存）	頸部は屈曲し、口縁部は外上方へのびる。	外面 内面　摩滅のため不明。	淡黄褐色。 0.5～2㎜の白色砂粒多く含む。 良好。
壺	5－8 12	土壙－2	口径 12.9 腹径 —— 底径 —— 器高 16.1（残存）	体部から外反する口縁部に、端部は丸くなる。体部は球形を呈す。	外面　摩滅のため不明。 内面　体部上位指オサエ。	淡黄色。 0.5～2㎜の白色砂粒多く含む。クサレ礫含む。 良好。

器種	図番号 写真－実測図 土器番号	遺構	法量 (cm)	形態	技法	色調・胎土・焼成
壺	6－9 13	井戸－2	口径 7.2 腹径 —— 底径 2.6 器高 7.8	口縁部は外上方に外反する。体部は最大腹径が上位に位置する。底部は平底で凹みを有する。	外面 口縁部横ナデ、底部ヘラ削り施す。 内面 口縁部横ナデ、体部ヘラ抑えの後、ナデを施す。	淡灰褐色。 1.5～3㎜の砂粒含む。 良好。
壺又は鉢	6－9 14	井戸－1 上層	口径 —— 腹径 —— 底径 2.8 器高 6.2（残存）	底部から内弯気味に外上方に延びる体部を有する。底部は平底。	外面 内面 } 摩滅のため不明	淡褐色。 1～4㎜の白色砂粒（石英等）を多く含む。 良好。
壺	6－8 15	土壙－1	口径 —— 腹径 —— 底径 —— 器高 4.2（残存）	体部は丸みを帯びる。底部は欠けている。	外面 体部に原体7本／㎝程度の荒いハケ目を施す。 内面 摩滅のため不明。	淡乳褐色。 0.5～2㎜の砂粒含む。 良好。
甕	－8 16	土壙 2	口径 12.7 腹径 —— 底径 —— 器高 6.1（残存）	口縁部は外反し、端部はわずかな面を持つ。	外面 口縁部横ナデ。体部に原体約8本／6㎜の細かいハケ目を施す。 内面 摩滅のため不明。	淡乳褐色。 0.5～1㎜の砂粒含む。 良好。
甕	－9 17	溝－1	口径 15.5 腹径 —— 底径 —— 器高 6.6（残存）	口縁部外反し、端部丸くなる。	外面 口縁部横ナデ。体部は表面タタキ施す。 内面 口縁部横ナデ。	赤味がかった乳黄白色。0.5～3㎜の砂粒多く含む。 良好。
甕	－9 18	溝－2	口径 29.6 腹径 —— 底径 —— 器高 5.0（残存）	口縁部は「く」の字型に外反し、端部は上下に肥厚し、面を有する。	外面 口縁部横ナデ以外、摩滅のため不明。 内面 不明。	乳赤褐色 0.5～1㎜の砂粒含む。クサレ礫含む。 良好。
甕	－8 19	土壙－2	口径 —— 腹径 16.0（最大） 底径 —— 器高 9.4（残存）	体部膨らむ。	外面 タタキ施す。 内面 摩滅のため不明。	淡黄褐色。（部分的に赤味）。 0.5～1㎜の白色砂粒含む。 良好。
壺	－8 20	掘立柱穴	口径 —— 腹径 —— 底径 4.5 器高 9.4（残存）	突出平底。その他欠損のため不明。	外面 タタキ施す。 内面 不明。	赤褐色。 密だが0.5㎜前後の砂粒含む。 良好。
鉢	－9 21	井戸－1 上層	口径 21.7 腹径 —— 底径 —— 器高 7.1（残存）	小さくくびれる頸部から外反する口縁部。端部は丸くなる。	外面 口縁部横ナデ以外、摩滅のため不明。 内面 不明。	赤味おびた乳褐色0.5～1㎜の砂粒多く含む。クサレ礫含む。 良好。
鉢	－8 22	土壙－2	口径 23 腹径 —— 底径 —— 器高 6.5（残存）	体部は内弯気味に外上方に伸び、屈曲して外反する口縁部。端部は丸くなる。	外面 口縁部横ナデ原体5本／㎝程度のハケ調整。 内面 口縁部横ナデ原体8本／㎝程度のハケ調整。	灰褐色（外面暗褐色）。0.5～1㎜の砂粒含む。クサレ礫含む。 良好。
鉢	－8 23	土壙－1	口径 13.5（反転） 腹径 —— 底径 4.2 器高 7.2	体部は斜上方へ内弯ぎみに立ち上がり、わずかに外反する口縁部を有する。突出した平底でやや凹面を有する。	外面 口頸部横ナデ、底部指オサエ。 内面 口頸部横ナデ、その他摩滅のため不明。	淡灰褐色。 0.5～1㎜の白色砂粒多く含む。 良好。
甕	6－9 24	溝－1	口径 —— 腹径 —— 底径 3.6 器高 5.5	突出した底部より外上方へ広がる体部。底部は焼成前の1孔を有し、1.7㎝の厚み。	外面 タタキを施す。 内面 摩滅のため不明。	赤味がかった乳黄褐色。 0.5～3㎜の砂粒多く含む。 良好。

器種	図番号 写真－実測図 土器番号	遺構	法量 (cm)	形態	技法	色調・胎土・焼成
製塩土器	6－8 25	土壙－1	口径 10.7（反転） 脚径 11.9（最大） 底径 —— 器高 13.6（残存）	体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。器厚は薄い。底部は欠けている。	外面 体部は平行ないし斜め方向のタタキ施す。 内面 摩滅のため不明。	淡赤褐色。 0.5～2㎜の白色砂粒、クサレ礫を多く含む。 良好。
高坏	7－9 26	井戸－1 上層	口径 12.8 脚径 —— 底径 —— 器高 6.2（残存）	内弯気味に開く坏底部から屈曲し外反する口縁部。端部は丸みのある平坦面を有する。やや短い柱状部を有する。	外面 口縁部横ナデ。体部から脚部にかけてヘラミガキを施す。 内面 口縁部横ナデ。	淡赤褐色。 0.5～5㎜の砂粒、クサレ礫を含む。良好。
高坏	7－9 27	井戸－1 上層	口径 16.8 脚径 —— 底径 —— 器高 7.2（残存）	小さな坏底部から屈折し外反する。端部は豊かな面を有する。坏部は深い。	外面 内面 } 口縁部横ナデ以外、摩滅のため不明。	淡赤褐色。 1～4㎜の白色砂粒（石英等）を多く含む。 良好。
高坏	7－9 28	土壙－2	口径 19.7 脚径 —— 底径 —— 器高 5.2（残存）	坏底部は内弯気味に広がり、口縁部は屈曲して短く外反する。端部は丸くなる。	外面 口縁部横ナデ。体部荒い原体で放射状にハケ目施す。 内面 口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ。	淡赤褐色。 0.5～1㎜の砂粒多く含む。クサレ礫含む。 良好。
高坏	7－9 29	井戸－2 上層	口径 21.3 脚径 —— 底径 —— 器高 6.8（残存）	坏底部から屈曲し、大きく外反して長く延びる口縁部。端部は丸くなる。	外面 内面 } 口縁部横ナデ以外、摩滅のため不明。	乳黄白色。 0.5～2㎜の砂粒を多く含む。クサレ礫含む。 良好。
高坏	7－9 30	土壙－1	口径 —— 脚径 —— 底径 —— 器高 7.1（残存）	脚部は、裾広がりの柱状部より、ラッパ状に開く脚部を有する。脚部3方に円孔を穿つ。	外面 内面 } 摩滅のため不明。	淡黄褐色（内部は赤味を帯びる）。 0.5～3㎜の白色砂粒を多く含む。良好。
高坏	7－9 31	土壙－5	口径 16.0 脚径 —— 底径 —— 器高 12.1（残存）	椀状の坏部、口縁部は器厚を減じながら、一層内弯する。脚部は中空で裾広がりの柱状部に大きく広がる脚部を有する。脚部に4方に円孔を穿つ。	外面 摩滅のため不明。 内面 柱状部シボリ目が認められる。その他摩滅のため不明。	赤白色。 1～5㎜の白色砂粒を多く含む。クサレ礫含む。 良好。
高坏	－9 32	井戸－1 上層	口径 29.4 脚径 —— 底径 —— 器高 6.1（残存）	坏底部は内弯気味に広がり、口縁部は屈曲して外反する。	外面 内面 } 摩滅のため不明。	淡赤褐色。 密だが、細かい白色砂粒、クサレ礫含む。 良好。
高坏	7－9 33	土壙－2	口径 —— 脚径 —— 底径 —— 器高 7.7（残存）	柱状部より屈折してラッパ状にひろがる脚部を有する。裾部に4方に円孔を穿つ。	外面 内面 } 摩滅のため不明。	乳白色。 0.5～3㎜の白色砂粒を多く含む。 良好。
器台	7－9 34	土壙－1	口径 —— 脚径 —— 底径 —— 器高 5.8（残存）	受部は斜上方へ伸び、端部は丸くなる。脚部は基部より漏斗状に開き、端部は尖り気味になる。小型器台。	外面 内面 } 摩滅のため不明。	淡灰褐色。 0.5～1㎜の砂粒を含む。 良好。
土錘	－9 35	土壙－1	長さ 6.5 最大径 3.6 穴径 1.3	断面円形を呈する。		淡灰褐色。 0.5～1㎜の砂粒含む。 良好。
壺	5－9 36	包含層 下層	口径 13.9（反転） 脚径 —— 底径 —— 器高 5.9（残存）	直立する頸部から屈曲し、大きく開く口縁部、端部は下方へ肥厚し直立する面を有する。	外面 口縁部端部に2本の擬凹線を有する。 内面 摩滅のため不明。	暗乳褐色。 0.5～1㎜の砂粒を含む。 良好。

器種	図番号 写真－実測図 土器番号	遺構	法量 (cm)	形態	技法	色調・胎土・焼成
壺	6－9 37	包含層 下層	口径 —— 腹径 9.6 底径 —— 器高 7.0（残存）	球形を呈する体部から斜め上方に内寄気味に延びる口縁部。器厚は全体に薄い。小型丸底。	外面 内面 } 摩滅のため不明。	乳白褐色（炭化が著しい）。0.5～3㎜の白色砂粒を多く含む。良好。底部に煤付着。
台型土器	－9 38	包含層 下層	口径 28.9（反転） 腹径 —— 底径 —— 器高 3.5（残存）	円形の台部。台部より大きくくびれ脚部が延びる。	外面 内面 } 摩滅のため不明。	赤褐色。 0.5～3㎜の砂粒を多く含む。 クサレ礫含む。 良好。
甕	－9 39	包含層 下層	口径 25.8 腹径 —— 底径 —— 器高 15.3（残存）	倒鍬型の胴部から外反する口縁部。端部は直立する面を持つ。	外面 口縁部端部横ナデ。体部軍ねながら縦方向にハケ目施す。 内面 口縁付近は横に、体部は斜め方向にハケ目施す。 ハケ原体5本／1.2㎝。	赤味を帯びた乳黄褐色。0.5～3㎜の白色砂粒、クサレ礫含む。良好。
鉢	－9 40	包含層 下層	口径 14.2（反転） 腹径 —— 底径 —— 器高 2.5（残存）	口縁部は体部との境に稜を持ち、外上方に直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	外面 口縁部横ナデ。体部ヘラミガキを施す。 内面 口縁部横ナデ施す。	漆黒色。 精緻。 良好。 黒色土器又は瓦器。
壺	－9 41	包含層 下層	口径 16.4 腹径 —— 底径 —— 器高 6.2（残存）	口縁部は外反し、端部は外側に折り返し肥厚する。	外面 肩部にカキ目施す。 内面 同心円のタタキ目を施すと思われる。	淡灰色。精良ながら1㎜程度の白色砂粒含む。堅緻。須恵器。
壺	－9 42	包含層 下層	口径 —— 腹径 —— 底径 9.9（反転） 器高 1.6（残存）	平坦な底部に、断面台形の低い高台が「ハ」の字型に開いて付く。	外面 内面 } 不明。	淡青灰色。 精良ながら0.5㎜程度の白色砂粒含む。堅緻。須恵器。

－註－

(1) 東奈良遺跡調査会「東奈良」発掘調査概報Ⅱ　1981年

第4章　東奈良遺跡（90－1）HN．G－7－C・G・K地区

1　調査経過

所在地　　大阪府茨木市東奈良2丁目757番地1・756番地1

調査面積　　600㎡

調査原因　　共同住宅建設

調査期間　　平成2年4月7日～6月13日

東奈良遺跡は、標高5～10m前後の沖積地上に立地しており遺跡の推定範囲は北は、奈良町、南は、沢良宜西、東は、元茨木川、西は、大正川までの南北約1.4km、東西約1kmの範囲にひろがっており弥生時代を中心とする大集落遺跡である。調査該当地点は、東奈良遺跡の南東隅にあたり、本調査地点より、約50m程（水田1枚）西へ隔てた小堀マンション建設地点において、銅鐸鋳型（鎔笵）はじめ、銅戈・ガラス勾玉の鋳型等鋳造に関係する遺物が出土いる。また、弥生時代後期の方形周溝墓などが検出されており、第2章「東奈良遺跡の既往の調査」において詳しく記述している。上記の様に東奈良遺跡の中でも重要地点である銅鐸鋳型出土地点の隣接地である該当地に共同住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼があり、平成元年5月9日、試掘調査を実施した。その結果、現地表下約2m10cmで弥生土器を包含する黒色粘土層が検出されたことから、発掘調査の必要があるという旨を依頼者に回答した。その後、依頼者と茨木市教育委員会との協議の結果、平成2年4月7日から発掘調査を実施することとなった。

2　調査の概要

敷地面積約1,891㎡のうち、マンション建設予定地（300㎡×2棟）600㎡を対象に本格的な発掘調査を実施した。マンション建設予定地のうち北側をAトレンチ、南側をBトレンチとした。掘削は、試掘調査の結果をもとに、現地表面から1.3m（盛土・旧耕作土・床土・無遺物層）までを機械掘削し、これより以下は、人力による掘削を実施した。調査では、東奈良遺跡調査会が作成した昭和47年に設定した地区割を使用し、敷地全体を最小地区設定である9m×9mグリッドで調査をおこなった。

3　基本層序

当調査区において普遍的にみられる6層（盛土・旧耕土・床土・無遺物層・遺物包含層・地山層）を基本層序とした。以下、各層について記す。第1層の盛土・旧耕土・床土層（50cm～55cm）以下、第4層の暗黄茶色シルト層から第10層の暗灰色粘質土層（100cm～110cm）までは、ほとんど遺物を含まない無遺物層が堆積している。続いて、遺物包含層である第11層の淡黒色粘質土層（28cm）および第12層の黒色粘質土層（16cm）が堆積している。この遺物包含層は上下2層に分けられる粘質土で上層は、やや灰色がかった黒色を呈しており、下層になるほど漸時黒色に変化していく。また、上層は弥生時代から中世までの遺物を包含しており、摩滅が著しく細片が多い。下層は若干、須恵器・瓦器が混じるが、主に弥生時代から古墳時代前期初頭（庄内式）までの遺物を含んでおり、出土する土

器もあまり摩滅しておらずしっかりしている。地山層は、灰色粘土層が本来の地山層と推定されるが、弥生時代から中世までの削平が著しく灰色粘土層は一部しか残存しておらず、下層の赤褐色粘質土または、灰色砂礫層上面で多くの遺構が検出されている。また、東奈良遺跡調査会が実施した小堀マンション建設地点及び大阪府教育委員会の実施した範囲確認調査地点と基本的な層序は変わりはない。

4　検出遺構

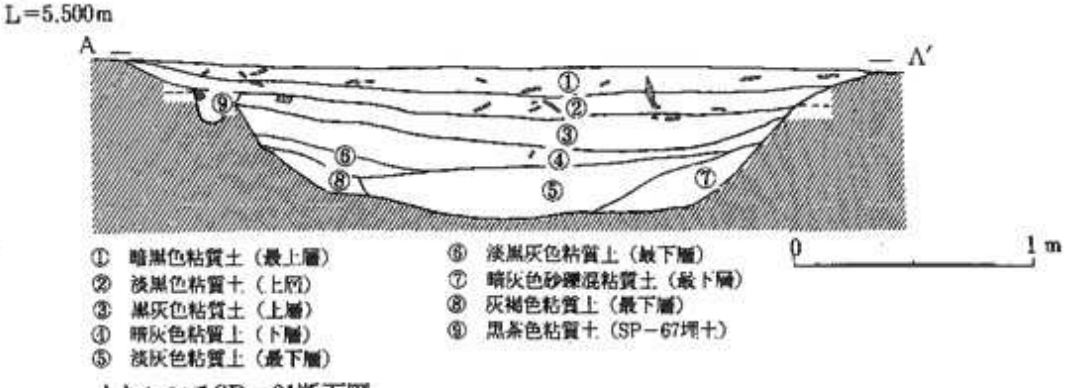
今回の調査で検出された遺構は、Aトレンチでは、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の溝1条、土壙15基、弥生時代中期の土器棺墓1基、柱穴を多数検出した。また、中世の落込み2か所そして、中世の落込み埋土（整地層）上面で柱穴を多数検出した。Bトレンチでは、古墳時代後期の竪穴住居跡1棟、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の溝6条、中世の溝1条、土壙11基、古墳時代前期初頭（庄内式）の土器棺墓1基、柱穴を多数検出した。以下、Aトレンチからいくつかの遺構について検出状況と出土遺物について概説する。

1）Aトレンチ（第15図）

SD－01（第14図・第17図）

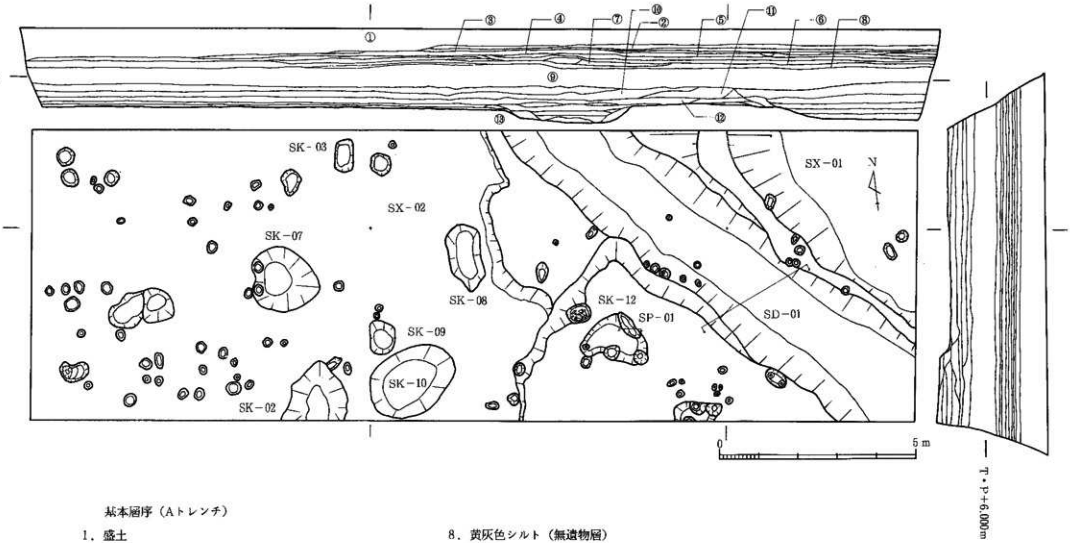
調査区東部において、北西から南東方向に走行する溝を検出した。幅は平均2.5m、深さ50cmを測る。溝埋土の層序としては、最上層、上層、下層、最下層の5層に分層され、最上層は、暗黒色粘土層で、溝内に15cm～20cmの層厚でほぼ一様にみられる。出土遺物は、若干の弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）から古墳時代前期初頭（庄内式）の土器が混じるが大半が弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の土器である。上層は淡黒色粘質土層であり層厚は20cm～25cmの厚さで堆積している。上層の淡黒色粘質土層からは弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の土器が多数を占め、出土遺物量も一番多い。下層は、暗灰色粘質土の植物遺体を中心とする層で2層に分けられる。層厚は40cm～45cmで若干の弥生時代中期の土器が少量出土しているのみである。最下層は、層厚40cm～45cmの無遺物層で暗灰色粘質土を中心とする層である。SD－01で特徴的な出土遺物として、溝の中央部付近において出土した土器片がある。（図第18図）最上層から出土しており土器の特徴としては、外面

第14図



AトレンチSD－01断面図

第15図

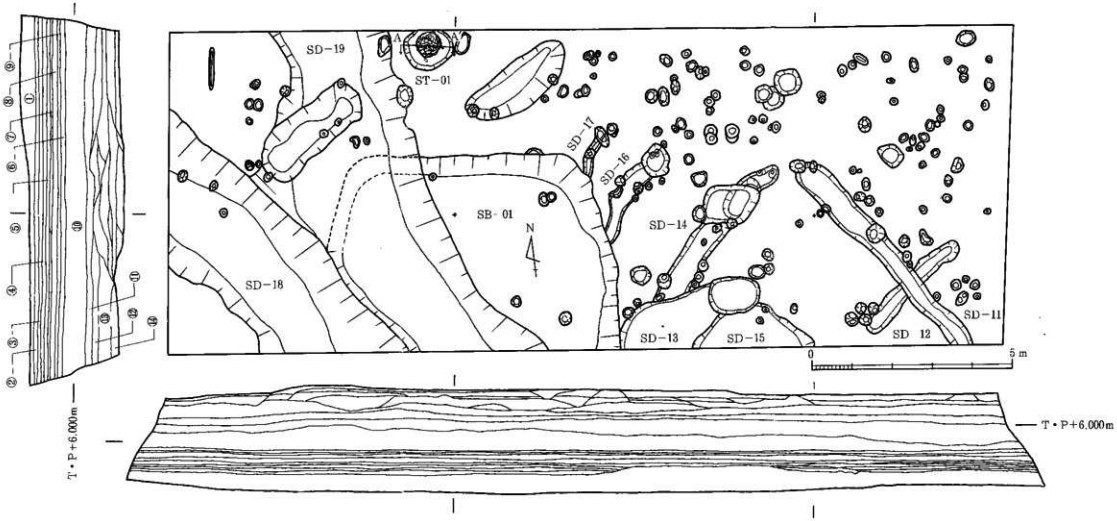


基本層序（Aトレンチ）

1．盛土
2．耕土
3．床土
4．暗黄茶色シルト（無遺物層）
5．黄茶色シルト（無遺物層）
6．灰色シルト（無遺物層）
7．茶灰色シルト（無遺物層）
8．黄灰色シルト（無遺物層）
9．黄灰色粘質土（無遺物層）
10．暗灰色粘質土（無遺物層）
11．淡黒色粘質土（包含層上層・弥生時代～中世）
12．黒色粘質土（包含層下層・弥生時代～古墳時代前期初頭中心）
13．赤褐色粘質土（地山層）

Aトレンチ遺構平面図及び断面図

第16図

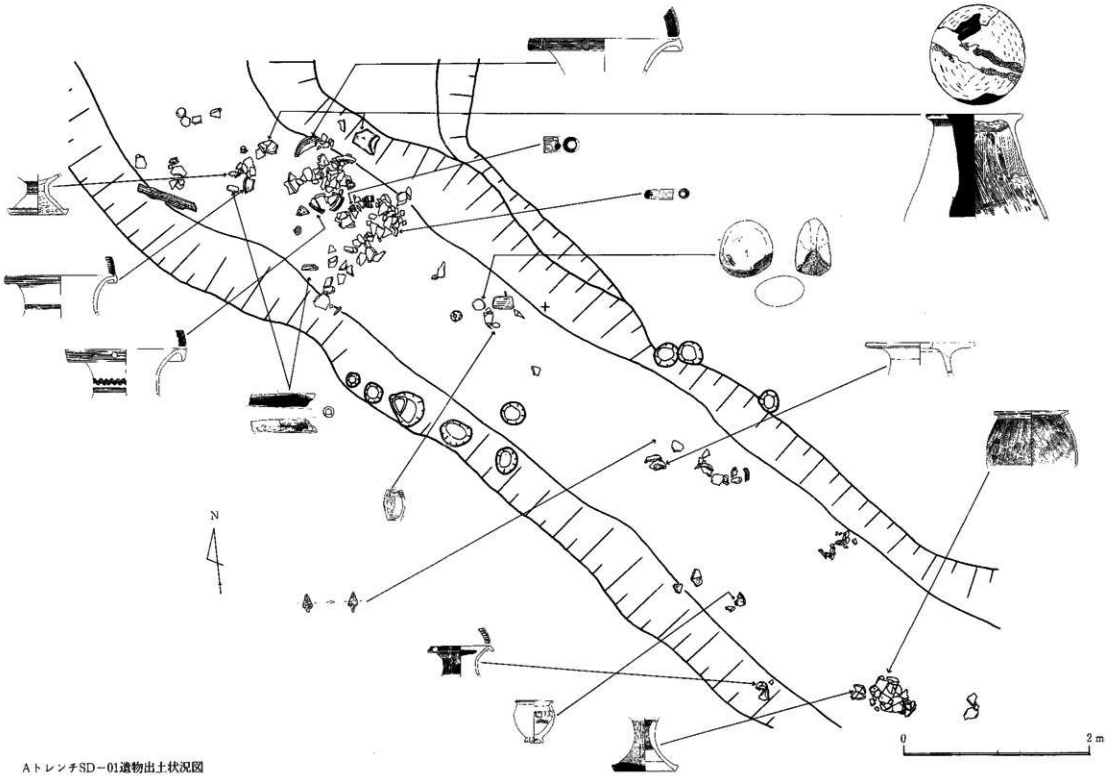


基本層序（Bトレンチ）

1．盛土
2．耕土
3．床土
4．暗黄茶色シルト
5．暗黄灰色シルト
6．黄茶色シルト
7．灰色シルト
8．茶灰色シルト
9．黄灰色シルト
10．灰色粘質土
11．青灰色粘質土
12．淡黒色粘質土（包含層上層・弥生時代〜中世）
13．黒色粘質土（包含層下層・弥生時代〜古墳時代前期初頭）
14．赤褐色粘質土（地山層）

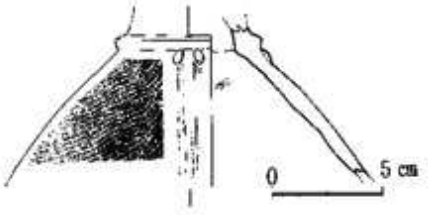
Bトレンチ遺構平面図及び断面図

第17図



AトレンチSD－01遺物出土状況図

第18図



Aトレンチ SD－01　最上層出土土器図

は胴部に縄文を施したうえ、人差し指の幅で上から下へ指で撫で消してる。また、胴部最上部には、2ヶ一対の楕円形の浮文を付け頸部には、断面三角形突帯を一条付けている。内面は剥離がひどく煤が付着している。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好で胎土に1㎜程の白色砂粒を含む。器種としては、細頸壺の可能性が高い。現在、東奈良遺跡では、上記の土器は1点も確認されておらず搬入品と推定される。また、出土遺物が一番多い埋土上層では、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の土器以外に鞴の羽口や土器製作台と推定されている台形土器、凸基有茎式石鏃等が検出されている。ＳＤ－01埋土上層の出土土器には、大きな時間幅が認められないのが特徴である。

ＳＸ－01・ＳＸ－02

ＳＤ－01の西側と東側で検出された中世の落込みと削平面である。ＳＸ－01は東側の中世の落込みで埋土は2層に分れ、埋土内からは、摩滅した弥生土器のほか須恵器・土師器・瓦器が検出されており、また、凸基有茎式（柳葉式）銅鏃（第19図－1）や加工痕・ほぞ穴がある木片が出土している。ＳＸ－02はＳＤ－01の西側で検出された中世の削平面で埋土上面で中世の柱穴が検出されている。埋土（整地層）は2層で、埋土内からは多量の磨滅した弥生土器のほか須恵器・土師器・瓦器皿（第19図－2）が検出されている。また、ＳＸ－01から出土した別タイプの凸基有茎式銅鏃（第19図－3）が出土している。ＳＸ－01・ＳＸ－02は調査地付近が中世に大規模に土地改変をうけた証拠の遺構である。特にＳＸ－02は、弥生時代の包含層は勿論のこと、地山層である灰色粘土層や下層の赤褐色粘質土層まで削平しており、調査地付近では場所によっては、溝などの比較的深い遺構以外弥生時代の遺構は削平の影響を受けている可能性が高い。

ＳＰ－01（第20図）

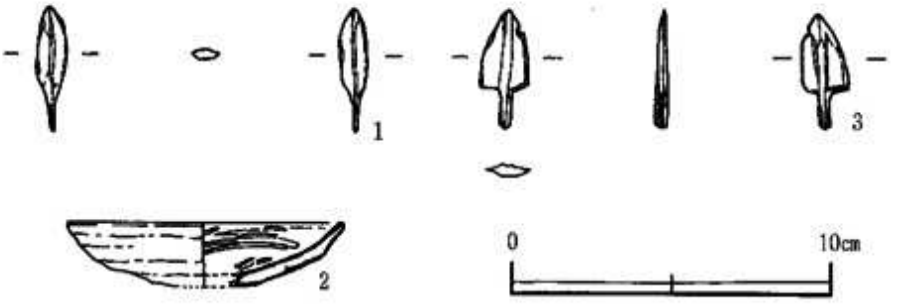
調査区中央部に位置する長軸60㎝、短軸20㎝、深さ8㎝を測る不定形のピットである。埋土は、黒色礫混粘質土である。出土遺物は、凹基無茎無孔式銅鏃のほか弥生土器の細片が出土している。

ＳＫ－12

調査区中央部に位置する直径55㎝の土壙である。土壙の上面はＳＸ－02によって削平されている。内部に堆積する黒色粘質土から弥生土器が出土しており、土器棺墓の可能性がある。

他に主な遺構として、ＳＫ－01・ＳＫ－09から弥生土器片やサヌカイト剥片が出土しており、ＳＫ－03からは土師器片が出土している。上記以外の土壙からは出土遺物がなく時期は不明である。柱穴は、弥生時代と中世の合せて82ヶ所確認したが、掘立柱建物等は検出できなかった。また、ほとんどの遺構の埋土は黒色粘質土であった。

第19図



Aトレンチ SX－01,SX－02出土土器銅鏃図

2）Bトレンチ（第16図）

SD－18

調査区の西側でAトレンチのSD－01と同じく北西から南東方向に走行する溝を検出した。幅は平均3m、深さ60cmを測り、埋土は、SD－01とほぼ同じ堆積状況を示し層位としては、最上層、上層、下層、最下層の5層に分かれる。最上層の埋土は、暗黒色粘土層で層厚は平均15cm～20cmで若干の弥生時代後期（畿内第V様式）から古墳時代前期初頭（庄内式）の土器が混じるが大半が弥生時代中期後半（畿内第IV様式）の土器である。SD－01の最上層との違いは、比較的土器の残存状況が良く、植物遺体が多いことである。上層もSD－01と同じく淡黒色粘質土層は溝内に20cm～25cm厚さでほぼ一様に認められ、弥生時代中期後半（畿内第IV様式）の土器が出土しているが、SD－01と違って、出土量も少なく破片が多い。下層及び最下層は若干堆積状況が違い、特に、最下層はSD－01の無遺物層ではなく、弥生時代中期後半（畿内第IV様式）の土器の出土が多く、土器の残存状況も良好であった。SD－18の出土遺物としては弥生土器以外に、横槌（キヌタ）状小型木製品や独楽状土製品そし線刻した土器片（器台）が出土している。

SB－01

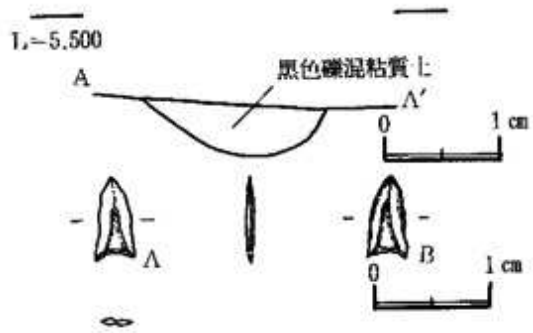
調査区中央部で検出した、推定直径7mを測る不定形の隅丸方形竪穴住居跡である。西半分を中世のSD－19によって切られている。主柱穴は、2ケ所確認したが西半分は検出できなかった。また、周壁溝・カマド・等の施設も検出できなかった。竪穴住居の埋土も、中世のSD－19によって西半分が攪乱をうけており、竪穴住居の東側の掘方と床面のみが残存していた。床面直上からは、6世紀後半の須恵器の坏蓋と土師器の壺の口縁部が出土している。（第21図－1・2）今回検出した竪穴住居跡は、床面から出土した須恵器から6世紀後半の竪穴住居跡と考えられ東奈良遺跡では最も新しい竪穴住居跡となった。

ST－01（第22図～第23図）

調査区中央部北端で検出した古墳時代前期初頭（庄内式古相期）の壺棺墓である。壺棺は、直径1m50cm、深さ30cm以上の掘方内に直立した状態で埋置されていた。この壺棺は、

二重口縁壷であり、棺内に口縁部が落込んでいる状態で検出された。また、この壷棺とともに別の壷の底部が検出されており、口縁部を打砕いた後、別の壷の底部で蓋をしていたものと思われる。棺に転用された、この二重口縁壷は、口径29.0cm、器高62.6cmを測る。壷は直立した頸部上端で強く外反して開き、更に外側に稜を作って屈曲し、外反する二重口縁部をもつ。口縁部に波状文を巡らし、口縁部上端と下端に刻み目文を施す。また、頸部下半には、刺突文をもつ断面三角形の突帯がある。胴部は叩き目を施して整形した後、ヘラミガキを施す。内面には粘土接合痕が認められる。二重口縁壷は全体的に大きく歪んで傾いている。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。蓋に転用された壷底部は、外面はヘラミガキを施す。内面は、摩滅のため調整は不明である。

第20図



Aトレンチ SP－01断面図・出土銅鏃図

ＳＤ－14

調査区中央部やや東寄りで検出した北東方向から南西方向へ伸びる溝で、南半分をＳＤ－13によって切られている。幅は、約50cm、深さは、約10cmを測り、埋土は黒色粘質土であった。出土遺物は、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の水差型土器の脚部が出土している。（第21図－３）

他に主だった遺構として、ＳＤ－10から弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器が出土している。上記以外のＳＤ－01からＳＤ－19からは弥生土器片が出土している。土壙はＳＫ－01からＳＫ－19まで、19ヶ所検出したがそれぞれ弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての土器片が出土している。柱穴も、248ヶ所検出したが、完形の弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の台付短頸壷が出土したＳＰ－101や柱穴に柱痕が残っていたＳＰ－106・ＳＰ－116などがある。また、検出した柱穴248ヶ所のうち、半分以上が出土遺物がなく時期不明であり、土器が出土している柱穴でも細片が多くほとんどが弥生時代のものと推定される。そして、ほとんどの遺構の埋土は黒色粘質土である。

５）出土遺物

出土遺物は、遺構・包含層からコンテナ約100箱程出土した。出土量としては、東奈良遺跡のなかでは周辺部にあたるため比較的少ない。しかし、測図を果たせた資料は時間的に制限されたため限られており、図化しなかったものも必要に応じて取上げ記述する。出土遺物の概略としては、主にＡトレンチで検出したＳＤ－01上層出土土器とＢトレンチで検出したＳＤ－18最上層出土土器を中心に記述する。また、部分的に遺構からの出土遺物については遺構説明時に概略を記述しているので、その部分については検出遺構の所で取

上げている。これ以外の遺構及び包含層の出土遺物については、特別な物についてのみ取上げることにした。

〔1〕SD－01（第24図～第26図）

SD－01上層出土土器は弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の一括遺物である。出土した土器の器種として壺・甕・高坏・器台・台形土器があり、また小型の蛸壺・鞴羽口・擦り石・石鏃などが出土している。

(1)は、広口壺の口縁部で、口径26.5cmを測る。口縁端部は上下に肥厚しており、4条の凹線文と刻み目（6ヶ所）そして、円形浮文（5ヶ所）を施している。また、口縁内端部には櫛描波状文を施している。頸部には櫛描波状文と櫛描直線文を施している。色調は暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。

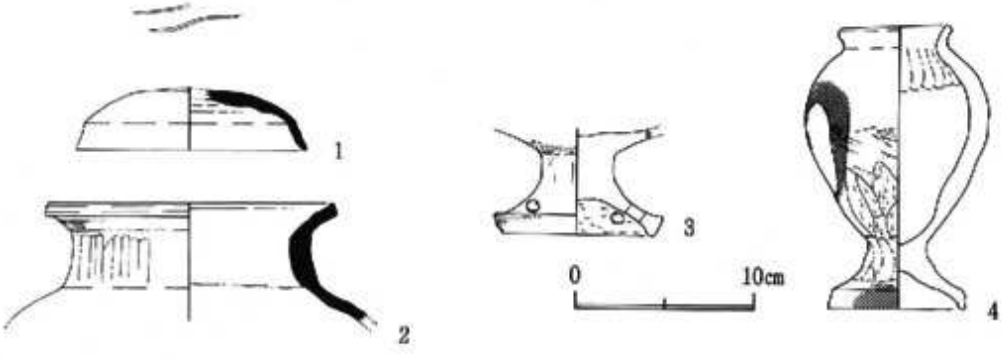
(2)は、広口壺の口縁部で、口径24.0cmを測る。口縁端部は上下に肥厚しており、幅の異なる凹線文が各2条と各1条を施している。口縁内端部には刺突文を施している。頸部には5条の櫛描直線文を施しているが摩滅のため部分的に不明。色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。

(3)は、広口壺の口縁部で、口径13.0cmを測る。口縁端部は上下に肥厚しており3条の凹線文と円形浮文を施している。口縁内端部には刺突文を施している。頸部には、稚拙な櫛描直線文を施している。色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。

(4)甕である。口縁部は「く」字状に外反し口縁部端部は小さくつまみあげている。胴部の調整は内外面とも刷毛目、色調は暗黒色を呈し、焼成は良好である。また、胴部中央部下半には、煤が付着している。

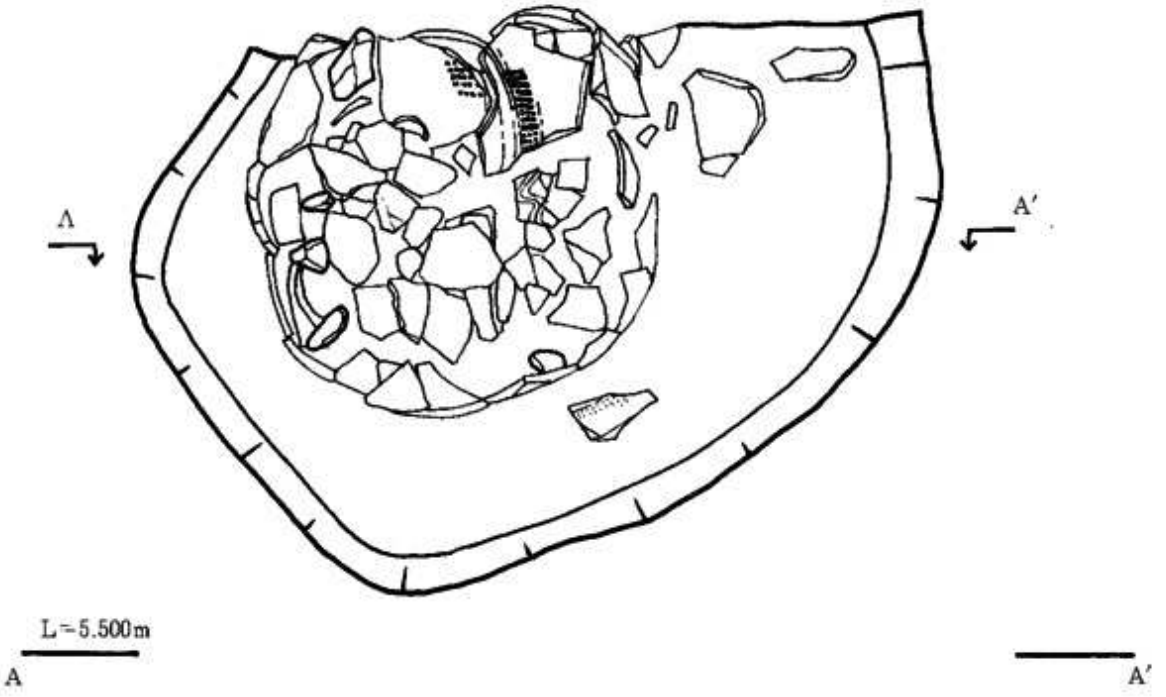
(5)小型の甕である。口縁部は「く」字状に外反し口縁部端部は横ナデ調整により面を持つ。胴部は上から下方への強いナデ調整を施す。底部は「ハ」字状に広がり指頭圧痕が認められる。内面は、口縁部下半に粘土接合痕が認められる。色調は明黄色を呈し、焼成は

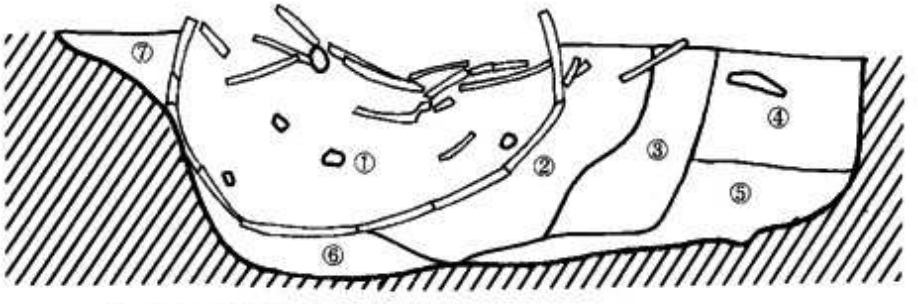
第21図



Bトレンチ SB－01他出土土器図

第22図





① 暗黒色粘質土（土器棺充填土）

② 淡黒色粘質土（ST－01埋土）

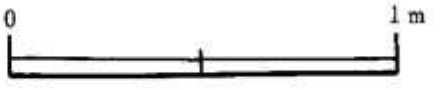
③ 淡灰黒色粘質土（ST－01埋土）

④ 暗茶褐色粘質土（ST－01埋土）

⑤ 淡灰褐色粘質土（ST－01埋土）

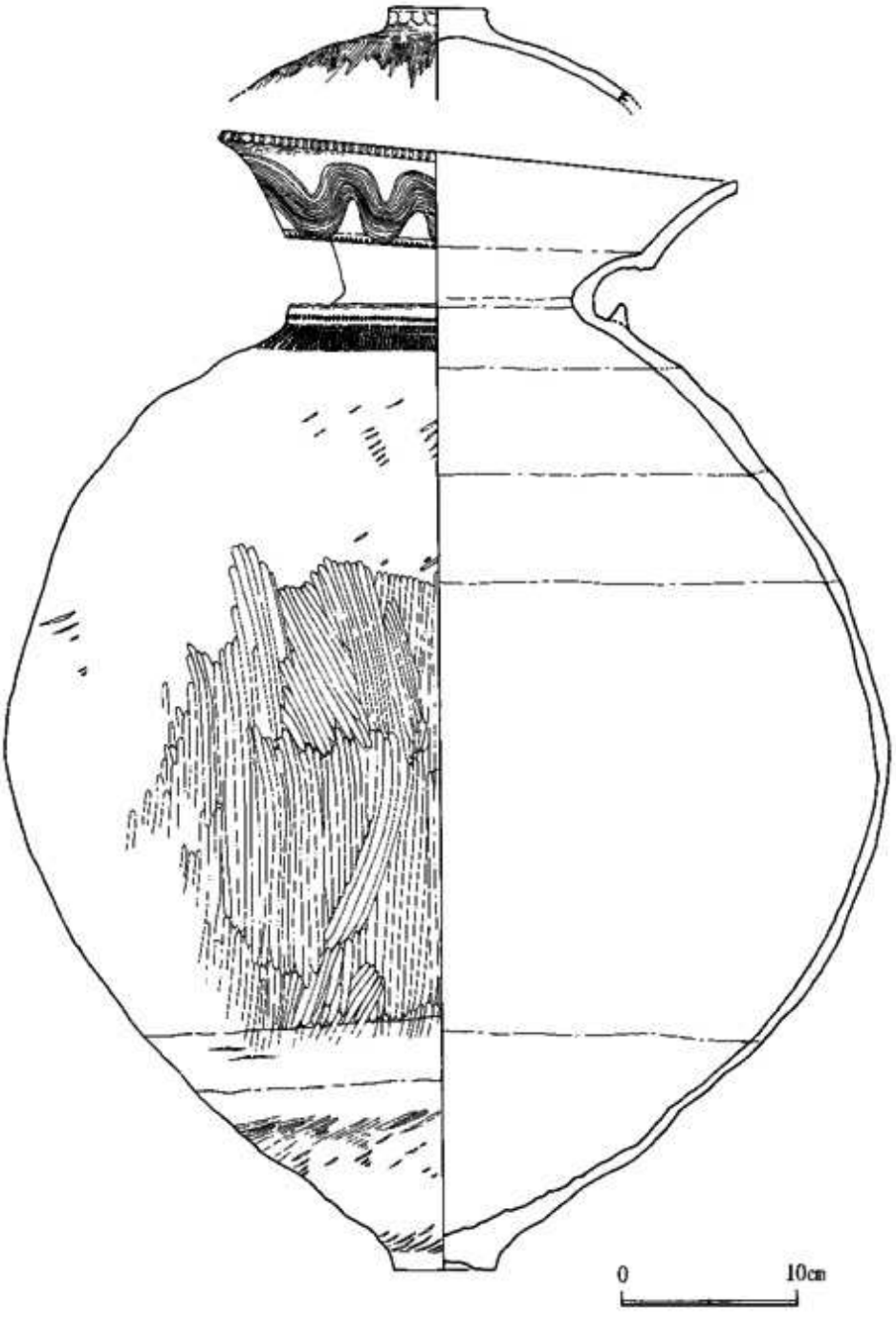
⑥ 黒黄色礫混粘質土（ST－01埋土）

⑦ 淡黒灰色礫混粘質土（ST－01埋土）



Bトレンチ ST－01検出状況図

第23図



Bトレンチ ST－01出土土器図

良好である。

(6)小型イイダコ壺である。外面は上から下へのヘラ削り、口縁部には、片口状に窪ませて横ナデ調整を施す。また、口縁部直下には、焼成前に2ヶ所穿孔している。内面は、底部付近のみ指オサエによる指頭圧痕が認められる。色調は淡黄灰色を呈し、焼成は良好である。底部は平底を呈し、脇浜遺跡の「蛸壺形土器」の分類ではI類に属するが、外面調整はヘラ削りのためa類、b類ともあてはまらない[1]。

(7)高坏の脚部である。脚端部を上下に拡張しており、脚柱部は上から下へのヘラミガキ、脚端部は横ナデ調整を施す。脚柱部内面にはしぼり目が認められる。色調は淡黄灰色を呈し、焼成は良好である。

(8)高坏の脚部である。脚端部を上下に拡張しており脚柱部は7～8条の凹線文を施す。また、約1・2cm間隔でスカシ孔がある。外面の調整は摩滅しているがヘラミガキを施している模様、また、内面は、ヘラ削りで杯部と脚部との間に円盤充填が認められる。底径は、12.0cmを測り、色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。

(9)台形土器である。脚部内外面は弱いナデ調整を施すが摩滅が著しく詳細は不明。脚部内面に台座部分との接合痕あり。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。

(10)擦り石である。石の種類は砂岩質で形状は楕円形を呈し、U字状の擦り面が認められる。擦り面には朱あるいはベンガラ痕が認められ、握手部分は茶色に変色している。最大幅11.8cm、厚さ、6.6cm、重さ、1.37gを測る。

(11)凸基有茎式石鏃である。中央に稜が通り側縁は直線的にのび先端に移行するが先端部の一部は欠損している。A面、B面とも、両側縁に明瞭な調整剥離を施す。残存長4.4cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重さ3.5gを測る。材質はサヌカイトである。

(12)台形土器である。脚部外面は上から下への荒い刷毛目調整を施す。台座の部分は時計回り（右回り）のヘラ削りが認められる。また、台座中央部付近には粘土粒が帯になって付着している。台座口縁部は弱い横ナデ調整を施し、内面は横方向の荒い刷毛目調整後、上から下へのヘラミガキを施す。台座内面は未調整で粘土粒が残っている。台座径は、22.5cm、残存高は、21.5cmである。また、色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。

(13)は器台の口縁部である。口縁端部を上下に拡張して、6条の凹線文と棒状浮文（3ヶ1対）を施している。口縁内端部には刺突文を2帯施している。口径33.4cmを測り、色調は暗黄色を呈する。焼成は良好である。

(14)鞴口である。外径4.7cm、内径2.5cmを測る。特徴として、外面は部分的に不明瞭な部分もあるが、先端部から逆方向へのヘラ削りを施す。内面は竹管等の痕跡と煤状の炭化物が認められる。胎土は1mm～3mmの石粒が認められ色調は淡灰色を呈する。焼成は良好である。

(15)鞴口である。外径4.8cm、内径2.5cmを測る。鞴口の先端部にあたり、外面は先端部方向へのヘラ削りを施し、特に先端部には多くの煤及び炭化物が付着している。内面は竹管

等の痕跡と煤状の炭化物が認められる。胎土は1㎜～3㎜の石粒が認められ、色調は淡黄色を呈する。焼成は良好である。

⑯鞴口である。外径7.0㎝、内径4.0㎝を測る。鞴口の接合部にあたり、外面は接合部と逆方向へのヘラ削りを施す。接合部面は平坦でナデ調整を施し煤の付着はほとんど認められない。内面は竹管等の痕跡あり。胎土は1㎜～3㎜の石粒が認められ、色調は淡黄色を呈する。焼成は良好である。

〔2〕SD－18（第27図）

SD－18最下層出土土器は弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の一括遺物である。出土した土器の器種として、壺、甕、高杯、器台があり、用途不明の独楽状土製品やミニチュアの横槌などが出土している。

⑴は広口壺の口縁部である。漏斗状に開く頸部に水平に折れ曲る口縁端部は上下に拡張する。口縁部には5条の幅の違う凹線文と円形浮文（5ヶ1対）を施している。口縁内端部には刺突文をほどこしている。頸部は9条1帯の櫛描直線文を5帯を施している。色調は明黄色を呈する。焼成は良好である。また、口径は12.3㎝を測る。

⑵は壺または、甕の底部である。底部から胴部へと大きく開き平底を呈する。調整は、摩滅が著しく両面とも不明。色調は明黄色を呈する。焼成は良好である。

⑶甕の底部である。底部から胴部へと大きく開き、底面中央部は凹む。調整は、外面上から下へのヘラ削り又はヘラミガキを施している。内面胴下半部ヘラ削りを施す。色調は暗黄色を呈する。焼成は良好である。

⑷高坏の脚部である。柱状部は長く裾までなだらかに広がり脚端部を上下に拡張している。脚柱部は上から下への丁寧なヘラミガキを施した後、7～8条の凹線文を3ヶ所施す。柱状部は中空になっており、内面はヘラ削りを施す。柱状部と裾部に煤が付着している。低径は、14.7㎝を測り、色調は明黄色を呈する。焼成は良好である。

⑸高坏の脚部である。柱状部は長く裾までなだらかに広がり脚端部を上下に拡張しており、凹線文を4条施している。また、裾端部にも4条の凹線文を施す。脚柱部は上から下への丁寧なヘラミガキを施した後、6～7条の凹線文を3ヶ所施す。内面はヘラ削りで杯部と脚部との間に円盤充填が認められる。低径は、15.2㎝を測る。色調は明黄褐色を呈する。焼成は良好である。裾端部に煤が付着している。

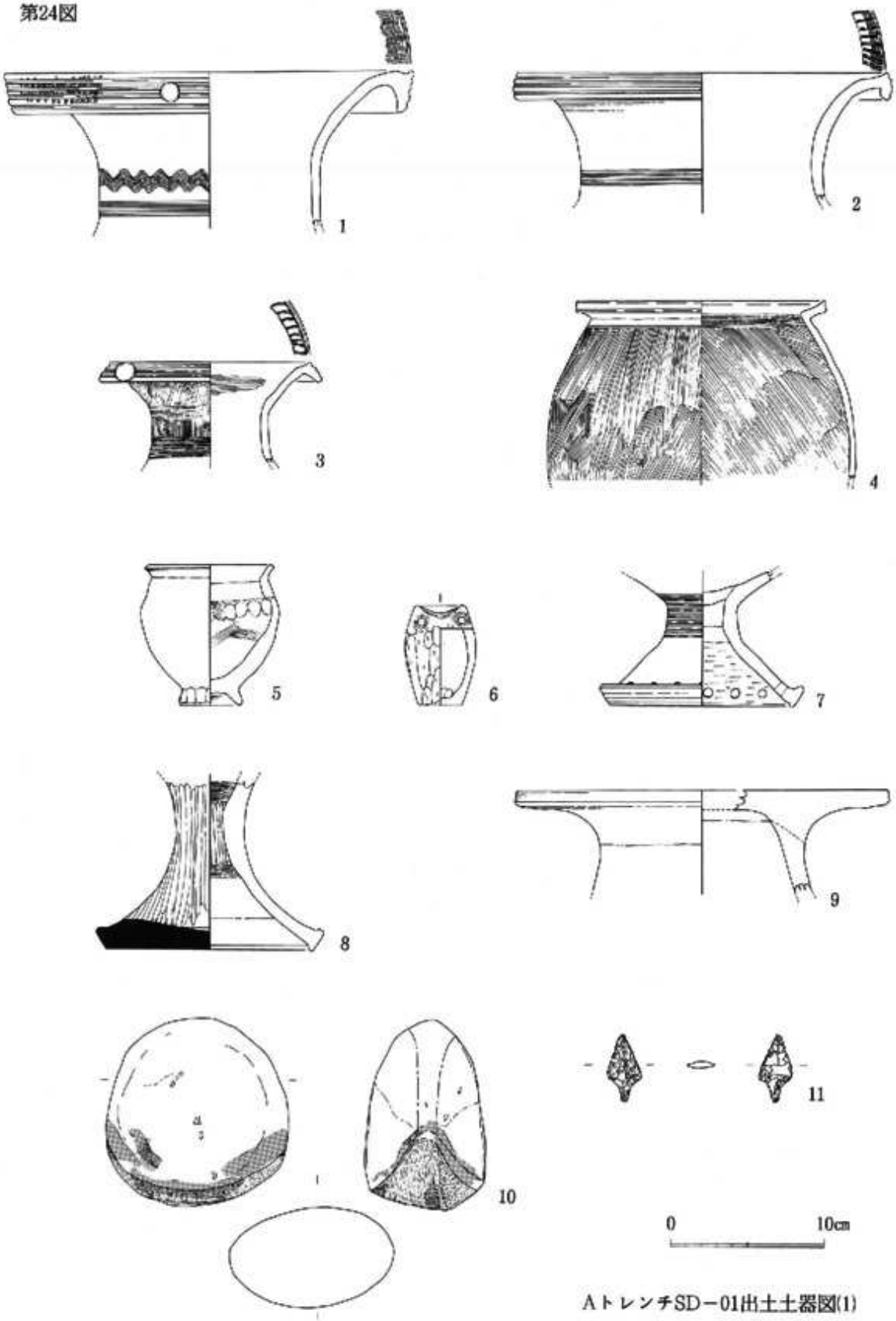
⑹台付鉢の脚部である。柱状部は短く裾までなだらかに広がり脚端部を上下に拡張している。鉢部外面は、上から下への丁寧なヘラミガキ、内面は刷毛目調整をほどこす。また、脚部外面はナデ調整、内面はヘラ削りを施す。色調は暗黄褐色を呈する。焼成は良好である。

⑺独楽状土製品である。特徴としては、上面の平坦面に深さ約1.9㎝の孔があるが貫通していない。胎土は緻密である。焼成は良好で、色調は淡黄色を呈する。土製の紡錘車の変形か？　現在の所類例は見当たらない。

(8)ミニチュアの横槌である。槌部は⅓程欠損している。特徴として、槌部下半部に鋸歯文状の模様を彫刻する。また、柄の部分は、断面円形で柄先端部付近はややふくらむ。そして、槌部と柄部の境界は、小さい段を設けて区分している。槌部・柄部ともに丁寧な加工を施し、工具痕は平均はば1.0cm前後である。全長8.1cm、槌部長、5.3cm、槌部長2.3cm、柄の径0.7cmである。池上遺跡「木器編」の分類[(2)]では、断面が円形なので第Ⅰ型式である。ミニチュアの横槌及び独楽状槌製品は東奈良遺跡では初例である。

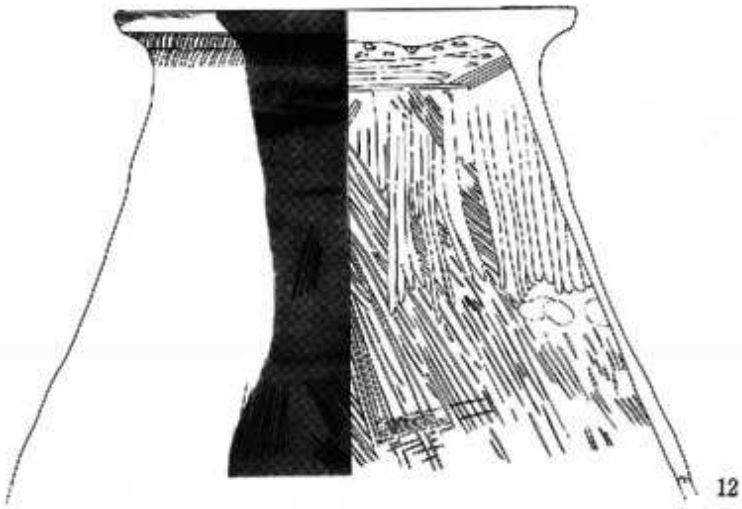
(9)器台である。この器台の出土層は埋土最上層である。特徴として、外面は上から下への荒い刷毛目調整を施す。全体的に摩滅しているため調整等が分りにくい。色調は暗黄褐色を呈する。焼成は良好である。この器台の時期は弥生時代後期初頭と推定され、SD－18の最終埋没時期を示めす土器である。

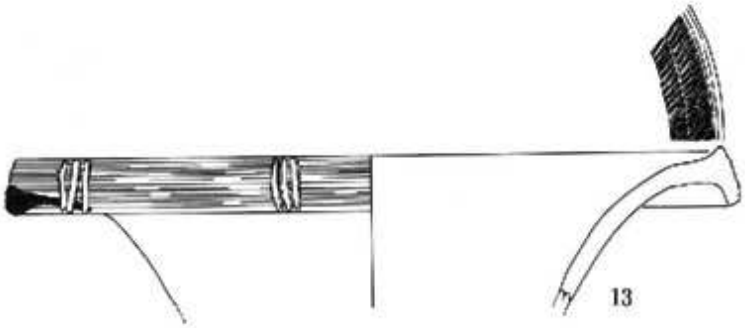
第24図



AトレンチSD－01出土土器図(1)

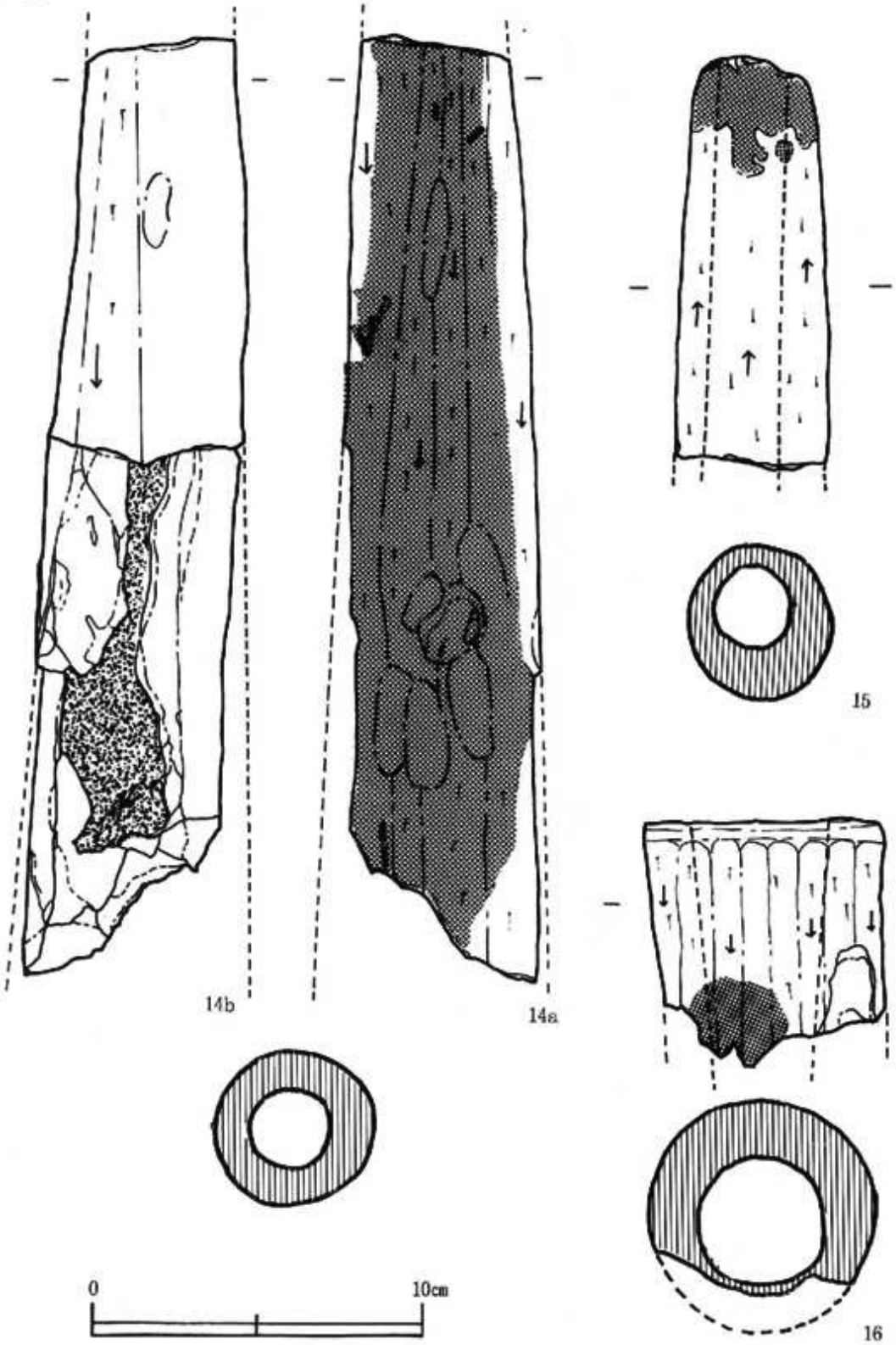
第25図





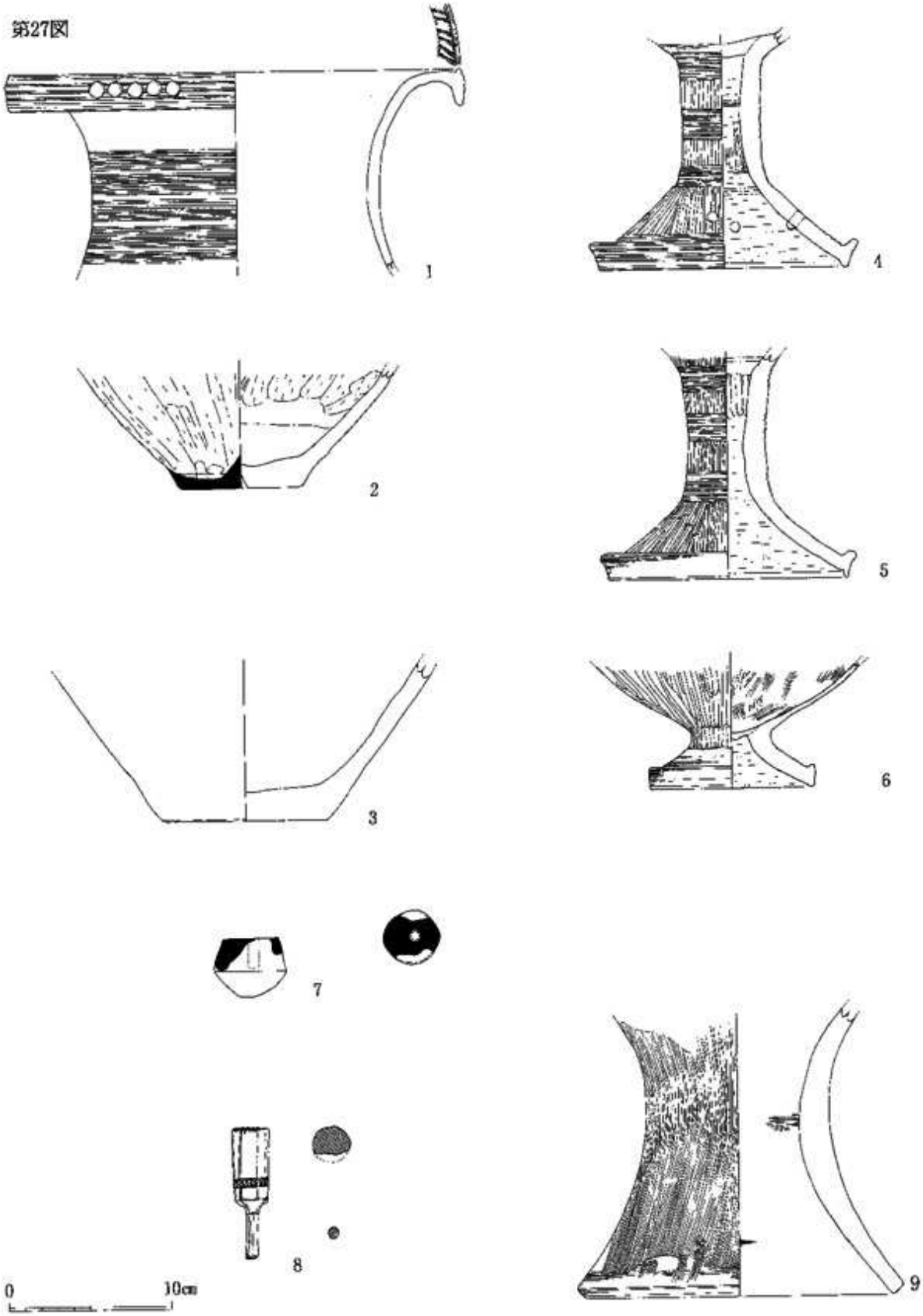
Aトレンチ SD－01出土土器図(2)

第26図



Aトレンチ SD－01　出土土器図(3)

第27図



Bトレンチ SD－18出土土器図

〔3〕遺物包含層（第28図）

第11層の淡黒色粘質土層及び第12層の黒色粘質土層からは、弥生時代から中世に至る遺物が出土しているが細片が多く図化できる遺物は少ない。このなかで特徴的な遺物のみ取上げることにした。

(1)は管状土錘である。直径3.9cmを測る。中央部に孔径0.6cmの孔が貫通している。色調は暗黄灰色を呈する。焼成は良好である。弥生時代の土錘か？

(2)土製円板である。壺・甕・鉢型土器の破片を再利用したものである。弥生時代中期の甕の胴部付近の破片を再利用しており外面はヘラ削り痕を残し、内面は刷毛目を一部に残している。また、周縁を丁寧に研磨している。土器片を再利用した紡錘車と推定されており東奈良遺跡では、現在10点以上出土している。

(3)不定形刃器である。現長62.0cm、幅32.0cm、厚さ6.0cm、重さ22ｇを測る。材質はサヌカイトである。A面は押圧技法による調整剥離が認められる。側端部には、自然面を残すが風化は著しくない。

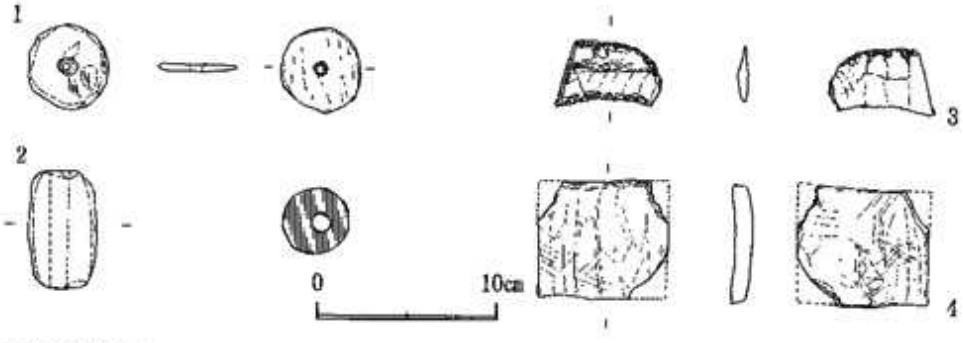
(4)温石である。滑石製石鍋片を再利用したものであり、特徴としてA面、B面とも小さな擦痕があり煤痕を残す。また、端部は研磨しており、一部欠損しているがほぼ正方形をしていたと推定される。現長76.0cm、幅66.0cm、厚さ9.5cm、重さ181ｇを測る。色調は灰青色を呈している。生産地は現在、長崎県西彼杵半島と推定されているが、畿内でも和歌山県で滑石を産出しており、現在の所生産地は不明である。また、滑石製石鍋片を再利用した温石の類例は近隣では少なく、もっとも近い遺跡は箕面市如意谷遺跡から出土している。

（濱野）

註1　（財）大阪府埋蔵文化財協会「脇浜遺跡Ⅱ発掘調査報告書」1988年

註2　（財）大阪文化財センター「池上遺跡・第4分冊の2・木器編」

第28図



包含層出土遺物図

第5章　まとめ

本年度報告するのは、HN　I－4－D・I－5－A地区とHN　G－7－C・G・K地区の2地点で東奈良遺跡のみの報告となった。現在までの調査成果と両地点の調査成果は、第2章及び第3・4章で記述したとおりであるが、今回の発掘調査で判明した重要な点をまとめ、若干の考証をしてまとめとしたい。

HN　I－4－D・I－5－A地区は、東奈良遺跡の南西部に位置しており、過去東奈良遺跡のなかでも最も発掘調査を実施されている地点である。そのため比較的遺跡の様相が判明している地域である。今回の調査においても弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構や遺物が検出されており、遺跡の様相は付近の既往の調査結果と合致している。そうしたなかで今回の調査において判明した重要な点としては、井戸－1の下層出土一括遺物（第7図－1～8）があげられる。井戸の下層で出土した完形の土器群で、庄内併行期の甕が4点、壺が3点認められた。出土土器群中特に甕の全体的なプロポーションは球形化を志向しているが、「く」の字形口頸部の屈曲部が鈍くなっており、1点を除いて口縁端部をつまみ上げておらず、外面の叩き目も粗く粗雑な作りのものが多い。また、内面もヘラ削り技法を採用していない。壺（第7図－3）の中には、庄内期に多用される櫛描波状文が認められるが、全体的に、畿内第V様式に直続する古式土師器の一群であり、東奈良遺跡に、庄内式甕が直接搬入されない古相期を占める伝統的な弥生畿内第V様式の系譜を引く甕を中心にして形成されている土器群と理解される。井戸－1の下層出土一括遺物は庄内期のなかでも古相期に属し、東奈良編年にあてはめると、東奈良Ⅱから一部東奈良Ⅲにかかる土器群と考えたい。他に、特徴的な遺構として土壙－1がある。直径長軸2.4mを測る楕円形を呈する土壙である。全体的に完形の土器が少なく、土器摩滅が著しい。出土土器の時間幅も、弥生時代後期後半から古墳時代前期（布留式）までの遺物を含み、出土土器の器種も、甕・壺・高坏・有孔鉢・小形丸底壺・小形器台等とバラエティーに富んでおり、土器廃棄壙の様相を呈している。特に、真蛸壺の可能性を残すが、おそらく台脚付鉢形土器タイプの製塩土器と思われる破片が出土しており、内陸部に位置する東奈良遺跡において、蛸壺や土錘等の漁撈具関係の遺物とともに注目したい。

HN　G－7－C・G・K地区は、東奈良遺跡の南西部に位置しており、過去、完形銅鐸鋳型等が出土した小堀マンション建設地点の至近地にあたる。今回の調査においても、銅鐸鋳型を含め青銅器製作工房跡の検出に期待があったが、調査地付近は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて墓域になっている。特に、中世において削平・整地などの大規模な土地改変がおこなわれており、今回の調査においても銅鐸鋳型を含め青銅器製作工房跡の検出はできなかった。しかし、間接的に銅鐸鋳型を含め青銅器製作工房跡の存在や製作時期を窺わせる遺構や遺物が出土した。また、弥生時代後期以降の調査地付近の土地利用の変遷がある程度判明した。以下重要な点を要記すると、下記のごとくなろう。

(1)　Aトレンチの東側で検出したSD－01は、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の溝であり、鞴の羽口など銅鐸鋳型を含め青銅器製作工房跡が付近に存在した可能性がある遺

物が出土しており、ＳＤ－01は青銅器製作工房跡を囲む溝の可能性が高い。また、Ｂトレンチの西端で検出したＳＤ－18もＳＤ－01と同じく弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の南北溝である。ＳＤ－18からは、鞴の羽口の破片が１点しか出土しておらずＳＤ－01の外側を巡る溝の可能性が高く、青銅器製作工房跡が存在した地域は、今回の調査地より北東よりに存在する可能性が高くなった。

(2) ＳＤ－01埋土上層から出土した土器群は、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の一括遺物であり、東奈良遺跡及び摂津北部における地域色と型式編上にしめる位置を考察する上の資料を提供したといえよう。また、小堀マンション建設地点で検出された銅鐸鋳型をはじめ、鞴の羽口等は弥生時代中期から古墳時代前期初頭の遺物包含層から検出されており、銅鐸の製作時期は弥生時代中期であろうと推定されていた。今回、ＳＤ－01埋土上層から出土した弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の一括遺物である土器群と伴に、鞴の羽口の破片が出土していることは銅鐸鋳造を含め青銅器製作が東奈良遺跡では、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の時期におこなわれたことが確実視されることとなった。

(3) 東奈良遺跡では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけて、吉備・山陰・近江などの搬入土器が出土しているが、ＳＤ－01埋土最上層から出土した縄文を施した細頸壺の破片は、弥生時代中期の遺物とみて大過なく、搬入土器として考えたい。現在のところ畿内周辺を調べてみたが、弥生時代中期において、縄文を施した細頸壺を採用している地域は、尾張・三河・遠江の天竜川以西地域では見当たらず、伊勢湾沿岸の北勢（鈴鹿川流域以北）の一部と中勢（安濃川流域）・南勢（雲出川流域以南）そして、伊賀において散見される。また、志摩や紀伊の東側（尾鷲市や新宮市付近）は、弥生時代中期の遺跡の発掘調査が少なく不明である。当地で検出される縄文を施した細頸壺は、現在の所、南勢の花ノ木遺跡や和遅野遺跡、伊賀の北切遺跡や下川原遺跡で出土している。時期としては、貝田町式土器の時期あるいは、最近の伊勢・志摩地域の土器編年では、Ⅲａ期及びⅢｂ期にあたる。当地で検出される縄文を施した細頸壺の特徴は、縄文を施したあと強い横撫でにより、縄文の一部を消して数区画に分割しており、東奈良遺跡で出土した土器のように全面縄文を施さず、そして上から下への区画を意識した撫では認められない。また、頸部には突帯及び楕円形の浮文は付けない。しかし、全体的なプロポーションは良く似ており、また縄文を施すことなどの共通点もある。現在の所、縄文を施した細頸壺が出土する遺跡は全体的に少数である。また、縄文を施した土器は在地の土器の中でも少数で、伊賀及び中勢（安濃川流域）・南勢（雲出川流域以南）においても主に山間部で見つかっている。そして、頸部に突帯を付けたりするのは、畿内的な様相が強いことから東奈良遺跡で出土した土器は、弥生時代中期の土器の様相が不明な志摩や紀伊の東側（尾鷲市や新宮市付近）および紀伊半島の山間部の土器の可能性があることを指摘しておきたい。

(4) 今回の発掘調査で、銅鏃が３本も出土している。銅鐸鋳型を初め東奈良遺跡の推定青

銅器製作工房跡の付近で調査を実施したのであるから、銅鏃が3本ぐらい出土しても不思議でもない。しかし、東奈良遺跡では、ひとつの調査区からの出土数は最高本数である。また、現在までに東奈良遺跡で確認されている銅鏃出土数は6本しかなく今回の調査での3本は多い。また、今回出土したそれぞれの銅鏃のタイプが違っており、過去の出土した銅鏃のタイプをいれると、数種類の銅鏃を東奈良遺跡で生産していた事がわかる。特に、ＳＰ－01から出土した凹基無茎孔式銅鏃は東奈良遺跡では初例であり、畿内ではめずらしいタイプである。ＳＸ－02から出土した凸基有茎式銅鏃と同タイプの銅鏃が東奈良遺跡の小川水路から採集されており、近隣では高槻市安満遺跡で出土している。弥生時代における畿内の銅鏃は、鉄鏃の補完的な存在であるが、東奈良遺跡などの拠点集落では数種類の銅鏃を生産し、そして数量的にも多数所有していた可能性があることを指摘しておきたい。

(5) 弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて、調査地一体は、墓域になった可能性が高く、小堀マンションの調査あるいは大阪府教育委員会が実施した範囲確認調査においても方形周溝墓や円形周溝墓が検出されているが、今回の調査においても土器棺墓が2基検出された。特にＢトレンチから出土した土器棺墓は残存状況が良好で庄内式の古相期に属する大形二重口縁壺は初例である。全体的に大きく歪んで傾いているが、頸部下半には、刺突文を持つ断面三角形の突帯を付けている事などの特徴があり、東奈良遺跡及び摂津北部における地域色や型式編年上に占める位置そして古墳時代前期の大形二重口縁壺の系譜を考察する上の資料を提供したといえよう。

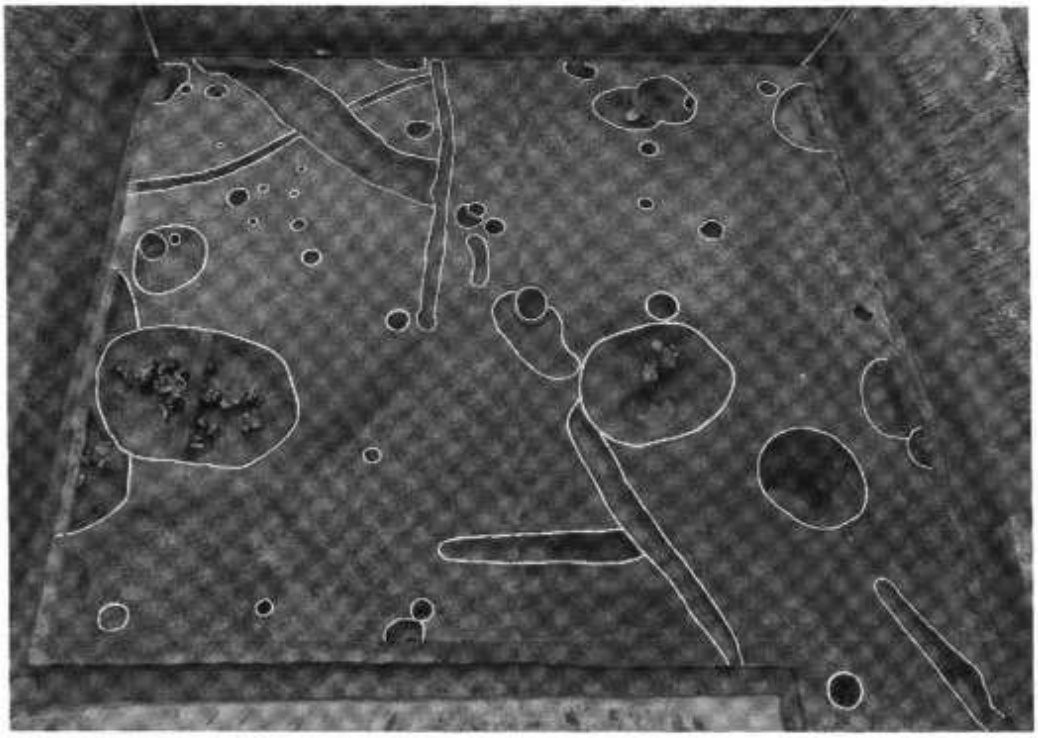
(6) 弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて、墓域になった調査地一体は中世を迎えると、再び大規模な土地改変をうける。Ａトレンチで検出したＳＸ－01・ＳＸ－02の落込みや削平後の整地層上に形成された柱穴群が中世における当該地の土地利用を物語っている。そして、小堀マンション地点を含めて調査地付近は、溝などの遺構を除いて、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の遺構は、削平・整地を受けている。このため銅鐸鋳型をはじめ、鞴の羽口等が弥生時代中期から古墳時代前期初頭の遺物包含層から出土しているのは、上記の理由によるためであろう。削平・整地などの大規模な土地改変は出土した瓦器から13世紀後半ぐらいに行なわれた模様である。また、同時期の遺構として、大阪府営住宅建て替えに伴う発掘調査においても13世紀代の南北方向の大溝や東西方向の条理制地割りに合致する大畦畔が検出されており元茨木川右岸の中世における大規模な上地改変を指摘できると思う。

以上のように、今回の発掘調査により、東奈良遺跡について新たな知見を得ることができた。今後も東奈良遺跡に対する開発行為は増加する一方であるが、点的調査を積極的に実施して東奈良遺跡の正確な範囲や規模を早期把握したいと思っている。（濱野）

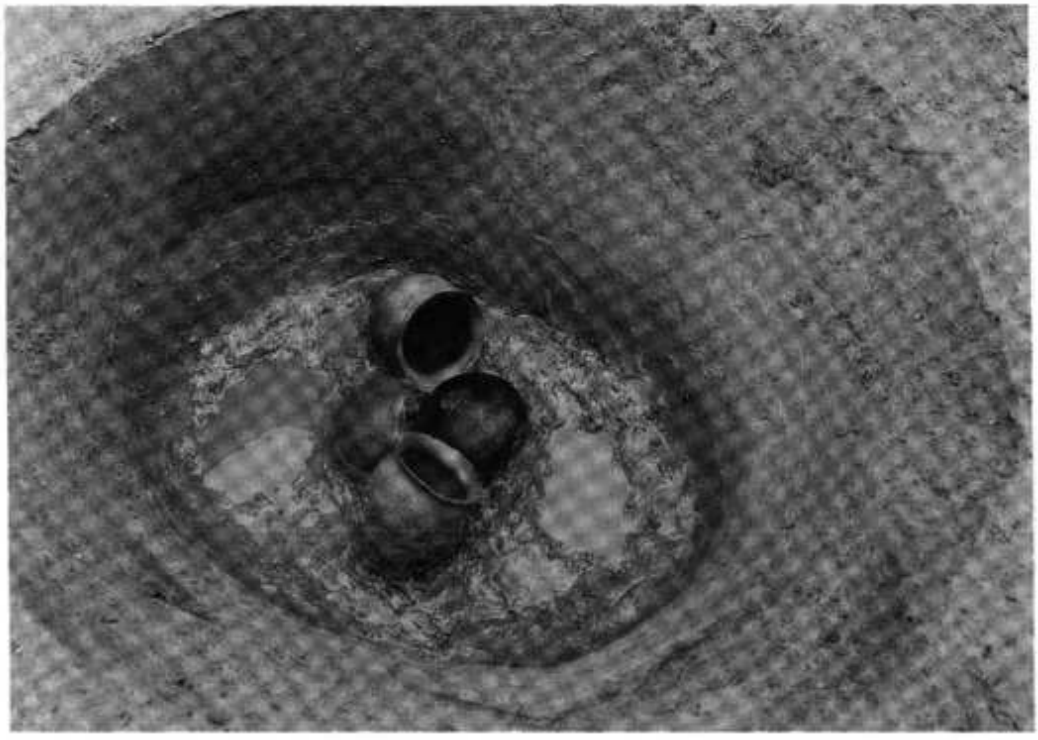
註1　東奈良遺跡調査会「東奈良、発掘調査概報Ⅰ」1979年

註2　東海埋蔵文化財研究会「伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題」
　　－上器・墓・ムラにみる画期と地域間交流－　1990年12月

図版 1

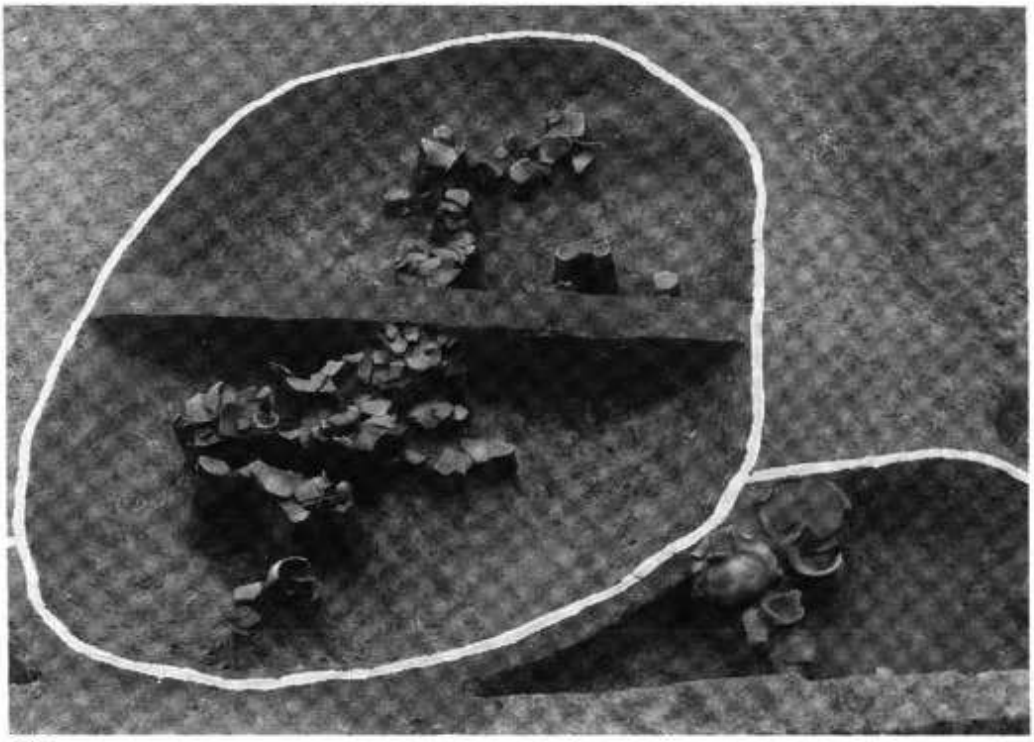


HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　　調査区全景（南から）

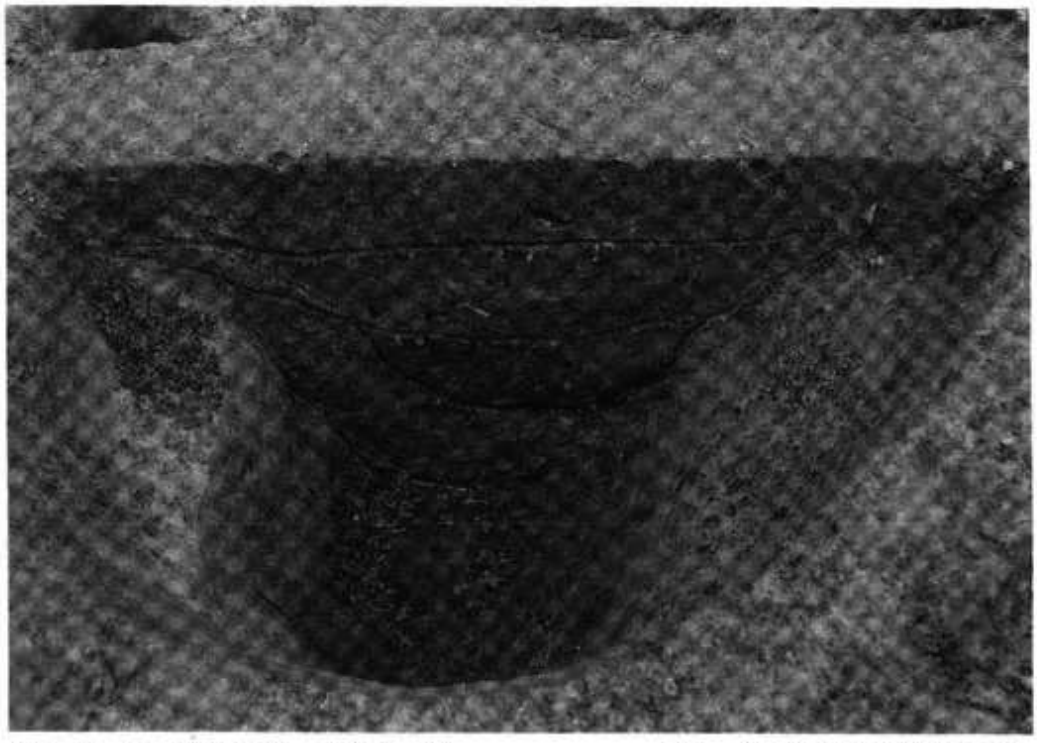


HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　　井戸－1，下層土器群出土状況

図版2

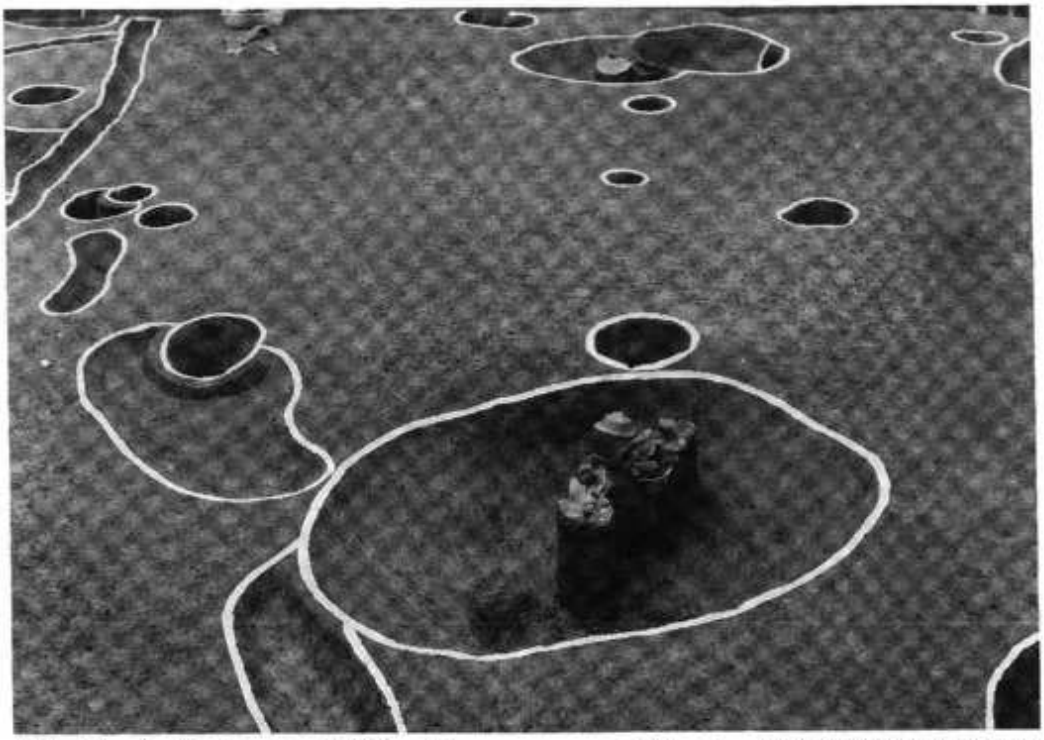


HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　　土壙1・2土器出土状況図

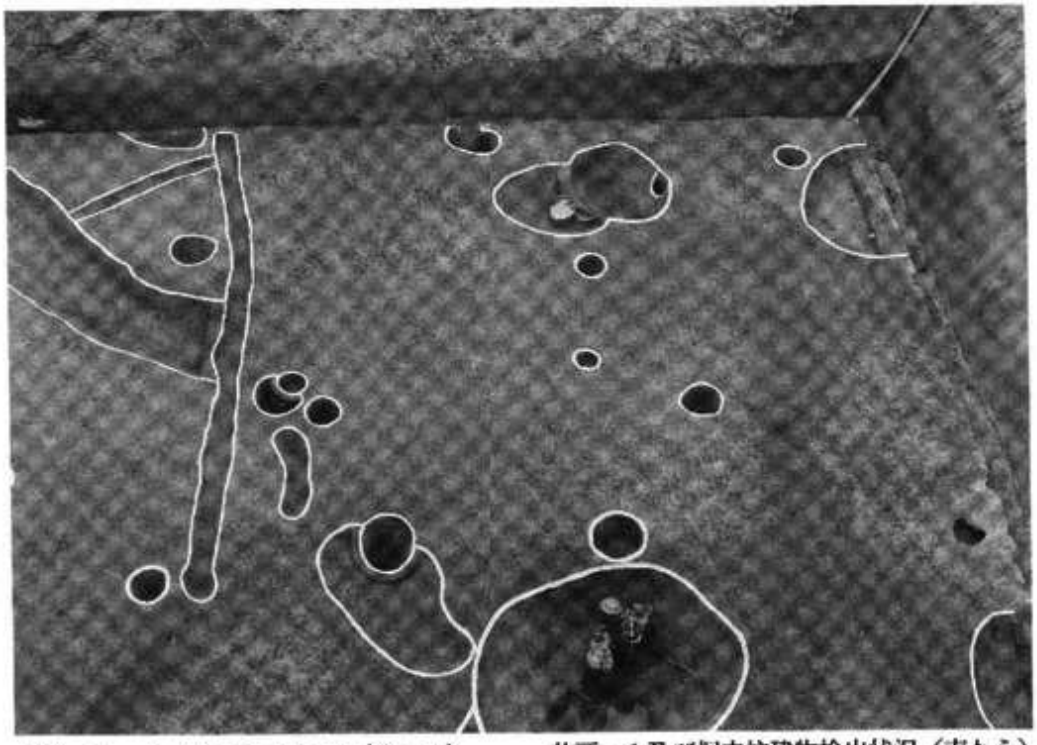


HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　　土壙－4土層堆積状況（北から）

図版 3



HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　　井戸－1，上層土器状況図（南から）



HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　　井戸－1及び掘立柱建物検出状況（南から）

図版 4

4

7

5

8

HN　I－4－D・I－5－A（89－4）6

出土遺物(1)　3

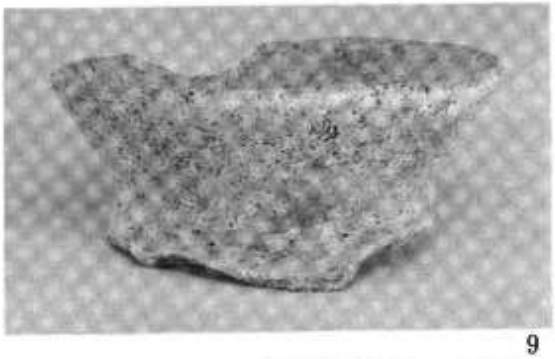
図版 5

1

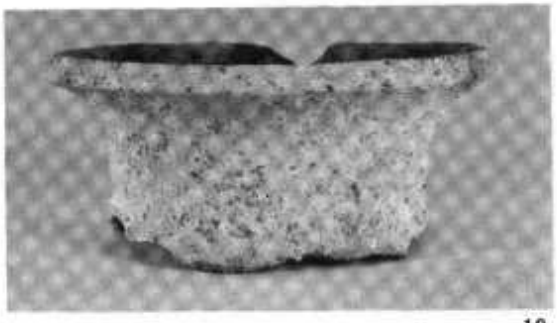
2

HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　11

12



9



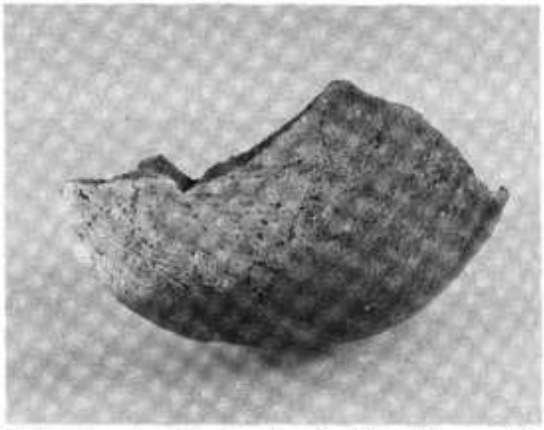
10

出土遺物(2)　36

図版 6

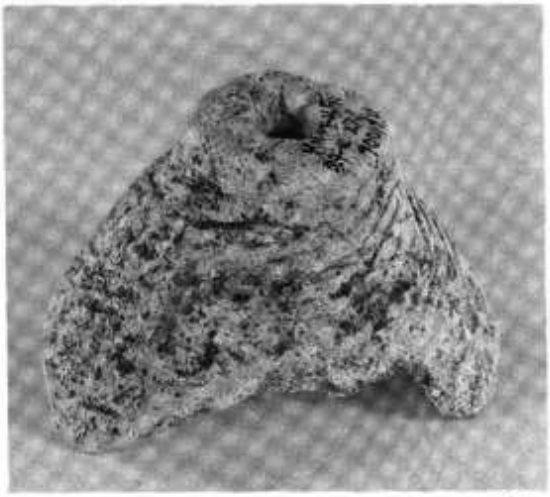
13

14

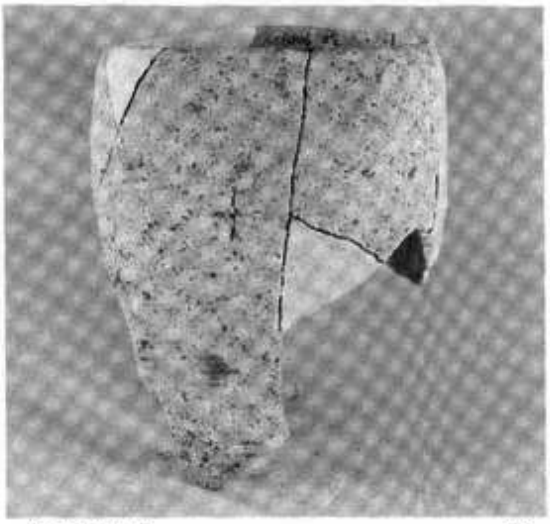


HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　15

37



24



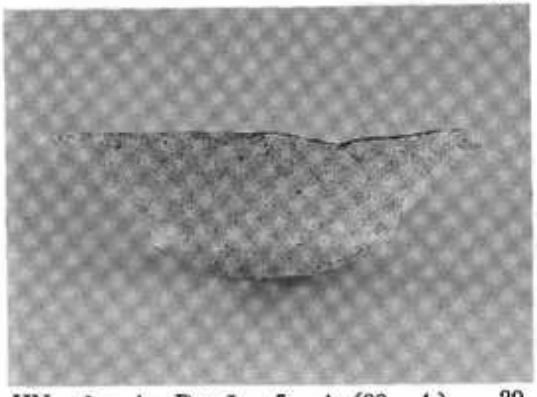
出土遺物(3)　25

図版 7

26

27

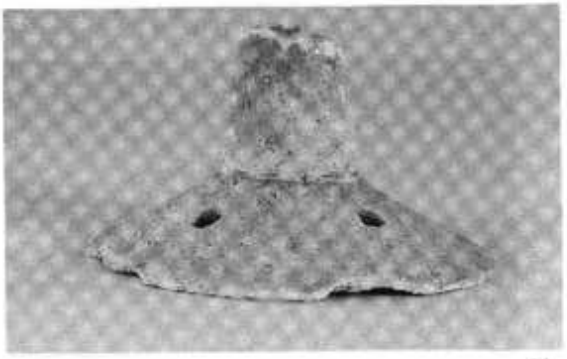
28



HN　I－4－D・I－5－A（89－4）　29

31

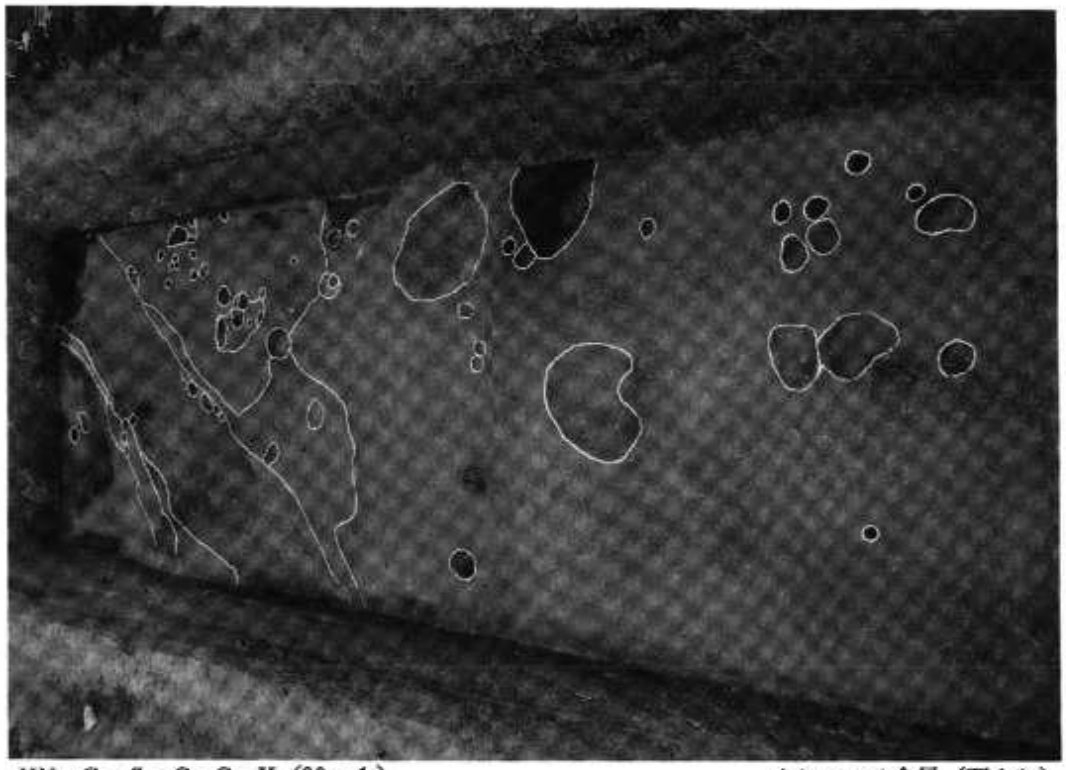
30



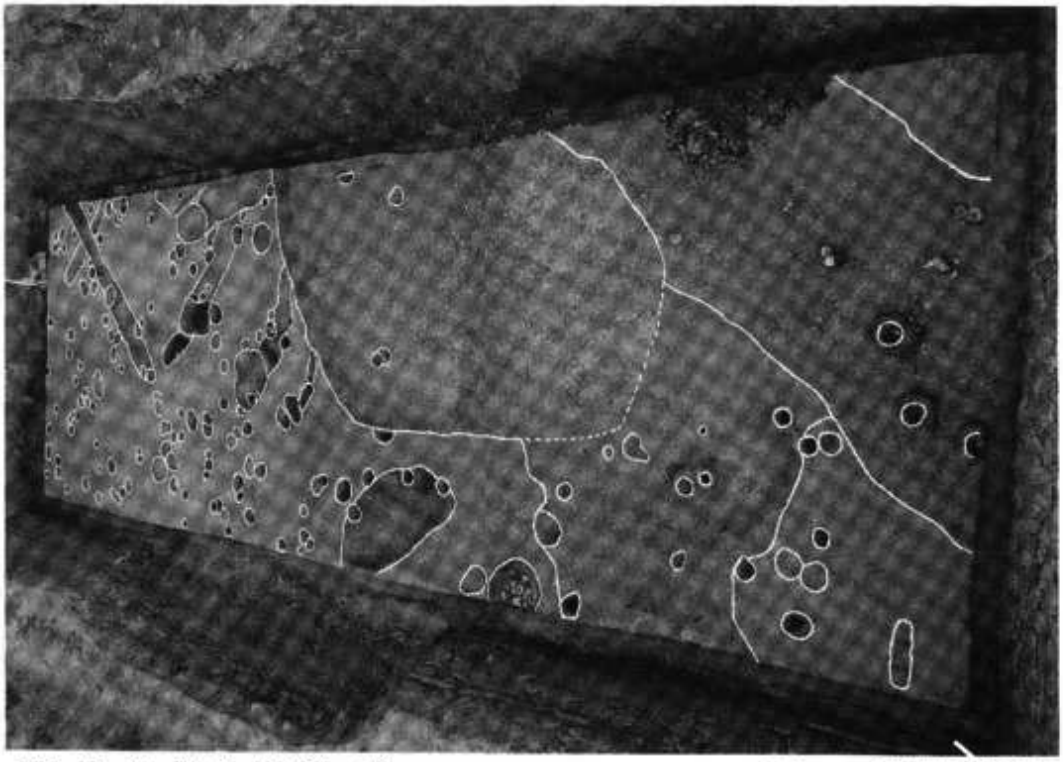
33

出土遺物(4)　34

図版8

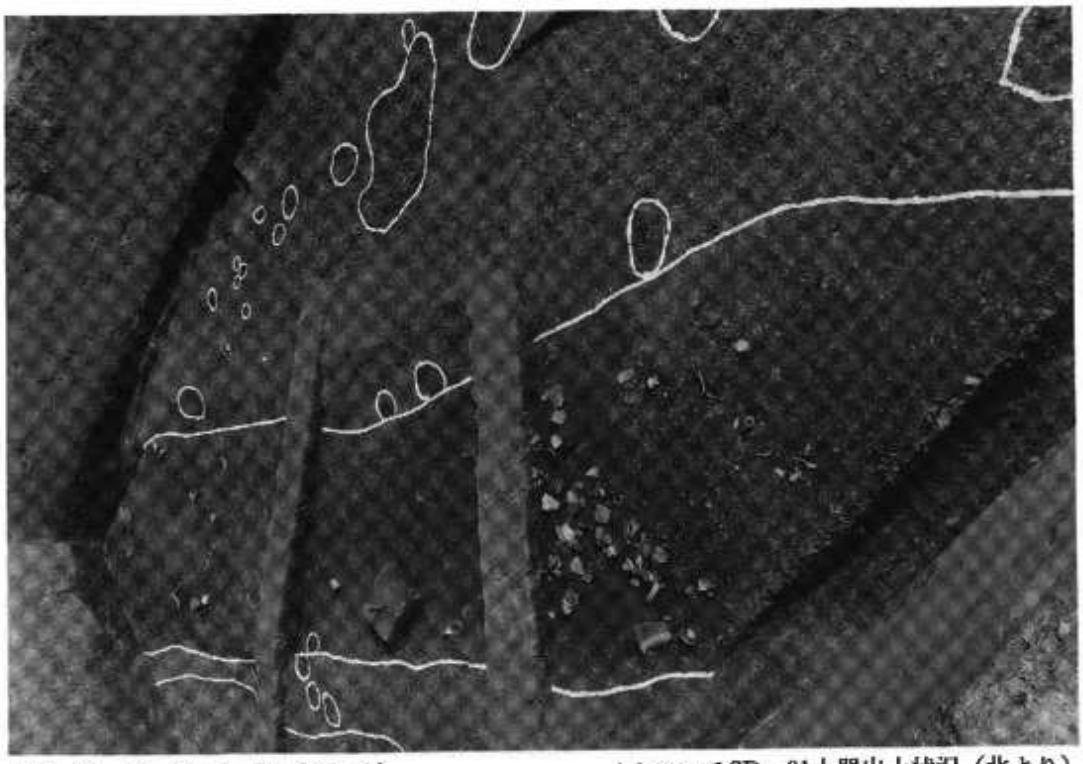


HN　G－7－C・G・K（90－1）　　Aトレンチ全景（西より）



HN　G－7－C・G・K（90－1）　　Bトレンチ全景（西より）

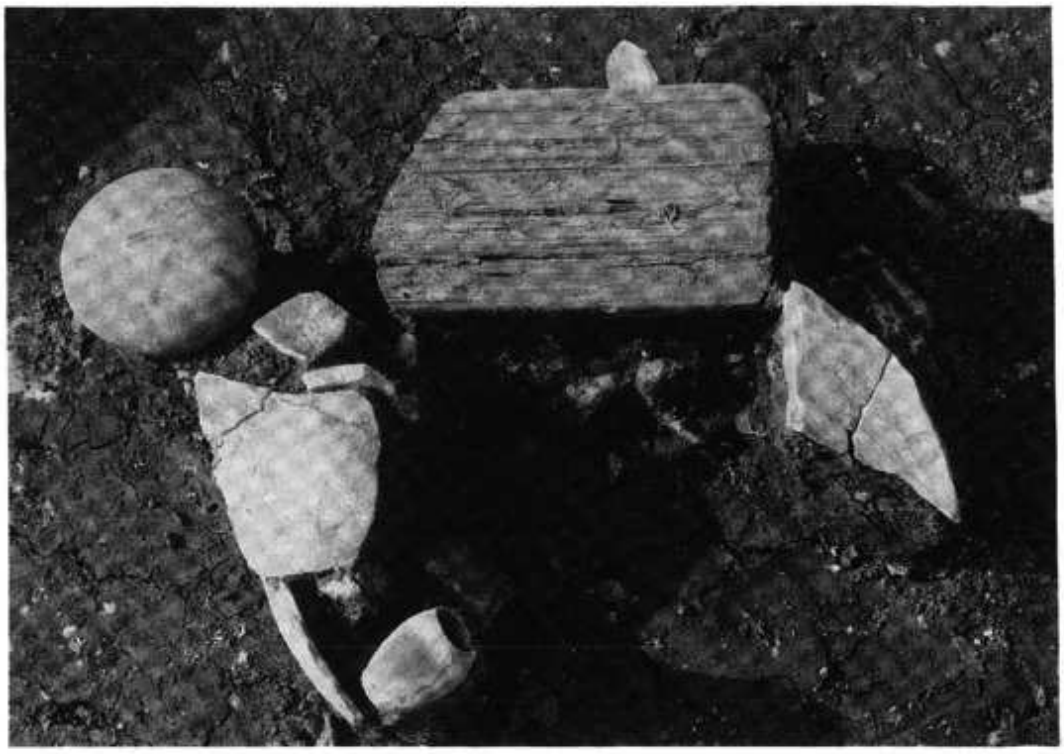
図版 9



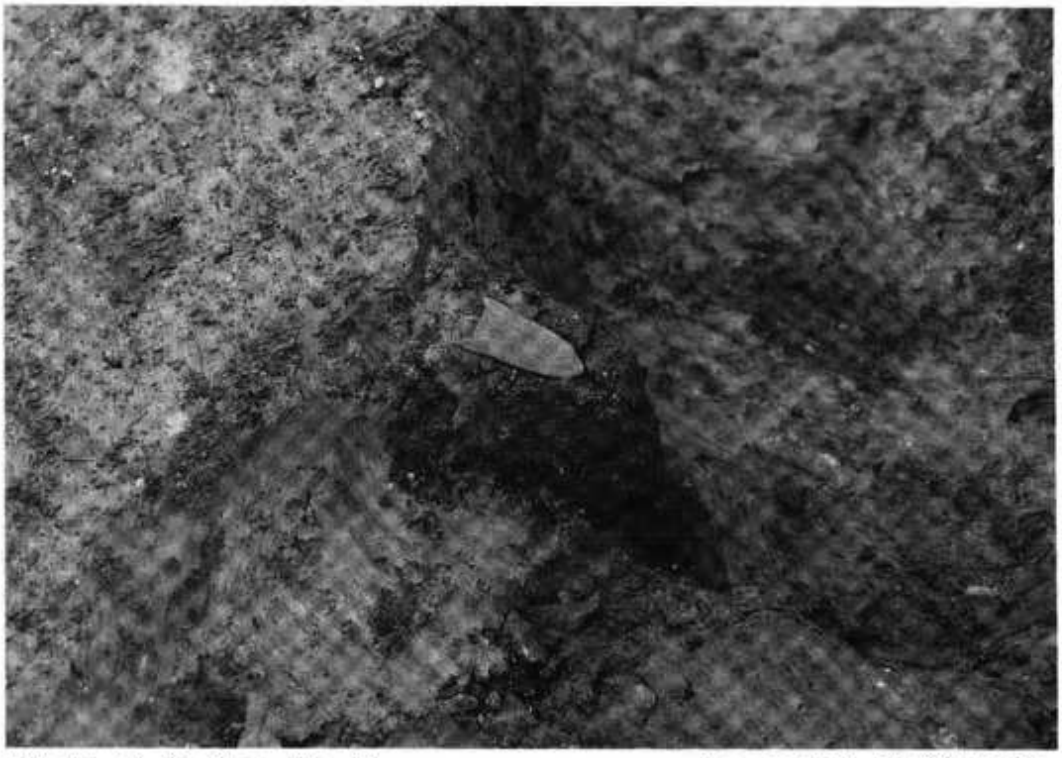
HN　G－7－C・G・K（90－1）　　Aトレンチ SD－01土器出土状況（北より）

HN　G－7－C・G・K（90－1）　　Aトレンチ SD－01土器出土状況（北より）

図版10

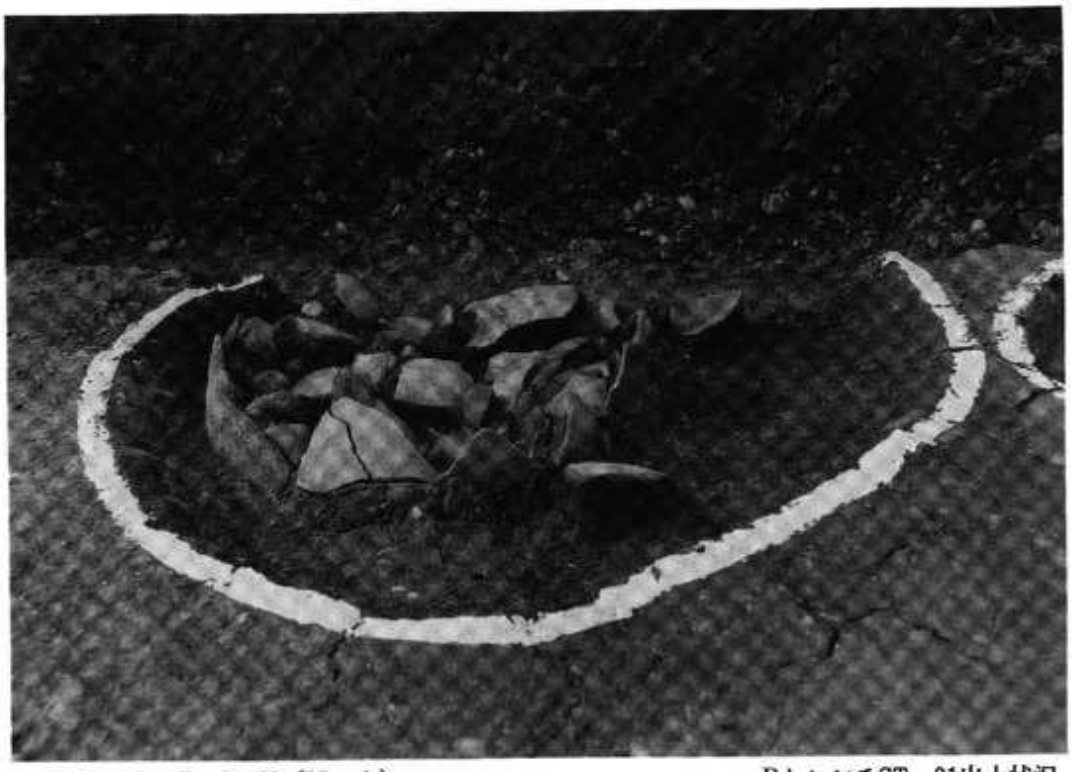


HN　G－7－C・G・K（90－1）　　AトレンチSD－01土器出土状況

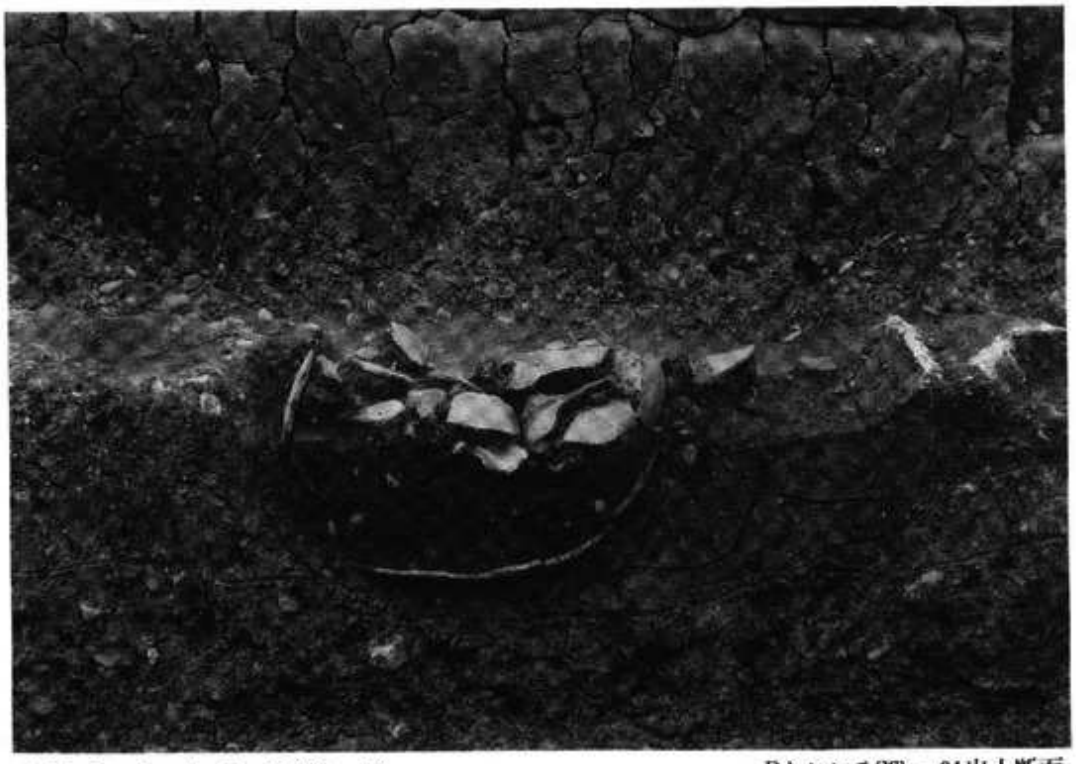


HN　G－7－C・G・K（90－1）　　AトレンチSP－01銅鏃出土状況

図版11



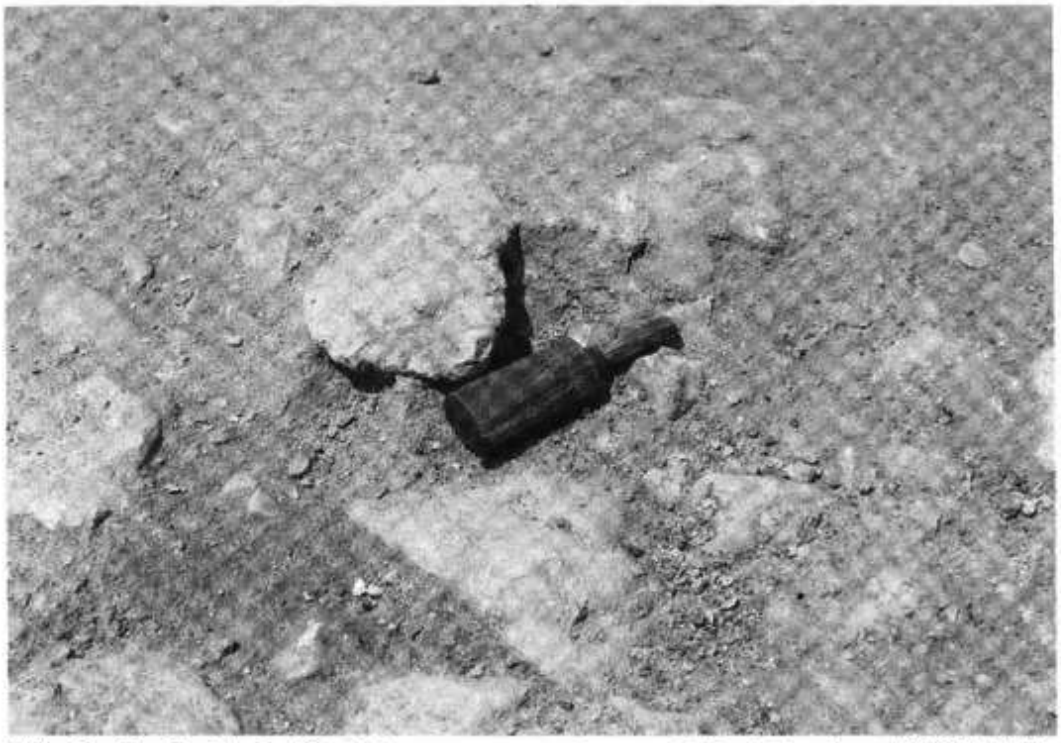
HN　G－7－C・G・K（90－1）　　Bトレンチ ST－01出土状況



HN　G－7－C・G・K（90－1）　　Bトレンチ ST－ 01出土断面

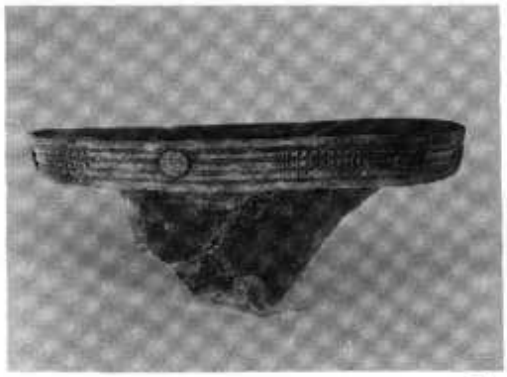
図版12

HN　G－7－C・G・K（90－1）　　BトレンチSD－18土器出土状況

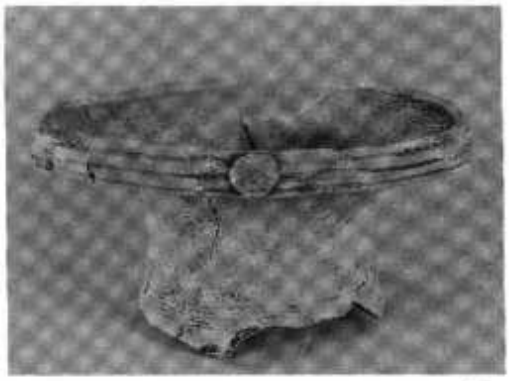


HN　G－7－C・G・K（90－1）　　BトレンチSD－18ミニチュア横槌出土状況

第13図



1



3

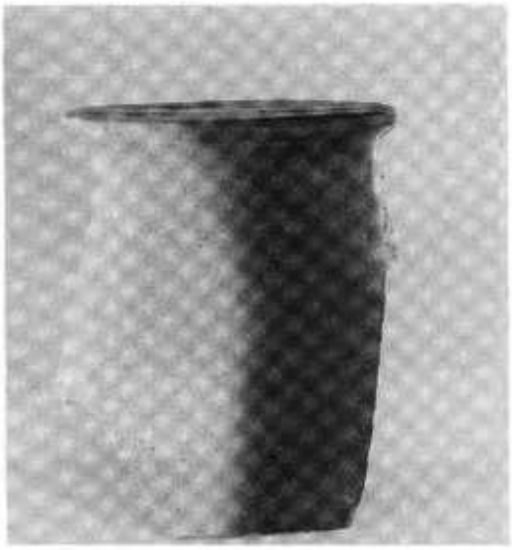
5

6

HN　G－7－C・G・K（90－1）　7

出土遺物(1)（SD－01埋土上層）　8

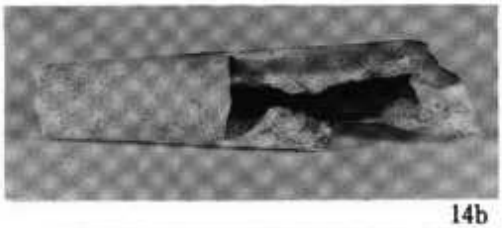
第14図



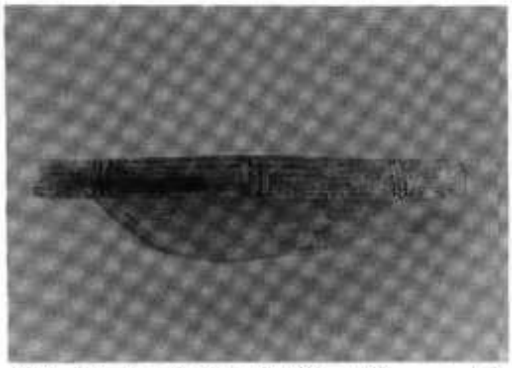
12

9

14a



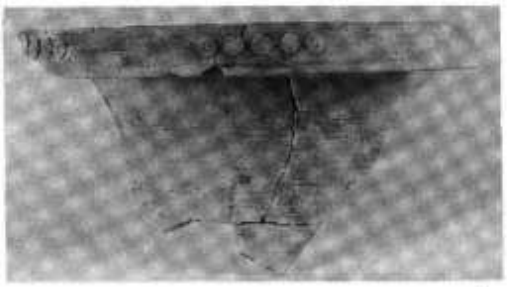
14b



HN　G－7－C・G・K（90－1）　13

出土遺物(2)（SD－01最上層・上層）　11

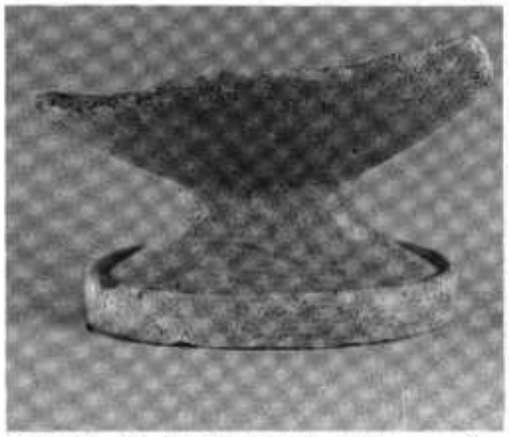
図版15



1

2

3



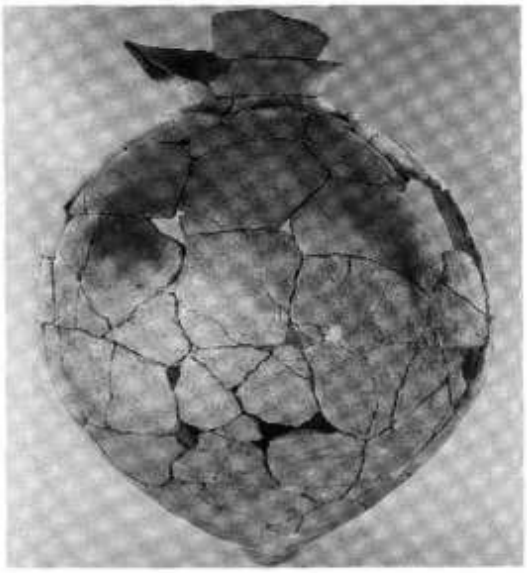
HN　G－7－C・G・K（90－1）　6

4

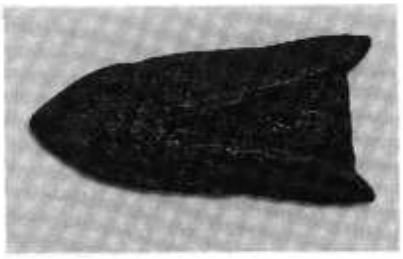
5

出土遺物(3)（SD－18最下層）　9

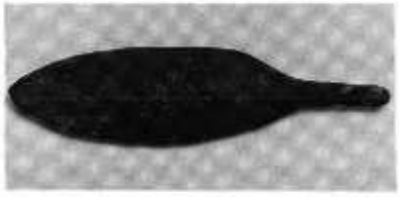
第16図



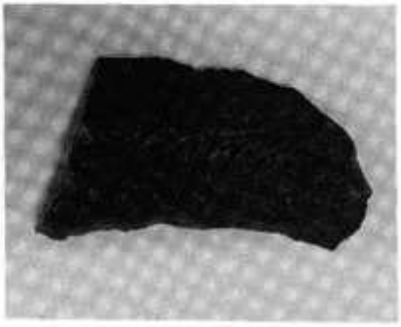
HN　G－7－C・G・K（90－1）　4



3



1



3

出土遺物(4)（ST－01・SP－01他）　4

平成２年度　埋蔵文化財発掘調査概要
発行日　平成３年３月31日
発　行　茨木市教育委員会
印　刷　西村印刷株式会社